

公立大学協会図書館協議会
研修会報告書

2002

公立大学協会図書館協議会

平成 14 年度
公立大学協会図書館協議会研修会

主 催 : 公立大学協会図書館協議会

担 当 : 岩手県立大学

日 時 : 平成 14 年 8 月 1 日(木)~8 月 2 日(金)

会 場 : 岩手県立大学本部棟 3F 大会議室

テーマ : 「これからの大学図書館のすがた」

参加者 : 27 大学 33 名

目 次

第 1 日

第 1 講義「電子化・国際化・資源共有」
千葉大学文学部教授 土屋 俊 氏 . . . 4

第 2 講義「図書館サービスの将来動向と職員の能力」
慶應義塾大学文学部教授 高山正也 氏 . . . 36

第 2 日

第 3 講義「貴重資料の電子化について」
東北大学情報シナジーセンター
学術情報支援掛長 日出 弘 氏 . . . 68

< 参加者名簿 > 94

第1講義「電子化・国際化・資源共有」 千葉大学文学部教授 土屋 俊 氏

千葉大学の土屋です。千葉大学の図書館は国立大学の基準からすると中規模館に相当しますが、大学の規模としては、学部学生の入学定員が約 2,500 名、大学院生を入れて 16,500 人位の学生がおり、教員は 1,200 人位おります。このように実際は、中規模というより比較的大規模なのですが、千葉大学の図書館はいろいろな巡りあわせで中規模になってしまったということです。職員は 20 人位しかおりませんし、非常勤の方を入れても 40 人位という規模です。ですから、逆にいうと大きいところも見えるし小さいところも見えるという状況におかれていたこともあり、また、いろいろ勉強したことがありますので、これから大学図書館の将来についてお話しさせていただきたいと思います。

国立大学は、今、大学法人化やこれにともなう大学再編のような渦に巻き込まれておまして、それは大きな流れの中として大学改革というのが日本における 90 年代の重要なテーマとして存在したのだと思います。大学改革と社会の情報化というものは、90 年代に世界の先進国を巻き込んで展開した二つの流れであり、この中に私達がおかれているという現在の状況になっているのです。大学図書館は大学の中にあって大学改革の波に巻き込まれることになるし、さらに、大学図書館は情報を扱うという特長があることから、社会全体の圧倒的な情報カテゴリーにも対応しなければならないという、二つの流れの中に置かれているということなので、これに対して、どのように対応していくかを考えなければいけないのです。実際には、毎日毎日はその日の仕事に対応することが多くて、なかなか、流れとか将来を展望するということが出来ないのですが、こういう機会に一歩退いて見て、全体を俯瞰することができれば良いのではないかと思います。

まとめるに際しては、「電子化・国際化・資源共有」をキーワードとして、将来を展望することが出来るようになった印象を持っています。実は、大学図書館にとってはこの三つは重要なことなのですが、「電子化・国際化・資源共有」を見直してみると、大学の図書館だけではなく日本の大学全体がこの問題に対応しなければならないし、このような言葉をキーワードにして、これからの大学のあり方を考えていかなければならないことに気づくと思います。

つまり、日本の大学の図書館が抱えている課題と、日本の大学が抱えている課題には非常に近いものがあるという印象を持っております。多くの場合、大学図書館は大学の附属施設なので、大学全体の方向性が定まらなければ図書館はどうにもならないという面があるにせよ、大学図書館でしっかりやっていくということは、大学全体の流れへの対応の中で重要な役割を果たすことになるのではないかと。大学図書館のあり方というものは、大学が抱えている問題を象徴的に表現するのではないかと。そういう状況が、今まで以上に役割を持たされるのではないかと考えられます。キーワードの「電子化」を考えてみた場合、キ

キャンパスの電子化への対応を当然考えなければいけません。研究及び教育、学習のあり方が計算機やネットワークに依存した形態になっていくわけであり、それに対し研究や学習の資料面を担う図書館の姿というの、当然、電子化に対応したものにならざるを得ないということは間違いないことなので、そういうことをやらなければいけません。

ところが、たとえば研究の基盤となるべき学術雑誌が電子ジャーナル化していることがありますが、一つの大学だけで賄ったり、交渉するのは非常に大変なので、コンソーシアムを作っていかなければいけないという状況に至っています。それは、資源共有的な話ですが、コンソーシアム的な取り組みはアメリカのみならず日本でも今までいろいろ行われており、その最も典型的な例がILLです。多くの場合ナクシスILLシステムを使って仕事をされていると思いますが、これが資源共有になっています。現在、ナクシスILLには大学以外のところも含めて800機関が入っていますが、大学図書館の間では年間約100万件の業務が処理されています。OCLCは参加館4万館で870万件処理されているということなので、800機関100万件を比較すると日本のILLはなかなか効率的に動いているのではないかと思われれます。

これからは、オンライン・デ・バランスというのが、いろいろ試みられている図書館はあると思いますが、要するにメールで質問をきく、あるいはチャット形式になる、共有していかなければ一つの図書館で全部答えることは大変なので、データベース化していくとか、あるいはメーリングリストで受けて答えられる人は答えるとか、いろいろな方法があると思います。このようなことを国際化するというので、国際ILLというものが、今、取り込まれつつあります。実際は、月間数十件までいかず月間数件なのでたいして増えているとはいえませんが、アメリカとの間でお支払いをして、国立大学みたいな複雑な会計制度のもとでも、ちゃんと、むこうからお金を取ることが出来るような仕組みをつくって、今、動かしつつあります。国際ILLについては、ナクシスILLシステムに入っている大学にはご案内が届いていると思いますが、国公わたくしに関係なしにILLを利用出来る状況はできあがっております。

しかしながら、ただ助け合っているだけではなくて、世の中のそういう状況に対し、たとえば学術雑誌高騰であるとかそのようなものに対し、むしろこちら側から積極的にものを言っていかなければいけないわけですが、残念なことに研究的な世界というのはもう完全にインターネットと同じくボーダーレスになっていて、国境を越えているんな事態が起きているので、当然国際間の協力が重要となってきています。ここにあげております、ひとつはICOAC、さっき言いました外国雑誌、特に電子形態の学術雑誌を購入するコンソーシアムのコンソーシアムというのが1998年から正式に発足して動いています。ここは、非常にがんばっていて、電子ジャーナルでウォークイン・ユースを無条件で認めさせたという実績があり、現在、ほとんどの出版社でウォークイン・ユースを認めるようになっていきます。たとえば、ウォークイン・ユースを認めるということは、隣が製薬会社だったりすると、隣から来て医学雑誌の記事を読んだりすることは何でもないということになります。しかしながら、図書館が実効的に監督できないという状況がありますし、電子ジャーナルがサイト・ライセ

ンシングになってしまった場合は、図書館でなくても研究室でも読めるわけですね。したがって、チェックできない以上は、認めるというようなことを契約書の中に書く、というような要求を出すというようなことを、ずっとやってきていて、だいたい言うとおりになっているという状況です。スパークというのは、あまりにも外国雑誌が高すぎるので、もっと安い、たとえばエルゼビアとかで出している非常にいいものと同じ位のクオリティのものを、五分の一くらいの価格で出して、競争性を創出してそのことにより無理やり安くさせようという運動です。かなり無謀な運動といえは運動ですが、実際にすでにいくつかの成功例は出ています。多分、我々が今考えなければならないことは、この三つのキーワードを巡っていくと大体カバーできているのではないかという印象がありましたので、この三つのキーワードに絞らせていただきました。

最初に戻りまして、今の日本において大学と大学図書館との関係はどのように考えていけば良いのかということ、おおよそこんなまとめ方をしてみたいと思っています。さきほど言いましたように、1990年代から2000年にかけて、あるいは1993年からの十年間と言ってもいいですが、今年にいたるまでの十年間におきていることは、「大学改革」と「社会の情報化」というのが同時進行したということです。ただでさえ大変なことが二つやってきたと言うことです。これは、後で細かく問題にしたいと思いますが、「大学改革」というのは、日本ローカルな問題であるということです。つまり、「大学改革」「大学改革」と叫んでいるのは、現在の段階では日本だけです。イギリスの場合は、良かったという評価をする人と悪かったという評価をする人がいますが、たとえばイギリスの場合ですと、80年代から90年代にかけていわゆる「大学改革」は終わっている状況です。サッチャーが古い大学の教師を、かたっぱしから首を切って新しい大学をたくさん創ったというわかりやすい事実象徴されます。アメリカの場合は、今、隆盛を誇っていますから特に改革の議論はおきていません。ヨーロッパではいくつか問題があるところがありますが、こんなに「大学改革」「大学改革」と言っているのは多分日本だけだろうと思われまので、これは全く日本ローカルな問題だということになります。日本にいなきゃよかったという話ですね。ところが社会の情報化というのは、これは先ほど申しましたように、先進諸国すべてを巻き込んで展開しているグローバルな問題であるということです。このローカルな問題とグローバルな問題が、一気に同時にやってきたというのが1990年代から現代にかけての状況だと、ご理解いただければ良いと思います。ですから、とっても大変な十年間をいままで過ごしてきたということになります。そのなかで、大学の役割というのは、「大学改革」というのは、なぜどのように求められようになってきているのかということなのですが、基本的には、近代からの脱皮というのが、「近代の超克」というのが昭和10年代からずっとあるのですが、日本近代という中で果たしてきた大学の役割というものから一歩前に進まなければならないという風に、誰が考えたかよくわかりませんが、方向性として出ていることがあると思います。

つまり近代日本における大学の役割というのは、基本的に指導的な人材の養成というところにあったわけです。明治時代にかけて、日本の大学制度の一番基礎的な部分は整っていくということになりますが、そこで、たとえば工学部

を出た人は日本の産業を直接いじる人もいましたし、同時にその後出来る、このあたりでは盛岡高等農林などの専門学校を育てるのが東京大学の農学部とか工学部が重要な役割を果たしていたわけです。高等農林とか高等蚕糸とか高等鉱山とか、そのような学校が日本中にたくさんあってそういうところでは、地元の特有な産業にとって重要な知識を蓄積し、さらに改良し、さらに伝達するような役割を持っている学校はたくさんあったわけです。そのような仕組みの中で、地場の技術者は育てられて、日本の近代化は成し遂げられたというストーリーになっているわけです。東京大学の法学部をみれば、法律の専門家になった人もいますが、むしろ多くの人が政府の中に入って日本の近代化のリーダーシップをとるということをやっていました。早稲田大学では、非常に多くのジャーナリストを生み出していきました。しかし、ジャーナリストというのはエリートでありまして、社会に対して言論という形でリーダーシップをとっていきました。このような人を育てるのが大学だというのが、基本的に明治時代・大正時代・昭和、そして1945年以降の日本の戦後復興もやはり同じような人材養成システムに支えられてきたということがいえます。

ところが、1970年代に一気に同世代人口に対する大学生の比率がふえました。それまで20パーセントだったものが30パーセント、さらに40パーセントというふうになりつつあるというこの変化にちゃんと対応してきたのかというのが、基本的には大学改革を求める最も重要なポイントのひとつになると思います。したがって、人材養成といっても、指導的とはいえないような人材を養成しなければならないわけで、その人材養成として狙わなければならないことは変化せざるをえないわけです。まったく同じような意味で、「富国強兵」「殖産興業」を国の政策として掲げて、それに向かって大学の在りかたというのは決まっていたわけです。

たとえば、日本の工学部は、基本的に技術者養成及び技術者の先生を養成するというのがポイントでありました。それでは、技術はどこにあったのかというと日本にはありませんでした。東北大学は自分たちで一生懸命やっていたということを主張する大学ではありますが、基本的には先端技術というのは日本にはなく海外にあるということになっておりましたから、工学部の先生の仕事は本質的に翻訳でした。指導的な人材の養成というのは、翻訳が上手に出来るかということであり、つまり、外国語で書いてあるものを外国語が出来ない日本の学生に対して教えて身につかせることが出来るかということが、実は学問の本質的な部分だったというわけです。もちろん、文科系の学問のほとんど全てそうだったというのは、みなさんお気づきの点だと思います。したがって、「人材養成」という話と「国策直結」という話と、「翻訳的学問」というのはみんな似たようなものです。同じことの三つの側面にすぎないということなのです。

これが、日本近代の大学のあるひとつの基本な役割だったとすると、特に国立大学の場合は、その役割を担わされている部分が多いのですが、それが、大学に来る人が増えると、そういうことを言っていられないような時代になったのが、1980年代の状況だったのだと思います。その状況に対して、実は大学の

教師と言うのはサボりがちなので、一切積極的に対応しなかったのが実情だと思います。1990年代になって、ある意味、トップダウンで文部科学省の政策として「大学改革」を打ち出さなければならない背景と言うのは、70年代から同世代人口に占める割合が大きく変化したのもかわらず、80年代に大学のほうから主体的に取り組みがなかった。それに対して「やはり、まずいんじゃない」という常識論を述べたというふうな状況だったと思います。これにより、大学改革のプレッシャーが日本に特有なものであるかということにつきましては、このような説明をすればご理解いただけるものと思います。

そうすれば、当然、この変化に対応して大学図書館というものも変化していかなければならないだろうということになります。当然、教育における支援機能というものも変っていかねばならないだろうということになります。これは、単に電子化ということではなく、今までであれば、1960年代までであれば大学に来る学生は高校のころ本という本を読んだことがありました。しかしながら、1990年代から現在は、すでにお気づきのことと思いますが、大学に来る学生は、高校のころ本を読んだことがありません。そんな馬鹿な、とおっしゃる方がいらっしゃるかもしれませんが私の経験をお話します。90年代半ばのころですが、推薦入学で面接をするのですが、その際、最近読んだ本で印象に残った者はなんですかと尋ねると、一番多い回答は、「高校に入ってから受験勉強に忙しくて本なんか読んでいない。」という生徒さんが多く、中には、「私は、月に1冊本を読んでいるので友達の中では読書家と言われて尊敬されている。」という、ずうずうしい生徒もいるような状況です。私は、1952年生まれですので、それほど年をとっているつもりはないのですが、高校のころ勉強するということと本を読むということは、かなり等しかったような気がします。ところが、今の高校生にとっては・・・推薦入学で来る子達は、比較的成績が良いわけなのですが。あまり成績の悪い子は推薦してきませんので。そういう学生達にとって、本を読むという行為は、勉強するということは関係ないことなのですね。これは、そんなものかという風に思って、それ以来全てのことを断念しましたので、つまり学生には何も期待しない！ということからスタートしないと大学教育が成り立たないということにしたので気は楽になりました。しかしながら、授業は楽なもので、昔知っていることを言ってみると知らないわけです。

ところで、みなさんバートランド・ラッセルを知っていますよね。つい、いつも不安になって聞いてしまうのですが、最近、演習に学生が十数人いまして、バートランド・ラッセルを知っているかどうか、千葉大学文学部の2年の学生に聞いたのですが、一人も知りませんでした。そういう時代なのです。ある年齢以上の方は、バートランド・ラッセルは、高校のときの副読本で読んだという方がいらっしゃると思います。いまや高校の副読本では、バートランド・ラッセル絶対使えないのです。あまりに難しすぎて。昔は、バートランド・ラッセルの英語はやさしいから使うと言われていたのですが、20年間でどうして難しくなってしまったのだらうと思うのですが、しかし、バートランド・ラッセルを知っている学生はもういないのですね。文学部の学生でさえ知らないのですから当然理学部とか医学部の学生は全然だめですね。本当に何も知らないで

入ってくる子ども達に対して、どういう風に教育したらいいのか、あるいはその教育の中でどういう風な資料を揃えていかなければならないのかというのは、これまでのように先生方が集めた資料を図書館に置いておけば役に立つという時代ではなくなっています。独自の選書をしていかなければならないという時代になっています。

大学図書館は、外国雑誌を購入しておりますが、これは、大学の中に雑誌へ投稿した執筆者がおり、その投稿された雑誌を購入して、それを利用に供するという形で買ってくるという重要な役割を果たしていたということです。しかし、電子ジャーナルになると図書館に来なくても読むことができってしまうことから、当然、中抜けしてしまいます。今まで、研究図書館と称する、称するところまではいかなくても研究的な学術雑誌を購入することが重要だと考えていたところが、ほとんど実質的な提供機能は出版社のサーバーが直接やるようになったため、利用者からは図書館が見えなくなってしまう。仲介者にすぎなくなってしまう。もちろん、今までも似たようなものだという方もいらっしゃるわけです。じつは、これは、ショックなことなのですが、国立大学でも電子ジャーナルに取組もうということで、2000年の9月にエルゼビア出版社から出ている雑誌をどの位購入しているか2週間で返事をもらうという調査を、全図書館にお願いしたことがありました。

しかし、後で聞いてみたら、これは無謀なことだったということがわかりました。なぜかということ、大学図書館というのは、基本的にどの出版社がどの雑誌を出しているかということを知らないわけです。紀伊国屋か丸善かどこか代理店を呼んできてこれが欲しいといえば仕事は済んでいたのです。たとえば、あるタイトルがある出版社から別のタイトルに移動したとしても、そんなことは気にしないで、「丸善さん、ちゃんとやってね。」といえばそれで来年も入ってくるようになっていたのです。これは実際、もともと、今まで何もしていなかったのではないかといい人もいますが、・・・まあ、批判は正しいですね。

さらに、大学全体が人材養成ということから脱皮していくということは、どういうことを意味するかということ、要するに大学というのは、基本的に製品としては人材を出しさえすれば良いというのが今までのやりかただけです。もうひとつは、論文を書けば良いということであり、研究をした場合には論文。教育をした場合には人材ということでもよかったわけです。それにたいして、研究成果の直接還元とか、教育環境の市民への直接開放を求めることが、今の日本では重要な状況になっております。直接的な連携というものを大学が要求されているわけです。ところが、直接的に社会と結びつくということは、今までの大学のスタイルからすると非常に難しい面があるということで、今まで、そういう付き合いをしてきたことがあるのにはどういうものがあるかということ、多分、大学図書館の一般市民開放は、大学の施設開放の中でも一番早い取り組みとして、しかも一応うまくいっている取り組みとして伝統があると思います。そういう意味では、図書館みたいなところが接点にならざるをえないと思います。後ほど、それ以外にもどのような連携の仕方があるのかということ若干申し上げたいと思います。やはり、最初に申し上げたように、大学と大学図書

館と両方をみても、それぞれの抱えている問題というものが共有されていることを理解していただけるのではないかと思います。

だから、図書館がちゃんと変革出来るかどうか、日本の大学改革がうまくいくかいかないかということについて非常に重要な役割を果たすことは間違いないと思います。大学図書館の行き方自体が、日本の大学を良くもするし悪くもすると言わざるをえないのです。

簡単に復習しますと 90 年代の大学改革というのは、このような内容を持っていたということ、記憶を呼び起こしていただきたいと思います。すなわち、最初に設置基準の大綱化と言うのがありました。これは、国立大学の場合は、教養部の廃止という組織上の直接的な結果を伴って起きたわけですが、おおまか、何単位と決めれば、一番典型的なのは、一般教育科目という概念が廃止されたということで、大学ごとに好きなようにやってくださいという形になったわけです。これは、一般に教養教育の改革といわれています。それまでの、教養教育は高校のときにやったことを繰り返しているにすぎない。専門教育の単にダイジェスト版を教えているにすぎない。語学はつまらない。体育はいったい勉強なのか。ということで、教養部、あるいは一般教育科目をやっている 2 年間というのは遊ぶ時間とかレジャーランドと呼ばれていた部分は、それはまずいだろうとなった。その、レジャーランド化が著しかったのはなぜかという、昔の旧制でいうところの予科と本科であるとか、旧制高等学校と大学といったような関係をそのまま平行移動させて作ったのが新制大学の教養部と専門学部ということになります。

しかしながら、それは、専門課程に行く人は専門家になるはずの人だという、指導的な人材になるはずだという前提で初めて意味を持つのですが、70 年代以降あまりに多くの人が大学に入ってしまったので、いちおう人間だって自然物ですから、当然、標準分布をするわけで、したがって、半分まできていればひどいことになっているわけです。

さらにもうひとつは、偶然の産物ではあるのですが、大学院の重点化ということが行われました。大学の学部課程というものが、指導的な人材の養成を担っていた時代がもはや終わって、そのようなレベルの人材養成は大学院に移行したということ象徴的に意味していると考えていただければよろしいと思います。さらに、1997 年に科学技術基本法が作られて、内閣府に科学技術会議が置かれ、基本計画で 97 年から 8 年間で、全体で 40 兆円の投下をすることが行われています。基礎研究の振興を行うということで、予算が苦しい中でもそれだけの投下をしていくという決断が今もなされているということです。そして、さらに研究成果の直接的還元が推奨されて、政策的なイニシアティブで展開したことがこれだけあるということです。さらに、1990 年代の後半になると、大学のパフォーマンスを上げなければならないということで、競争的という言葉がキーワードにして色々なことが行われるようになります。教育の場合は、競争的だというのはなかなか難しいのですが、研究成果に関しては競争的環境を作って競争的資金、これを他人事だと思ってお聞きになっているかもしれませんが、この競争的資金ということでみんな競争するようになって良かったねと

いう話にはならないのです。図書館から見た場合には、もしかすると、国立大学、東京のことかもしれませんが、競争的資金というのは基本的に図書の購入などに回らないことになっています。競争的資金でとってきた研究費というのは基本的には直接経費として投下される、つまり人を雇う、実験器具を買う、薬品を買うといったことに使われるのが趣旨なので、研究の基盤を充実させるということは、競争的資金の目的ではないということです。しかし、トータルは決まっていますから、結果としては競争的資金を取られた分だけ基盤的なお金は減って降ります。平成 14 年度は、学生用図書経費は国全体で 4 割削減になりました。4 割削減と言うのはひどいことですが、半分になってしまったということです。二千万とか三千万とかもっていた大きな大学でも、一千万円台に落ちてしまったので、何も買えない状態になっているだろうということです。それから、さらに、産学連携というのが推奨されることになります。70 年代の前半に産学連携と言えば、そのころは産学協同と言ったのですが、大学から追放されるという時代でしたが、20 年もたたないうちに、30 年もたたないうちにそれがむしろプラスに向かうという変わった国だなあとということです。さらに、それが象徴的なひとつの出来事としては、今月の 3 日に知的財産戦略大綱というのが発表されることになります。そのなかでは、大学は、どんどんどんどん知的財産を産み出して売りまくりゃいけないということで、知的財産戦略大綱というのは知的財産戦略計画かというのが多分、この次か次の国会でできて 24 兆円の投資が行われると聞いております。それで 24 兆円が稼げるパテントを取れるのかと言われると非常に辛いところだと思いますが、そういう方向に向かっています。

しかしながら、知的財産と言うのは特許権だけではなくて、著作権であり知的財産権でもあるわけです。ですから、大学の先生たちは著作者だということになります。ところが、外国雑誌に投稿するとその著作権は、多くの場合、その雑誌にとられてしまうわけです。したがって、どんどん取られるということは、知的戦略大綱からいうと非常にまずいのですが、ところが知的戦略大綱を書いている人たちはパテントのことばかり考えていて、そういうことはまずいなんてことは一言も書いていません。そうすると、どこかで守ることをやらないと、知的財産戦略ということを考えている全体の方向にとっても非常に困るわけです。

となるとどこでやるのかというと、ここでの話ですが結論としては図書館でやるしかないわけです。ほんと！という気もするのですが、図書館以外に著作権についてわかっているところがないのですよね、大学の中で。ですから図書館でやるしかないのです。そんなことをやるためには、どういう変革が必要かということを考えなければならないだろうと。大学のほうが全体として、知的財産戦略大綱の中には、全国 80 程度の大学に知的財産戦略本部を設けると書いてあるのですが、そんなことをやったとしても、何もわからず特許！特許！と言っても始まらないだろうと、知的財産のなかには特許があるけれども工業所有権と言われている、産業財産権と言われているものだけではなくて、著作権もあるのだということを言っていかなければならない。これは大学のほうではやってくれないんですね。図書館で声をあげなければ、そういう問題があると

ということすら気づかないのが、今の、日本の大学の状況だというふうに考えていただきたい。がんばってください！ということです。

あとは、世界レベルの研究ということですが、さきほどいいましたように、外国の雑誌社、外国の学会が出しているところに投稿して仲間に入れてもらうという形のスタイルで研究者は努力しているわけです。つまりに日本から出している英文の雑誌のなかで国際的に評価を得ている雑誌というのは、もしインパクトファクターというのを信じるとするならば、毎年3誌か4誌です。上位30誌いくと、もう零点レイいくつになってしまいます。ですから、ほとんど日本の学術出版というのは国際的に相手にされていないのも同然と考えていただきたい。しかしながら、そこでは日本における研究の様々な蓄積であるとか、これはつまり、この論文をこの雑誌に掲載するべきか、というときには、査読するという仕組みでもって同僚研究者が判断するわけですが、やはり色々な系列があるのでこれが当然と思っていることは書いていないとか、書いていないとダメとかなることもあるのですが、しかしながら、ある日本の脈絡ではこんなのは書かないのが当たり前という内容があるわけです。外国に出したなら落ちるけども、日本に出したらばとおる。日本の雑誌は二流だ、三流だ、四流だ！となったりすると、いくら日本の雑誌にやってもダメだ！日本の雑誌そのものを強くして、そのレベルが高いという状態にしないと、日本の学問は、最終的に国際的なリプレゼンテーションが下がってしまうということになるわけです。ですから、たとえば、こちらの学長であるとか政府機関で政府のいろいろな審議会で大きな声で騒いでいるような偉い年寄りたちというのは、実は、そういうところへ出かけて行って、戦って勝ってきた人たちなのです。

ところが、そういう人達と同じにみんな出来るかというのできやしないわけです。そういうことが出来るのは、ほんの数人ということですね。しかしながら、全体としてのレベルを上げなければならないとすると、最低限、全体のレベルが上がったように見せなければならぬ。そのためには、日本から強い雑誌を出さなければいけないのですが、そんなのは出来ない。なかなか出来ない。日本の学界というのは、さきほど言いましたように、日本の学問の本質、すなわち翻訳・輸入というのに浸されておりまして絶対できない。したがって何をしなければいけない！ということこれも図書館ということ「そうです。」ということになりますが、むちゃだなあという話もありますが、まあ、やりましょう！やりましょうということは、どうするか考えてみましょうということです。統廃合の話は、気がめいるのでやめましょう。

それでは、大学の改革をどういう方向に持っていきたいのかという話なのですが、これは推測です。大学課の課長に話を聞いてみても、先は良くわかりませんというふうに言っていますから、推測しているだけなのですが、基本的にはアメリカ型に移行するということです。イギリス、ドイツというのは、実際、公称50%の進学率を持っていますが、アメリカ、日本というのが本当の意味での50%です。イギリスのたとえば50%というのは、それまでの短大レベルのものも全部四年制にしてしまうとか、専門学校を四年制にしてしまうということで、サッチャーのやったむちゃくちゃな政策結果そうなかただけで、本当の意味で高等教育と言えるのは日本とアメリカの50%型だろうという形になってい

るわけですね。そうすると、50%というのは大学と短大をあわせた数字ですね。専門学校を併せると70%ですから、高校を卒業してすぐ働き始める人は30%しかいないわけですね。で、あるいはフランス・ヨーロッパ型のエリート主義をとるか？いまさら進学率を落とすわけにはいかないの、やってくる方向としては、日本としてはアメリカしかないと思います。隆盛を誇るアメリカ高等教育システムは、基本的には、強力なアンダー・グラジュエイト教育と強力な研究大学における研究による二元構造により出来上がっています。典型的なケースをあげますと、つい我々はすぐ大学を見ると、スタンフォードとかプリンストンとかイエールとかハーバードをみてしまうのですが、あれは例外です。アメリカの大学の非常に多くの部分を担っているのは、州立大学です。州立大学というのは、一大学が10万人とかをそんな規模で受け入れているわけですね。日本は、70年代に進学率が向上するわけですが、どこが引き受けたかということ、わたくしりつ大学が引き受けたのですね。文系わたくしりつ大学が引き受けたのですね。文系わたくしりつ大学というのは安いんです。安いというのは、どういうことかということ、たとえば一人の先生が400人入って授業をしても、一応、教育が成り立つというのが法学部の教育ですね。それに対して、やはり一人十人でないとダメだとか、一人五人じゃないといけないというのが理科系の教育だということなので値段が全然違うのです。ですから、もし本当に国立大学を民営化した場合には、文系大学は存続可能です。つまり授業料収入だけで、まあ建物をもらえれば話ですが、授業料収入だけでかなりやっていけるはずで、理系は絶対ダメです。なぜかということ、日本の授業料は50万円ですから、そんなものでやっていけるはずはないので、多分300万円位にしなければならぬと思います。たとえば、アメリカの、トップクラスの大学の学費というのは大体3万ドルです、今、コーネル、シカゴ、ハーバード、スタンフォードというところは3万ドルですから、色々な費用をいれて全部で400万円を見込まなければいけません。重要なのは、強いアンダー・グラジュエイト、どこでやっているかということ州立大学！非常にクオリティの高い、大学院のないわたくし立のアンダー・グラジュエイト・カレッジといわれている、これまたたくさんあるのですが、そういうところで教養教育をするということで4年間教える。何が専門というわけではないのですが、リベラル・アーツとかアーツ&サイエンスとかいう名前でもって自分の好きなことをやらせるけれども、基礎的なことはちゃんとやると。そういう人たちが、研究大学の大学院もしくはプロフェッショナル・スクールすなわちメディカル・スクールとかロー・スクールとへ行くという構図になっているわけです。最近の、ですから法科大学院構想みたいなものは、長い目で見ると、本人達は考えているかどうかはわかりませんが、アメリカ的な体制への移行を示しているのだらうと思います。日本の10年後を知りたいければ、アメリカの10年前を調べれば大体わかるのではないかなというような感じがするところです。アメリカのリサーチ・ユニバシティ・システムが大体こういう感じで成立したのは、実際に80年代です。しかしながら、80年代はレーガンが大統領をやっていて教育予算をかなり締めましたので、とくに州立大学などで非常に苦しい状態が続いた。そのなかで、ちょうど日本の今、大学改革で国立大学がさらされているような状況に州立大学がなって、

色々努力して大体 90 年代の前半で州立大学の中でもある部分は、60 から 70 大学は、リサーチ・ユニバシティーとして認められています。それにたいして、わたくし立大学で本当にリサーチ・ユニバシティーといえるのは、20 か 30 位ですね。100 から 150 位ですね。向うで、大体、数え方なのですが多めに数えて 3000 位の大学がありますから、そういう中で 100 とか 150 位が、今、アメリカでリサーチ・ユニバシティーと言われているものだということになります。リサーチ・ユニバシティーは、どうやって経営しているかということ、授業料が高いものですからそれだけではやっていけないので、アメリカの連邦政府のお金をたくさん持ってくるという仕組みになっています。お金をもってきて、施設と人員を使って連邦が大事だと思う研究をするのだから、大学にもそれなりの基盤整備のお金を入れなければならない。日本でも国立大学で間接経費が正当化されましたが、今、大体、10%から 30%です。しかしながら、アメリカの場合は、ひどい場合は連邦政府から入るお金の 70%が間接経費という大学もあります。つまり、そういう大学は研究が強くなると、たくさん連邦政府からお金が入って間接経費がたくさんあるので、実は教育の基盤も充実しているという良い循環に入っているわけです。こういう循環を日本で生み出せることが出来るかどうか良くわかりませんが、そういう形の二重構造というのはいいことかもしれないし、ひどい場合は二極分化するということが当然予想されるということになります。ですから、こういうのを狙っているのかなあというような感じがしないでもないということです。そうすると、日本の大学としては、アメリカ的なアンダー・グラジュエイトの部分というのやらなければならないし、リサーチ・ユニバシティーとして強くするということの両方が望まれていることになります。大学によっては片方ということになるかもしれませんが。当分、アンダー・グラジュエイト・エデュケーションというのをやらなければいけない！東京大学と京都大学が学部をとらないで、本当に大学院大学になれば、日本の大学は良くなるという風にかねてから色々なところで申し上げているのですが、どうして東京大学に学部があるのですか？あんなに大学院大学と言っているのに！というふうに、文部科学省の大学課長に聞いたところ、「だって、ハーバードだってプリンストンだって、学部はあるじゃないですか。」というわけのわからない返事の仕方をされて逃げられてしまいました。つまり、多分これから、アンダー・グラジュエイトのほうを完全になくす大学というのはそんなに多くない！今は国立大学ではそれが四つほどありますけれども、そんなに増えないということで、アンダー・グラジュエイト教育というのから我々は逃れられないという言い方をしてはいけないわけですが、逃れられないということです。それから、リサーチ・ユニバシティー、これは全てではないのですが・・・リサーチ・ユニバシティーとして意識しなければならない。この二つです。

この二つの目的に対して図書館としてどういう対応をするかというのが当然、図書館として重要な問題になってきているということです。二極分化すると、今みたいに一つの図書館ですむかどうか良くわからないわけです。アメリカの大きな大学に行かれた方はご存知と思いますが、アンダー・グラジュエイト・ライブラリーというのとリサーチ・ライブラリーとかいうのとメイン・ラ

イブラリーとかがふたつに別れているのが非常に多いですよ。そういうような感じに、もしかしたならなっていくだろうということです。法科大学院みたいなものができたとすれば、ロー・ライブラリーというのはまた、非常に特殊な伝統をもっていますので、そういうのができてくるのかもしれないとか、いろんな可能性が考えられということです。

それで、要するに、いま求められているのはどういうことかということ、もう一回整理してみますと、研究は世界水準でなければいけない。これは全部に求められているわけではないということです。それから、教育もちゃんとしていなければならない。これは、ほとんどの全ての大学に求められるだろうということになるだろうと思います。そして、さらにそれを、教育とか研究を社会に直接還元するというスタンスがどうしても必要になるということで、これが今の、日本の大学改革の方向だろうというふうに考えられます。

さきほど言いましたように、もう一つの流れですね。日本ローカルではなくて、世界グローバルの流れとして社会の情報化というのが、まあ電子化といってもいいのですが、これが逃げる事が出来ない形で押し寄せてきているわけです。

インターネットというのが、まさに基礎になるようなそういう社会というのが作られつつある。5年前、1997年ですが、そんなことは考えられなかった。もしかしたら、そんなことがあるかもしれない。だけどいつのまにか5年の間に、もう、インターネット的な通信の仕組みなしに、個人的に生きて行くのはいいですけども、社会全体がもう生きていかれなくなっているわけですね。つまり、たとえば、電話網というものは非常にしっかりしたシステムとして長く存在したわけです。しかしながら、もはや電話網というのはインターネット・パケットを飛ばすためのインフラにすぎなくなっている。実際には、一つのインフラストラクチャーですので、インターネット・インフラストラクチャーのうえで、商業行為も行われれば、福祉も教育も行われるという形になるという状況になっているので、これはもうインターネット的な仕組みというのを変えてはもうどうしようもない。くわえて、今から5年前に携帯がこれほど普及するとは誰も思わなかったわけです。今は7千万台とかという話ですから大変なものなのです。ですから、このモバイル化というものがあって、やはり便利な生活をしたいと思うとやはり携帯があると便利かなという話であって、しかも便利かなと思って使っていると、たとえばそれを使って何でも出来るという話がだんだん可能になってゆく。そのうち携帯というのは、身分証明書代わりにみんな持つようになり、携帯には写真が貼ってあるというのはあり得そうな話ではあるのです。

そのうちインターネットは、単に社会の神経としての役割だけではなく、さらに知識の蓄積場所としての役割を持つようになってきたということがあります。

ですから、ワールド・ワイド・ウェブ全体がひとつの電子図書館という役割を持つようになってきているということです。一年前の統計なのですが、現在、ウ

ウェブのうえにどの位の情報が載っているかというのを調べた会社がありまして、一応7ペタ・バイトと言われています。ペタというのはテラの千倍。ふつう我々が生活しているのはメガの世界ですね。メモリーはメガ、何百メガ・バイトの世界ですね。ハードディスクは何十ギガ位の世界で生活していると思うのですが、その1ギガのうえがテラですね。今、大学なんかで大きいサーバーを入れたときのストレージは、「テラ」オーダーで、たぶん、くつついてきてしまいます。さらに、その千倍がペタ。7ペタ・バイトあるといわれています。

ただし、我々が簡単に「google」なんかで検索して入っていける完全にオープンなやつは、そのうちの500分の1といわれております。残りの500分の499はどこにあるかということ、いわゆる気象データとか、そういうものが、それぞれのデータベースサーバーの検索機能を通じてアクセスすることが出来るような、そういうデータというものがオープンなもの499倍あるということになっております。それを全部併せて7ペタ・バイトです。いま、その499の大きいほうを、最近ではビッグ・ウェーブと呼ぶのが習慣になっているようですけども、深いところにあるので見えないのです、直接。でもなんかすごいのです。すごい勢いで増殖していることは間違いないので、これが10ペタを超えてさらにペタのうえのヘクサというものがありますが、そういうふうに、どんどんいくという可能性が十分にあるということですね。

そうなったときには、もう大学の図書館なんかいらないというのが当然の結論になって不思議ではないわけですね。図書館なんかに居なくなると、自分の家に座ってですねネットワークに繋がっていればだいたいの情報は取れてしまう。

実際、アメリカの大学でとった様々なデータを見ますと、すでに二、三年前の段階で学生の90%が、「図書館なんかに行かない。」というふうに、「図書館なんかはなくても良い。」か、というふうに言っているということです。日本でそういう時代が来るのは、もともと国立の総合大学ですと大体、学生の2~3割くらいしか図書館に来ないんです。リピーターの人1割切るだろうと思いますから、そういうことから、もともと使われていなかった図書館がますます使われなくなってくるだろうということがほぼ見えてくる。「それで、ほんとにいいの」というのがあるわけです。

ところが、わが国においては非常に不幸な歴史があって、電子図書館というので、図書館を電子化するという試みに失敗しています。どういう形で失敗したかということ、アナクロニズムというやつで、1993年、先ほど申しましたように1993年は重要な年です。クリントン、ゴアがアメリカで政権に就いて、そしてその年、1月に就くのですが、4月にナショナル・インフォメーション・インフラストラクチャーという政策を打ち出します。NIIというやつですね。基本的には、通信と放送の統合を光ファイバーのうえでやるということだったのですけれども、そういうことが統合された暁に、どういう社会が、情報社会が見えるかというわけで考えたのが、それまで70年代80年代と蓄積してきたインターネットというものだったというわけなんですね。インターネットの歴史は長いので説明はやめますけれども、大体、アメリカで今のインターネットみたい

なものが始まるのは93年から94年にかけてですね。95年にサミットが開かれて、そこでグローバル・インフォメーション・インフラストラクチャートという話がいわれることになります。

それを受けて、94年、95年で日本は、たとえば国立国会図書館関西館構想というのを出したり、あるいは平成8年には学術審議会で「大学図書館における電子図書館的機能の拡充・強化について」という建議を出したりしております。これは1996年ですね。ここの、どこがかわいそうなのかということ、アメリカでは確かに93年から94年にかけてインターネットというのは普及が著しかったのですが、日本では96年に普及するんです。多分、ご記憶と申しますが、95年の年末になるまで、11月になるまでウインドウズ95はなかなか出なかった。出たら、別にインターネットは関係ないんですが、技術的には関係ないんですが、何故かウインドウズ95が売れてインターネットが普及したということになっています。したがって、我々日本の普通の人間がインターネットについて耳にするようになるのは、96年。95年以降から96年にかけてということになるわけです。ですから、それ以前は、普通の人でなく偉い人はインターネットについて全然知らないわけです。そこで電子図書館を構想したわけです。今でこそ電子図書館というのは、そうかやっぱりオンラインで利用するものだと思いますよね。けども、そのとき構想された国立国会図書館関西館というのは、来館型電子図書館です。では、大学図書館における電子図書館とは何であったかということ、「建議」をお読みになった方は思い出されると思いますけれども、一番大事なことは「資料の電子化」ということだったわけです。

具体的にどういうことをやったかということ、要するに電子図書館ってなんだかわからないでみんな構想したので、奈良先端大学ではむちゃくちゃなことをやったわけです。ペーパーレス・ライブラリーと称して・・・ですね、買って来たものを全部スキャンしてオンラインに蓄積するというのをやったわけです。で、それを、ずーっと、いまだにやっている・・・らしいんですね。しかしながら、世の中皮肉なもので、この5年間で電子ジャーナルが普及したため、直接ユーザーのもとに電子的に配送されるわけです。そのログというものが。したがって、あそこでやっているスキャニングってなんなの！ということになってしまう。ということで、これはまったく不見識だった。ということですね。

情報関係の人が、図書館のことを考えると大体間違えるということの典型例が、奈良先端です。文部省では奈良先端に毎年3億5千万円出していますね。目玉の貴重資料があるところ、たとえば京都大学とか東北大学では、国宝とか重要文化財とかがありますので、そういうところではそれをみんなに來られて「ちょちょ」触られても困るということで、そういうものには電子化でもって対応するというようなことが色々行われて、ほとんど電子化というのは貴重資料の電子化のことを意味するようになったわけですね。ですから、電子図書館プロジェクトというのをやろうとすると、スキャナーはどうするとか、デジタルカメラはどうだとか、そんな話ばかりやっているということになるわけです。これは確かに出来たものはすばらしい！綺麗ですし立派で役に立つ部分はあるかもしれないけれども、誰も使いやしないんです。本当は。一回アクセスしたならそれっきりなわけです。あっ、あるんだ！ということで、つぶさに

検討なんて人は、まあ、なかなか出てこないわけです。もちろん、その分野を研究する人にとってはとても貴重な資料だし、学生を教えるときはとっても便利だそうですが、たとえば、徳島大学に伊能忠敬の測量したときの地図がたくさん電子化されていますけれども、ほとんど誰も使わないわけです。日本地理学史だけなんかやっている人とか、そういう人がちょっと使うとか数人ですね。だから、立派な仕事なのですけれども意味のない仕事でもあるわけです。

さきほど申しましたように、日本の大学の方は、外国の雑誌に投稿したときには著作権を取られてしまいますので、著作権を取られないものを学内サーバーで配布するということになります。これは筑波ですね。ですから、二流論文というのはかなりいい言い方で、本当は三流か四流なんです。それで、さらにもっとすごいことに、ここは5年間確か毎年一億円お金を使ったんですけれども、今は241の資料が搭載されているということです。こりゃあ、5年で241って話ではないだろうというわけです。だから、ことごとく日本の電子図書館プロジェクトというのは失敗してきた。というふうに言っている、絶対間違いないんです。これは間違いありません。そういうふうな形で電子図書館については、わが国は大失敗しているわけです。これは、95年、96年の時間順序が全く不幸な偶然だったとしか言いようがないのですが、今上げたような典型的な失敗例をご覧になると確かに失敗したんだ、というのに納得されると思うわけです。

他の大学では、お金を持っていない大学では、なかなか出来ないわけですよ、そんなデジタル化は。人もいないわけですし。お金を持ったときには外注するわけですからどうせ。ですからある意味では、知恵を例示的に使う環境というのは日本の図書館というのは全然提供してこなかったわけですよ、5年間。この5年間の遅れというのは極めて決定的だといか言いようがないわけです。こりゃ、どうにかしないとイケないと、ここ一二年で追いつかなければ、もう日本の大学改革そのものが遅れてしまうのだろうというふうに思います。

さきほどは、将来の大学に対する社会的ディマンドをみましたけれども、いまみたいなことから、図書館に対する大学を經由した社会的ディマンドはどうなるかということはこのものだろうということです。さきほど言いましたように、教育・研究の機関としての社会的役割をちゃんと果たすことを支援するようにしなければいけないだろうということです。これから、それぞれ教育とか研究がどう変質するのかということについて議論する時間はあまりないので、概略しか述べませんが、ひとつ重要な点というのは、さきほどいいましたように、学部教育はもはや指導的人材の養成ではないということです。したがって、それは大学院に移ると。だから学部が中心である大学というのは、本当に教育図書館として学習図書館として特化する必要があるということだろうと思います。さらに、もうひとつは科目等履修生といったような形で単位を、入学はするんですが正規の学生にならないで単位だけを取っていくだろうというタイプの方も増えていくだろう。あるいは単なる聴講というかたちで来る！最近、医学部に聴講生がどんどんくるんですって。なに！医学部、て、言うんですけれども、これ簡単なことで、年をとられた方が自分の体のことについては専門的な理解をしておきたいといわれてみればそれは立派だ。これは受け入

れるしかないんですね。そういう時代になるわけですよ。ですから、今、ここにいるこういう年齢構成が大学の教室であるという教室が、これが不思議でなくなってくるわけです。そういうような人たちが入ってくるわけですね。ですから、図書館として非常に即物的に考えれば、今まで学生と一般市民とが明白な区別がついたものが、今は区別がつかないんですね。いままでやっていたみたいな、ある意味でステレオタイプ化したというか、ものを類型的に捉えることができなくて、ユーザーの非常に多様なニーズに対して答えるという仕方しかありえなくなってしまうということになると思います。それが、日本の教育が大きく変わっていくところの、大学院が大きく変わっていく重要なポイントだと思います。もうひとつ、研究機関としては、当然、先へすすまなければいけませんよとなるのですが、これから研究そのものがずいぶん変質するという可能性があります。いままで、研究とは何であったかということ、研究者が自分の好奇心に基づいて研究するのが真の学問研究であるというふうに考えていたわけです。しかしながら、もう、そんなことは言っていられないかもしれない。

つまり、20世紀の半ばから急速に進んだ、いわゆる科学のビッグ・サイエンス化というのは、学問のあらゆる分野に及びつつあって、集中的な資金投下なしに人を集めたりすることは出来ないわけです。集中的な資金投下があるから優秀な人材が集まってくるので、そうでないところには優秀な人材は来ないんですね。優秀な人材が、自分の好奇心に基づいて研究した場合には絶対いい結果はでないわけです。大体想像つきますよね。つまり、たいして出来ない人が思いつきでやるということになるわけですが、昔の本ですと文学部只野教授とかですね、ああいうようなのに象徴されるような世界になってしまうわけです。すると、何とか質を確保しようと思ったら集中的な資金投下、しかしながら集中的な資金投下というだけあって全般に向かって集中できないですから、選抜をどうしてもせざるを得ないことになります。ところがですね、これがまた苦しいわけです。というのは、一つの学問をやるために必要な資料とは、蓄積が必要なわけです。急に「この大学では、明日からこれを重点的にやるから資料をそろえろ」と言われても、こんなもの無理ですと言うしかないわけです。で、これにどう対応するのだろうということですが、これは多分、先ほどから申し上げている資源共有をどう考えているかということについての、ある意味での本質的な問題なのだろうと、いうふうに思います。さらに出てきた研究成果を、論文として出すばかりではなく社会に目に見える形にしなければならぬということになります。

したがって、これをどこがやるかということを見ると先ほどいいましたように図書館でやるしかない。それぞれ研究室ももちろんやるのですが、だいたい学者や研究室なんて絶対信用できないんですね。なんとなく「google」か、なんかで引っかけたので訪ねてみると、最終更新1997年なんて書いてあるのが結構あるわけですよ。ま、97年と書いてあるのが見つければまだ良い方で、「切れています。」とか「404」とか「406」とかそんな番号が戻ってきたりするというようなことがあるわけです。したがって、そういうことを考えると、ちゃんとしたカタログデータをとって、それはちゃんとこの大学からの資料ですということを保証するようなシステムを作っていかなければならぬ

わけです。

目録をとって資料の存在を保証するというのは、まさにそれこそ今まで図書館がやってきたことではないですかということなので、これは図書館がやるしかないのだろうというふうに思いますし、もしかしたら、さきほどいいましたようにたとえば電子ジャーナル化した場合には、実際の資料提供なんて図書館は中抜けなのですから、そういうことでもやらなければ図書館なんてないも同然と、なくても良いと言われても別に大して不思議でないということになるのではないかと思います。大学が変らなければ、図書館は変らないのではないかとということがあって、「日本の大学が、変りようがないから図書館から変えなきゃいけません！」ということをあまり強く言うと、みなさんのプレッシャーになってもいけないので、ここはさっと過ぎていきたいところです。しかしながら、教育のための資料を揃えるという学習図書館というのを作りなさいという話はよくわかる。しかし、冷静に考えてみると、とうてい不可能ということも良くわかる。どうしようという話なのですが、これは資源共有でも解決することはできない。まあ、本質的問題です。したがって、日本の大学教育に将来はないというのは客観的展望だとおもいます。なぜかということ、まず大学に入ってきたときに本を読む習慣がない。本を読んで勉強をするという習慣がない。学生用図書というのがもともとない。国立大学は比較的文部省からお金をもらっているところですが、古い調査で申し訳ないのですが、1998年に調査したときには、新刊書一人0.6冊、一年に買えているということ。これが多いか少ないかはよくわかりません。一説によると多いという説もあるのですが、一応ひとり1冊という根拠のない目標を立てているのですが、ふりかえっていただいて国立大学でこんなものです。

最近、東北大学を訪ねる機会があったのですが、あそこは四つ分館がありますが、すけれども、うち一つの分館の、一年間の学生用図書の購入予算は、だいたい二百万ぐらいですね。二百万でなにが買えるのか。薬学部と理学部が共有している北青葉山分館を訪れたのですが、そこで資料を拝見したら、視聴覚資料はゼロ。いちおう学生はいるのですが、視聴覚資料はゼロ。ゼロですかって聞いたところ、「ゼロのはずはないと思います。」と分館長がおっしゃったのですが、そばにいた係長が「いや、ゼロです。」と断言していましたからやっぱりゼロだと思います。農学分館に行ったときには、ビデオ資料が棚一列分ありました。北青葉山分館よりはるかにいいのですが、ひどいということです。つまり学部に分館なんていうものは、ぜんぜん学生のために資料を揃えようなんて考えてもいない。いや、そのためのお金がない。少なくとも知恵もなければ金もない。何も起きないという状況に今なっています。これは、国立大学のほとんど全体に通じていえることだというふうに考えていいと思います。ですから、公立大学の状況はもっといいということを期待していますが、まあそれほど期待はしていません。

こんな状況ですが、しかも新刊書はどんどん絶版になっていきますから、特に最近、いわゆる出版不況というものの本質はなんだろうかという議論があるなかで、新刊書の絶版が早くなっているということは有名な話ですから、一度買えなかったら来年はもう買えない、来年は買えても再来年はまず買えない。

売り切れたら絶版というむちゃくちゃなことをやっているわけですからね。普通、売り切れたら再販するというのが出版の仕組みだったはずですが、売り切れたら絶版という、つまり、早く売れて売り切れでも絶版してしまうというこのことをやっていますからいまさらどうしようもないということです。

まず、学生が本を読まない。もう一遍良く考えてみると先生達も本を読まないということです。理科系の先生は本をまず読まないんですよ。予算的には、たとえば、医学部とか理学部とか農学部の予算を見ると少なくとも90%は雑誌予算です。それ以外でも本を買っているのかなと言ったら、年鑑を買っていますというそんな話ですから、ようするに、いわゆる本を読まない。彼らは大学でどういう教育を受けてきたかという、本を読みなさいという教育を受けてきたのではなくて、教科書をちゃんと勉強しろという教育しか受けてないような気がします。統計を調査したわけではなくて、隣の人を見ながら考えただけですが。ようするに、自分で本を読んで、新たな領域を開拓してなんてゆうような形では日本ではきていない。これは最初に戻りますけれども、日本の学問の持っている輸入体質、翻訳体質というのが、まさにそのまままきていますから、いまさら先生達にもっと本当の先生達になってくださいと言ってみても始まらないわけですね。ですから、あと20年間みんなが退官するまで待つ。30年かも。よくわかりませんが。

本当は、重要な情報リテラシー教育の真の課題はどこにあるかということ、先生達も読みません。先生にも読む習慣をつけさせるというのが多分リテラシー教育の最も重要な課題だと思います。図書館に来る学生は多くはいないので、来た学生に読みなさいと言っても読みに来たのですから、読みなさいと言われると何を读みますかと言われておしまいなんですね。来ない学生に読みなさいと言わなければならないのです。そのためには、授業に出ているところで読みなさいといわなければならないのですが、それは先生の世界ですから。そこで本を読んで勉強してくれというふうにシステムが出来ていかない限り、絶対に学生は本を読むようにならないし、そういうような学生だけではなく、さまざまな形で問題解決能力ある学生というのが育っていかないということになるわけです。さきほど、社会の接点という話になるわけですがけれども、これは当然ですね、生涯学習の中で果たす大学の役割は、正規・非正規が混在するようになるので、たとえば公開講座に来たということで図書館を利用してもらうのでもいいのかなという気がするのですが。もちろん、誰でもいいよという話になっていますけれども、大学の開放というのと図書館の開放というのがほとんどセットなって進むようになるだろう。そして、今、アメリカの学部学生の半分以上は24歳以上ですね。ですから、そういう時代が日本でも当然訪れるだろうというふうに考えなければいけないだろうと。さきほどもしましたように、10年後の日本を知りたいければ20年前のアメリカを見よということです。そして、イギリスの場合にはさらにですね、ここは重要なのですが、イギリスの場合はさまざまな図書予算、特に電子的な図書予算に関しては、HEというのはHigher Education 高等教育、PEというのはpersonal Education 生涯教育なのですが、このふたつの予算を統合するという事は昨年から行われています。だから、大学のお金がなくなってきたときに、どこに攻め込んで行ってお金を

取ってきたらいいかということ、生涯学習センターというところに持ってきて資源共有するというをやらないと、多分いまの色々な形での例外などには対抗できないことになると思います。だって、なかなかカッコいいわけですよ、公共図書館に行っても、大学図書館のどこに行っても、たとえばエルゼビア・サイエンスのサイエンス・ダイレクトの1500タイトルが日本の一般市民が見られますということは素晴らしい日本の社会ではないですか。荒唐無稽な話ですが、たとえばそれだけ見るのにどれだけお金がかかるかというと100億円です。たいした金ではないんです。先ほどの科学技術基本計画40兆円とか、知的財産戦略24兆円とか、毎年払わなければならないのはつらいですけども、日本の政府予算総額とかと比べた場合、全然、なんてことないわけです。そういう意味で、なんか国家的戦略は欲しいなあという感じはあります。そういうことをやっていかなければならないというのは何かということ、当然、物理的な図書館の意味が、電子的な媒体として電子的な資料の流通の場合には意味がなくなりますから、結果として中身の保証というのが図書館の役割になっていくということです。当面は、日曜日開けておくとか、市民が入ってきてよろしいんですけども、さらに、市民の人が自由に資料を使えるような状態にしておかなければならない。大学が持っている知的財産というのを、・・・図書館がメタ・データ、目録データと資料の存在・・・クオリティの保証は作った人にやってもらうしかないのですが、資料の存在というものを保証してやっていくということが必要になるだろうと思います。

いま、たとえば、どういう試みがあるかということ、ひとつはですね、インスティテュート・レポテッドリィというのを作っていきこうというのがあります。つまり、学会を運営していて学会もしくは商業出版社に依存している学術コミュニケーションの流通形態を、むしろ大学にもう一回戻したらどうだろうか、という試みです。つまり大学で生産された論文というのは、必ず大学のサーバーに置かなければならない。これが、ディー・スペースというMITでいま積極的に展開しているものです。これをやるためには、先ほど言いましたように著作権を出版社にあげるということをやめなければなりません。で、これは相当な戦いをしなければならぬし、MITみたいな強いところは戦えるかもしれないけれど、我々のところは大変だということが多いというのは事実です。それから、そういうところに集められた資料の目録情報・メタ・データを、ですね、収集して歩いて、どこかにいけばそれを全部見ることが出来るという仕掛けを作っておくと、まあこりゃあ便利だということになります。ちょうどいまのナクシスキャットのWEBシー・リソース版ということになります。ただナクシスキャットの場合ですと、入力という操作がいるわけですが、それをハーベストというやりかたでやると。つまり中央からロボットをしかるべきところに飛ばして、そこで集められたメタ・データを収集して歩くということです。「google」みたいなロボットですと品質保証は全然ないのですが、いったん、しっかりしたメタ・データを作ったある図書館に行けば、それなりの品質は保証出来るだろうということが期待されるわけです。

こんなことをやっていくと、多分、社会に対して重要な役割を果たすだろうということです。そこで一番面倒くさいのは、さっきも話したばかりなのです

が、これからの図書館にとって、教員というのをどう考えるだろうかということです。

いいにくいのですが一番、「教員というのは重要だ！」ということがあります。このへんはだいぶ変っているかもしれませんが。教員というのは、当然、自分達の研究が将来も続くということを前提にして、ですね、「いま僕が個人的な関心でやっていることが学問の全てなのではない。」ということで、一応、学問の伝統を尊重して教員というのは研究しているはずなのです。まあ、かなりうそですけども。あっ、うそではなく、実態ではないですけども。そうやっているはずです。さらに教員には授業するということがあります。教員としてということが求められるかということ、資料を使って学習するということを指導する。そんなことは日本の伝統ではやっていないので、自分達ができないことをこどもに教えることはできない。というわかりやすい定義がありますが・・・定義というか・・・行為ですね。しかしながら、これは教員がやらなければならないはずなのです。すぐ後に書いてあるように自覚は一切していないという現状です。それから、研究者としてはですね、大学としてどういう研究をするかということを考える。「僕はこれをやりたいので」ということで資料を集められたのではたまらないわけですね。もちろん、それもなければいけないけれども、学生はもっと広いひろがりでも勉強してもらわなければいけないことはたくさんありますから、そういうようなことだって予算執行を計画的にやらなければいけない。「僕はこれが今日ほしい。明日、欲しい。」ということで本を買って欲しくない。と、思うのですけれども、そのような自覚は一切欠落しております。こんなことを皆さんに申し上げるのは、こういうのを釈迦に説法というのは、へんなのですが、なんと云ったらいいいのかよくわかりませんが・・・・ともかく、教員は全然わかっていませんよねえ。たとえば、教科書を勉強しなさい、教科書だけをやればいい、教科書を全部覚えてしまえばそれでいいのだというのは小学校からずっとやっていますから離れられないのですが、これを何とか変えないといけないんですね。それから、本当に電子的なものをやろうとすると、「年寄りには電子ジャーナルを使えません。」ということが、電子ジャーナルの導入を遅らせているという信じられない状況が非常に多くの場所でおきています。自分が買った本を、自分のところに置いておくというので、やっぱり大学の金で買ったものは、学生が使える状態にしておくというのは大事だと言う自覚も欠けているわけです。これから戦略的に展開しなければいけないような知的財産の生産というものに、今までの、個人的な好奇心からやってみよう、なもので・・・じゃあ、ようするにこういう教員に対して「それではいけない！」というふうに働きかけるのは誰かということですが、これはもうどうしようもないので、図書館の人にやっていただくしかない・・・ということです。これは、教員は本当にわかっていません。こういう状況にいま置かれているということ。ですから、図書館の方から「こうなんだ」というふうに言いに行っていたきたいと思います。これは黙っていたら、絶対、今のほうが楽ですから何もしないほうが。動きませんので是非とも、どんどんどんどん言って行っていたくと、そういうふうにしなないとまずいんだよということです。

さらに教員がまずくて、図書館の役割が多い部分と思われるのは、まさにこ

この学術コミュニケーションというのを、これからインターネットの上でどう展開するかということです。これも、教員研究者に頼っては絶対出来ないというふうに思われます。なぜかという証拠があるからです。すなわち、じつはインターネットを研究者達が自由に利用出来る時代・・・これは日本ではなくてアメリカですけれども、すでに 1980 年代の後半に訪れているわけです。その頃、ウェブの基本的なプロトコルは、http と文書記述規格の html ができたのは 1989 年ですから、それ以前にはウェブはなかったのですが、それでも今でも使われているアノニマス FTP サーバーというのがあって、ファイルを置いておくと、そこにアカウントがなくてもログインして取ってることが出来るというそういうシステムがあって、それとメーリングリストは勿論ありましたから、メーリングリストで「ここに置いたよ」とかやると、みんながやって取ってくという、実はインフォーマルなシステムが 1987 年か 1988 年に存在したのです。いくつもの分野で。

だから、その段階で 1970 年代から 1990 年代というのはいわゆる、シリアーズ・クライシスということで雑誌高騰が一気に起きているわけです。70 年代から 90 年代にかけて名目 9 倍になっているわけです。インフレ率を引いても 2.6 倍ですね、雑誌の値上がりというのは。名目で 9 倍ですから言ってみれば一桁変っているわけですよ。その時代に来て、なおかつ、そういうアノニマス FTP サーバーとメーリングリストという仕組みとを持っていたにもかかわらず、研究者達はこれをメインのシステムにもっていこうとはしなかった。しようとした人はいますけれども、すぐに、ポシャッタんですね。いろんな理由で。その理由について言っていると長くなるのでなんです。結局、絶対に、1980 年代にインターネットでもって自分達の学術コミュニケーションをコントロール出来る時代が来たにもかかわらず、研究者はそれを利用しなかった。だから、研究者というものは便利なものがきたら使うという動物ではないということです。したがって、今回のウェブの場合でも同じことになるはずだと・・・ということです。ほっといたら。

で、それに対して図書館の場合には、90 年代の後半から 2000 年代の初頭にかけて、つまり、今にかけてですね、電子ジャーナルの状況というのを経験しています。公立大学は、不幸にして経験していない大学が多いんですけども・・・完全には、経験していない大学がありますけれども・・・経験しているので、図書館のノウハウというのは、学術コミュニケーションをこれからどうやってもっていくかということにとって非常に貴重なものであるはず、ふうに言えるわけです。これも研究者に任していたのでは、絶対にうまくいくはずがないということが明白な部分です。

電子関係についてコミュニケーションに関して当面どうするかという話ですが、ともかく買わなければいけないということで、国立大学は 99 大学ありますが、組織をつくって外国の出版社と直接交渉をするということを 2000 年から始めました。その結果、直接交渉したところとはそれなりにうまくいっています。いくつかのコンソーシアムがつくられましたけれども、いまサイエンス・ダイ

レクト 1500 タイトルを全部見ることが出来る国立大学が十数校あります。もうひとつは、六十位の大学はお互いにクロスアクセスすることを認めさせました。つまり、A大学が見ているものがこれだけあって、B大学が見ているものがこれだけあると、A大学はB大学が見ているものを見られるし、B大学はA大学がとっているものを見られると...それがA Bではなくて60校あるので、今それらの大学は、へたすると数十万円払って800タイトルくらい見られる状態になっています。それくらいのことをやろうと思えば出来るということです。それから、ジョンアイリー、ブラックエル、シュプリングーに関して全タイトルにアクセスしている大学が約60から70あります。基本的には、いま大体どの国立大学も最低線、普通は二千タイトルくらいのオンラインジャーナルというのを、キャンパスのどこでもサイトライセンスで見られるというような状況にあります。2000年の段階では、ほとんどこれが数百からゼロに近かったので、この大きな変化というのは特筆すべきことだろうと思います。したがって、国立大学においては2002年というのは日本における国立大学の電子ジャーナル元年であるということが言えます。まったく様変わりします。勉強の仕方が、学生が平気でアクセスするようになります。図書館に行かなくていいんです。

つまり、研究室で「これってどこにあったけな。ここにあるよ」っていえば、それで直ぐ部屋に戻ってプリントアウトして戻ってきて、「ここ」というふうに演習を続けることが出来るわけですね。プロジェクターで映しながら演習するということはなんでもないことになるわけです。ですから、やはり様変わりしていくんですよ。資料の導入の仕方が電子化していくということは、いま、非常に重要だと思われることは、学内でそれぞれの先生が勝手に「欲しい」とか「いらぬ」とか言っている雑誌を、そういう話はもうやめて、学内で一本化しようと試みている大学が非常に多いです。そうすると予算をコントロールするのはどこかというところ図書館ですね。たとえば、わたくしりつでは、慶応みたいな、わたくしりつ大学というのは資料費12億円というふんだんなものを誇っているそうですが、雑誌とかなんかは基本的には図書館がコントロールするということになっています。公立大学も同じだと思いますし、国立大学の場合には基本的に図書館がコントロールしている予算というのは数千万、資料購入費というのは数千万、多くて数千万です。ですから、そういうことを考えると、電子ジャーナルをやろうと思うと・・・東京大学で8億円、外国雑誌を買っています。千葉大学で2億5千万円くらいです。1億を超える大学は約三十くらいですね。そういうところが中央予算として外国雑誌経費を持つようになれば、ずいぶん効率的な買い方が出来ますし、図書館間のお話し合いで、さっきいったみたいなコンソーシアムを作ることによって、大学における資料基盤というのを飛躍的に向上させることが出来るということが、今回、二年ほど試みてわかりました。

国立・公立・わたくしりつの連携というのは、これは大事なんですねえ。公立大学は一応遅れています。わたくし立大学はようやくですねえ、エルゼビアの悪夢というのから脱却して、つまり公正取引委員会にエルゼビアの円価格というのは独占禁止法違反だからという審査請求を出して、12年の12月に出しましたけれど、14年の7月に、ついこのあいだ「全然問題ありません。」という返

事をもらったので、せめてこれはグレーにしておいて欲しかったというのが我々の希望ですね。真っ白になったものだから、むしろ困っているという状態です。

しかしながら、公立大学は何もしていませんし、目の前にして言うのもなんですが、何もしていませんし、これから何が起ころうという胎動は、若干、聞くくらいで取り組みが遅れているように思われます。しかしながら、やはりこれはですね日本には、国立・公立・わたくし立というシステムがあるので、それぞれが独自にちゃんとした取り組みをした後で、連係して外国出版社に・・・交渉するかどうかは別にしても、立ち向かわなければ絶対にまずいわけですね。ですから、いまの公立の状況は、「悔やまれる」「惜まれる」「困った」「何とかしてほしい」という状況だと、いうふうに・・・是非ここでこれはここだけは言いたかったのです、今日。なんとかしていただきたい。そうしないと国立も、もうだんだんやるのが大変になってしまうということです。いちおう、ある程度実績があるのでお手伝いが出るとお思いますので、言ってください。何でもしますけれども、なんか「やろう」とか言っておかないと始まらないということですね。それでも、毎年10%値上がりした場合には、いくら頑張ってみても、コンソーシアムで買い叩くといっても買い叩く限界があるわけです。だから、価格を下げるという圧力をつくらなければいけないということになります。それが現在行われている、ひとつは国際協力が必要だということなのですから、そういう国際協力というだけではなくて、実際に出版事業を起こして安くで質の良い雑誌を作ることによって、競争的な状況を作って、そしてエルゼビアが高い雑誌を出すのを止めさせようという、そういうことが実際行われています。有名な例としては、エルゼビアの、現在年間たしか1万3千ドル・・・「テトラヘドramerターズ」たった1万3千ドル、と同じ分野で「オオワニクレーター」というのを出して、確か1年間出し続けたら、去年の6月に「イパクトファクター」が「オオワニクレーター」の方が高くなったというようなのがあるので、値段は1万3千に対して2千9百ドルです。ですから分類的にも同じですから、「テトラヘドramerターズ」への投稿が減ったとか、私にはいろんなデータがありますので、そういうことを考えると、やって出来ないことはない。これはやはり、アメリカの人たちは偉い。よくやったものだと思います。ですから、これは今年、ヨーロッパも始めます。日本でも何とかやっておかないと、ようするに、ヨーロッパとアメリカにふたがしされてしまうと、あと出版社が狙うところは日本・アジアということになるので、ますます篡奪されますから、これはやはり日本の中でも何かのうごきをしなければいけない。ささやかな努力はしていますが、これも、全ての図書館が、大学図書館が声を上げなければいけないということだと思います。是非ともよろしくお願ひしたいと思います。

このような電子的な時代になると、機能的な話は出来るのですが、実際の資料の流通に関しては図書館というのは中抜けになってしまいます。図書館の存在が見えない存在になっていくということがほぼわかっている。そういうような状況で、いままで言ったことをまとめますと、図書館として何をやっていただきたいかということ、まず「学生が自分で勉強をする。本を読む。資料を使っ

て勉強する。」というふうに仕向ける。ただ、直接的に仕向けるのではなくて、これは困ったことですけれども、先生を教育することによって仕向けるということをやっていたきたい・・・ということです。これは、「無茶な！」とおっしゃるかも知れませんが出来るのは図書館だけなのです。どうしてもそうしなければまずいんだということを、本当に説得力を持って訴えることが出来るのは図書館だろうと思います。さらに、こういうふうな情報の流れのインフラストラクチャーというのを実際に運営するのは図書館がやらざるを得ないだろうというふうに思います。情報センターと図書館とを合体させるといったような話がありますが、これは非常に間違った考えで、図書館が情報センターを併合するというのが、正しいいきかたなんだろうと思います。つまり計算機屋さんとか情報屋さんというものは、もうほとんど何もわかっていないんです。お金だけをとってくるのはうまいのですが、ネットワーク予算を資料費に注ぎ込んだら、いったいどれだけのことが出来るか。どれだけ子ども達の学習環境が良くなるかということ、やっぱり考えてもらうということが必要だろうということです。全体的なビジョンをもって企画することが出来るのは図書館しかありえないわけです。情報関係のところではそんな企画は絶対出来ない。先生達に訴えることが出来るのも図書館なわけです。したがってこれから大学改革が狙っているところ、良い教育、質の高い活性化した研究というものを実現するときに・・・図書館からの・・・図書館ひとりではがんばってもだめなんです。図書館から大学に働きかけるということが始めて重要な役割になるのだろうと思います。

ともかく、図書館のほうがちやんとやっていたかかないと、日本の大学改革は、多分、頓挫します。一生懸命やってもダメかもしれないのですけれども。一生懸命やってもダメかも知れないと申し上げるのは、一生懸命やってもダメだったときに図書館が悪いんじゃないと思うことが出来るようにするために申し上げているだけなので、一生懸命やらないでくださいと言っているわけではないことをご理解いただきたいというふうに思います。ともかく、やらなければならないことがあまりにも多い。金も人も少ない。だけれども理屈で考えるとどうしても図書館の担うべき役割があまりに大きいということになっているので、幸いにしてわたくしは図書館長をやめられましたので、あとはみなさんによるしくという、そういうことであります。

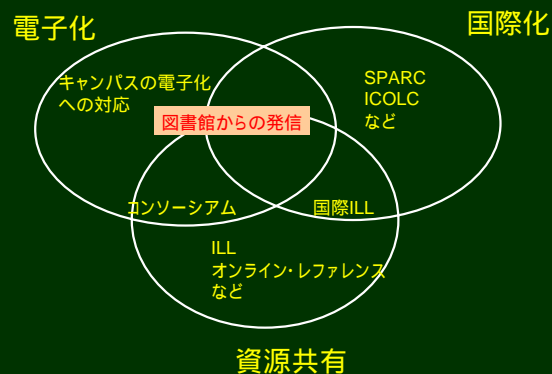


電子化・国際化・資源共有

土屋俊
(千葉大学)

まとめ

- 大学図書館は、「大学改革」と「社会の情報化」という二つの歴史的な潮流を迎えている
- このなかで大学図書館が取り組むべき課題は、
 - 電子化
 - 国際化
 - 資源共有である
- しかし、実はこれこそ日本の大学が今取り組むべき課題である
- 大学図書館の取り組みが日本の大学の将来をきめるのかもしれない



大学と大学図書館

- 大学改革と社会情報化の同時進行
 - 日本の大学の何が問題とされているのか
 - 「IT革命」はブームではない
- 変化する大学の社会的役割(近代を超えて)
 - (指導的)人材養成からの脱皮
 - 国策直結からの脱皮
 - 翻訳学問からの脱皮
- 変化する大学図書館の役割
 - 教育・研究における支援機能の必要性
 - (学界を含む)社会との直接連携の要請
- 大学図書館こそが大学改革を支える

昨今のいわゆる「大学改革」

1990年代の政策

- 設置基準大綱化(教養教育の改革)
- 大学院重点化(大学院教育の改革)
- 科学技術基本計画と基礎研究振興
- 研究成果の直接還元(TLOなど)
- とくに90年代後半の展開
 - 競争的環境、競争的資金と点検・評価
 - 産学連携
 - 教育の重視(掛け声だけ?)
 - 「世界レベルの研究」
 - いわゆる「統廃合」

大学改革の方向性

- 高等教育の状況
 - アメリカ・(日本)型(50%)
12年度日本では大学40%、短大9%、専門学校20%
 - イギリス・ドイツ型(30%)
 - フランス・ヨーロッパ型(10%)
 - 発展途上国型
- 日本の大学改革
 - ドイツ型帝国大学方式からの脱出
 - 戦後の大学大衆化(私学の問題)
 - アメリカ型二重構造体制(研究大学+4年制学部大学)への移行?

要するに、

1. 世界水準の研究をする大学
 - 受賞件数等の水準の向上
 - 学位授与の正常化(スタート資格としての学位)
 - 影響力のある(被引用件数の多い)論文を産出
 - でも、人文社会系では？
2. ちゃんとした教育をする大学
 - 卒業生の品質保証をする学部教育(国立の役割)
 - その前提としての教養教育(「設置基準大綱化」)
3. 教育・研究を社会に直接還元する大学
 - 産官学連携(TLOなど)
 - 教育サービス(これが案外難しい)

一方で、先進国社会の不可避の情報化

- 「電子図書館」と「インターネット」のアナクロニズム
 - 1993年 NII(通信と放送の融合)
 - 1995年 GII
(日本で国会関西館構想、電子図書館建議)
 - 1996年 日本でのインターネット爆発
 - 1997年 インターネット社会へ(図書館はまだCDROM)
 - 1999年 電子ジャーナル普及へ
- オープンなインターネットを社会情報基盤とする
 - 社会の「神経」としての情報通信システム(電話、POSなど)
 - モバイル化(PDA、Iモードの展開、WAP規格など)
 - 電子図書館としてのWWW
 - そのなかでの大学図書館の位置づけ

大学改革・情報化からの図書館へのデマンド

- 教育機関としての社会的役割
 - 学部レベル教育の教養化
 - 修士レベル教育の非学問化
 - 学生(正規・非正規)から見て使える学習図書館
- 研究機関としての社会的役割
 - 先端研究の推進(学術情報の円滑な流通)
 - そもそも「研究」概念の変質が予想される
 - 研究成果の移転の推進(情報発信)
研究者から見て使える研究支援機能

しかし、話は簡単ではないが、、、

- 大学が変わらなければ図書館が変わりようがない
 - 大学側における目的意識の改革はあるか
 - 「いまなんとか動いているのになぜ変えるのか？」
 - 研究成果は比較の見えやすいが、教育の品質検査は？近年注目の社会貢献は？
- 図書館が大学を変えることができるのか
 - YES! (大学も図書館のサービス業)
 - 教育と研究において、学生と教員が共有する場としての図書館
 - 情報化の拠点としての大学図書館
 - 市民との接点をもつものとしての大学図書館

とはいえ、学習図書館構築不可能論も、、、

- 勉強の場なくして勉強なし
 - 「受験勉強が忙しくて、本を読む暇がない」学生
- 学生用図書 of 圧倒的不足
 - 国大図協の調査(1998年) 1人新刊書0.6冊
 - もう遅い、誰の責任か(図書館の責任ではない)、国民的不見識
- そもそも学生は本を読むのか、読ませることに意味があるのか
- 教員は本を読んでいるのか？
 - 何のための教育？研究よりも読書
 - 情報リテラシー教育の真の課題

生涯学習と大学図書館

- 地域の情報(学術的)
- 図書館の開放、地域の異館種との分業
- 生涯学習こそが大学が生きる道
 - 半分が24歳以上になる日は近い(アメリカなみ)
 - イギリスにおけるHEとFEの基盤統合
- この目的から演繹される図書館の役割
 - 場所(物理的図書館とネット上の図書館)
 - 中身(大学生産の素材のゲートウェイとして)
 - MITのDspace
 - Open Archive Initiativeのmetadata harvesting protocol
 - Walk-in Useと電子資料(著作権)

図書館運営における教員の役割

- 図書館資料の収集への責任
 - 学習用: 教員として
 - 研究目的資料: 研究者として
 - 千葉大学の試み(資料予算の一本化、基本的外国雑誌、キャンパスグレイリテラチャの体系化)
- しかし、自覚は欠如している
 - 技術の進歩について知っているか(自分の研究方法でやっているかと盲信、「電子ジャーナル問題」で顕著)
 - 学生のために本を買うという自覚はあるか(研究室に本を置く意味は?)

電子図書館と図書館自動化

(建議(平成8年)という間違いは別にして)

- 「電子図書館とは何か」がわからなかった
奈良先端の不見識
目玉電子化方式
二流論文収集方式
標準化努力欠如
需要研究の欠如(誰のため、何のため)
- やっと電子図書館の姿が見えてきた
 - アクセス(利用): 学生向けと研究者向け
 - パブリッシング(発信): 社会向け
- 図書館員のスキルの問題はもうないはず

情報化による

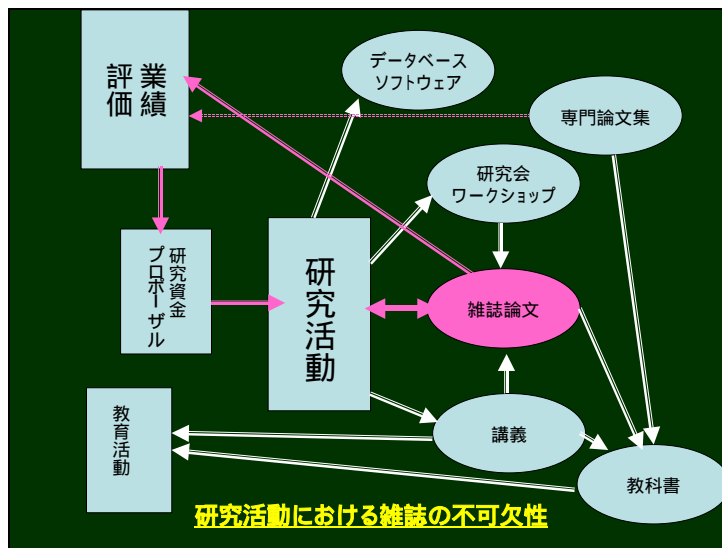
学術的コミュニケーションの変容?

基本的には1980年代インターネットによって研究者が自分でコミュニケーションを制御できるようになったはずだが、

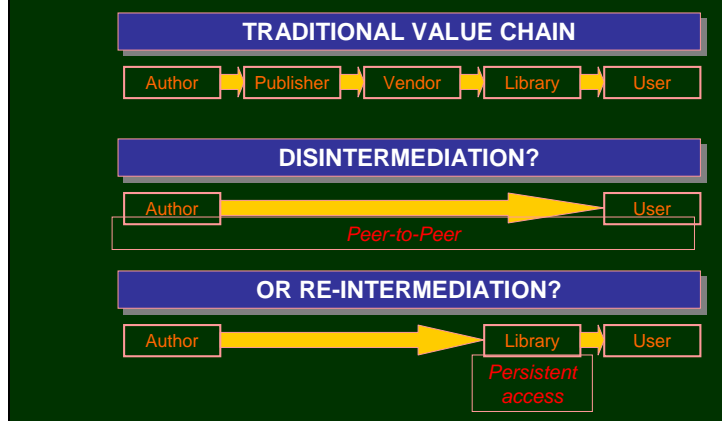
現実にはそうは展開していない

- 学術雑誌はどうか? 電子ジャーナル化だが
- 学会はどうか? 組織率の低下(機関購読の増加)
- 授業で使う教科書はどうか? 紙の教科書はいつまで?
- Serials Crisis 自立的出版か商業出版か

これらすべてに教員はまったく無自覚



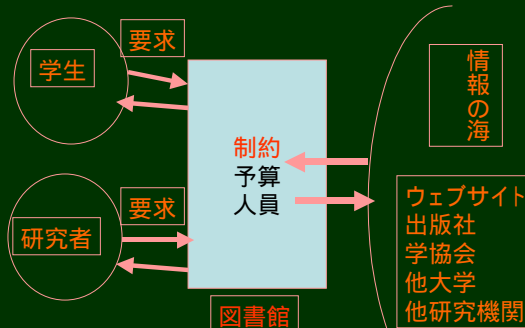
大学図書館の役割 (SPARCより)



当面の対応と将来的対応

- コンソーシアムの交渉
 - 国立大学図書館協議会タスクフォース
 - いくつかのコンソーシアム形成
- 学内における予算の中央化
 - 研究者が個別に決定するメカニズムを改革
 - しばらくは、Big Dealへ加担
- アグリゲータの賢い利用
- 価格下降圧力の戦略的構築 (将来)
 - ICOLC
 - SPARC、ISCA

ゲートウェイ・インターフェイス・アクセス支援



インターフェイスからアクセス・ファシリテータへ

契約(導入、著作権管理、メタデータ管理など)

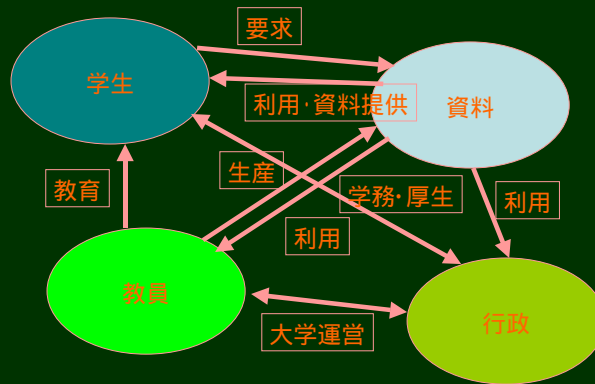
大学における大学図書館の役割の将来

- 学生に自分で勉強するように仕向ける(つまり、本を読ませる)のは図書館
- 教員に世の中の情報化を思い知らせるのは図書館
- 大学運営における情報基盤の重要性を自覚して、実際に構築するのは図書館(ちなみに情報屋さんの出番はもう終わったかもしれない)
- キャンパスの中と外とを(発信も含めて)「契約」と「管理」によって仲介するのが図書館
- 基盤の一元的管理
 - ネットワークとコンテンツ
 - 予算と人員

21世紀のキャンパスでは情報基盤が本質的

- 多様な背景の学生が自分の条件に応じて、自分で学ぶ(パートタイム学生・進路変更学生の増加、いわゆる「学力低下」の本質化:準備なき学生への教育の一般化)
- 対面教育と遠隔・時差教育の使い分け(教室の意味の再定義)
- 運営手法の効率化(統一IDと共通データベースに基づく学生・教員管理、電子的コミュニケーションによる会議の削減、権限の分散化による即時対応、対外・学内文書交換の電子化など)

大学の情報基盤とは？



図書館員のイニシアティブを求めて

- サブジェクト・ライブラリアンは教員で代用(ただし当面)。研究の直接支援はこれで十分
- 学生相手のリテラシー教育は積極担当
- 契約・業務管理(外注)・学内連携が主要任務
- 図書館は、情報基盤のすべてにかかわり、図書館が大学の情報基盤を作るしかない
- それが、次世代の図書館像を規定する
- 図書館は、大学の目的と現状を理解して、大学の目的の実現する役割を持つ

図書館の役割の実現が大学改革を実現

- 学習支援機能の実現
 - 自分で考えることができる学生を育てる
 - 図書館資料とウェブリソースの継ぎ目なし検索
 - コア科目と支援図書予算(千葉大学)
- 研究支援機能の実現
 - 電子ジャーナルの導入
 - 研究資料購入の中央経費化(千葉大学など)
- 社会貢献(発信機能:生涯学習・産学連携支援)
 - 学内の分担(図書館:メタデータ管理と永久アクセス保障)
- 情報基盤の一元管理へ
 - 図書館とセンターの統合(的連携)(千葉大学など)

第2講義「図書館サービスの将来動向と職員の能力」 慶應義塾大学文学部教授 高山正也 氏

ご照会いただきました高山でございます。すでにお気付きかと思われませんが、わたくしは、日頃の不摂生がたたりまして声が枯れております。で、これ、わたくしは自身も非常に困るんですね。わたくし、土屋先生みたいにいろんなことを話せるわけではなくて・・・普段ですと、終わりましたから社交辞令で先生のお話に感銘を受けましたと、こうおっしゃってくださる方が何人が現れます。そのあとで、ぽろっと、本音が出るのですが、「じつにいいお声ですねえ」ということで、最初、感銘を受けてくれたのは話の内容かなあというふうに思っていますと、そうではなくて、わたくしの美声に聞きほれてくれたと、こういうことになるのですが、その美声が今日はダメでありまして、いよいよ話の内容で勝負しなければならないとこういうことになっておりますが、そんなに、わたくしが大した内容のことをお話出来るわけではございません。それは、ひとつは、土屋先生は館長をしておられたということと、さきほども、ちらっとお話がございましたけれども、文部科学省の国立大学図書館の評価をして、評価委員になってらっしゃるということと、大学図書館というものを内部からご覧になっておられるということですね。今日お集まりのみなさん方も大学図書館の内部の方でいらっしゃいますから、内部的なお話をするの方がいいのかもしれない。それから、明日、東北大学の日出さんとお呼びするのでしょうか、この方も多分、貴重書のメディア変換について、かなり、まあ技術的であるかもしれませんが、内部からのお話になるだろうというふうに思いますが。わたくしは、一介の図書館学の教師でありますから、図書館というものを内部からは見ておりません。経歴の照会でありましたように、図書館の実務経験は専門図書館にしか持っておりませんから、大学図書館というものについては全く知りません。知りませんと言って逃げを打つわけではありませんけれど、そういう面で、少し、土屋さんとは違った側面からお話をしたいというふうに考えております。ある面で第三者的、あるいは客観的ということが言えるのかもしれないませんが、ある面ではやや抽象論になる、あるいは、日本の現状とはやや離れているのではないだろうか。それは、文献にそう書いてあるから、日本の現状とはちょっと違う。しかし、文献上での知識ではないかというふうに思われるかもしれません。それはそれでまた、何かのときにご指摘をいただければというふうに思っております。

さきほどの土屋先生のお話も、図書館というものが変わらざるをえない。土屋先生の主たるトーンは、「大学が変わるんだ。だから図書館も変わる。大学を変えるために図書館員も皆さん方よ、ひとつがんばってくれ。」こういうお話であったとわたくしは受け止めたわけですが、わたくしのほうは、「図書館のサービスが変わる。したがって図書館の職員も変わらざるを得ないんじゃないか」というトーンで、ここに書いてあるようなテーマを設定させていただ

いたということでありませう。

わたくし、これからずっと図書館ということばを申し上げますときに、いちおう大学図書館というものを想定しますが、話に熱がはいってまいりますとついつい大学図書館という枠を飛び越えてしまいます。その点はあらかじめお断りしておきます。えー、図書館、じゃ、お前、なんで、しゃべっているのか。大学図書館でないのなら、経験の有る専門図書館かと言われると専門図書館でもない。もちろん公共図書館でもないし、学校図書館でもありません。図書館という抽象的なものを想定してお話をしてゆきますので、そのところはみなさんがた、わたくしのお話をお聞きいただいて、ご自身の職場あるいは大学図書館というところに翻訳をしていただく必要があるだろうというふうに考えております。

本論に入りたいわけではありますが、図書館サービスが変わるとこういうことになっております。でも本当に変わるのかということがひとつ問題になるわけですね。まずその図書館サービスって何だろうかということではありますが、閲覧・貸出、そして参考業務といったようなサービス。これをわたくしは第一に念頭においております。これが変化をしていく。それはなぜかということ、サービスの前提が変わってゆく。これはさきほど土屋さんが力説をされました。インターネットが常識になっておる。でも、日本ではそれが新たに、そのことがあたかもなにか鬼の首を取ったようなことで最近喧伝されている。こういうことに代表される...サービスの前提が変わってきた。すなわちインターネットが当たり前になってきた。あるいは、図書館の目録もOPACが当たり前になってきたということですね。これは何を意味するかということ、図書館というのは我々古い世代、この中でもお見受けいたしますとわたくしと同世代の方も何人かはいらっしゃるようにお見受けします。いま現在、だいたい40代の後半から上の人をわたくしは同じ世代の人間というふうに考えておりますけれども、そういう人たちにとっては図書館というのは来館利用が当たり前であった。それが非来館に変わってくるということですね。そうなったときに、今度は利用者の図書館のいきかたというものが大きく変わるのではないだろうか。これもまた、我々の世代にとって図書館ってなんだ、ということ本の倉庫であったわけです。

図書館なんか使わないほうが良いよ。図書館を使う連中は、司法試験の受験勉強をする連中かあるいはアルバイトで疲れ果てて休養を取りにいく連中が行くところであって、まともな普通の学生が行くところではないというふうに考えられていた世代であります。

ところが、いまやそういう本の倉庫が、これもさっき控え室のほうで土屋先生とこちらの館長も含めて話がはずんだのですが、メディアセンターなんてわけのわからない名称になっております。そのメディアセンターという言葉が最初に使いましたのは、わが大学でありまして、これはわたくしも認めているわけであります。その時に言ったのですが、メディアセンターというのはこの中で、みなさんがた、いま、笑った方は少数でね、みんなまじめな顔をしておら

れるのでちょっと言おうかなと思ったのですが、もともとメディアプログラムとかメディアという言葉を使っていたのは、学校図書館の世界なんです。大学図書館では、メディアなんてそんな幼稚なことを言うなというのが当時の大学図書館の世界であったわけです。ところが、わが大学で図書館を当時もうすでに図書館ではだめだというので情報センターと名乗らせておりました。情報センターの名称が出ましたのが・・・1970年からメディアセンターと名乗っておりました。それで情報センターの時代が12年続いて、こんど、当時のコンピューターセンターですね、情報何とかセンター、情報処理センターといいましたか、それと合体をする。ようするに、コンピューターセンターと図書館を合体させる。新しいネーミングが必要だ。いまさら情報センターといえないわけですよ。情報センターで図書館をやっていたわけですから。それで困りまして、学校図書館をまったく知らない、大学図書館しか知らないという、まあ、名前を言うところの中の何人かの人には知っている方はいらっしゃるのですが、大学教員をやっていると言うと、ばれてしまいますけれども、その人間が「メディアセンターがいいんじゃないの」とこう言って、心ある人間は止めとけと言ったのですが、その名前が通ってしまった。それが日本中に広がってしまった。メディアセンターと最初に名乗ったところも名乗ったところですが、追随するほうも追随する方だというふうに思っております。そういうわけで大変誤解を生む名前であります。ちなみに、さっき、なんで盛り上がったかというと、メディアセンター構想というのはどこの大学でももの見事に破綻していますねという話になりまして、図書館と我々のこの名前が変わりまして、ITCという・・・ITは森総理大臣が盛んにIT、ITとおっしゃいました。それで、わが大学は悪乗りをいたしまして、コンピューター系のセンターをITセンターというふうに言っているわけですが、それがメディアセンターとわかれて別になりました。図書館のほうは、メディアセンターの名前をおろしてということは考えなくて、あいかわらずメディアセンターで、ITCはITCで独立しております。

余談になりましたが、そういうふうに利用者の図書館観も変わってきた。それからサービスの前提としての図書館の利用パターンが大きく変わった・・・いうところで図書館サービスそのものが、変わっていくであろうということですね。これがこの二つの問題です。ネットワーク環境が整備されているので、こういうものがますます加速する、あるいは、これが、いちごっこといいますか、このへんが変わりますと、ますますネットワーク環境が整備されるということになってまいります。さらに、電子化による情報サービスにこれがどうやら変化を及ぼしていきそうだということで、じゃあ、どんな変化が出てくるのだろうかということ、皆さんがたと一緒に考えていきたいというふうに思います。そこで、話を少しもとへ戻しまして、いままでの我々の図書館における情報サービス、これの前提をなしていたものは何であったかというところへもういっぺん立ち戻りたいわけですね。足場を固めたうえで、これからどうなるかということを考えていきたい。

そのときに、さきほどもチラッと申しましたが、今までの我々の図書館サー

ビスの問題を考えるときに、前提をなしておりましたのは、これは来館利用、利用者が図書館にやってきてくれる。その場で閲覧・貸出サービスを受ける。これが、我々が従来前提においていた図書館の利用パターンであったわけです。そこで、これがなんで変らざるを得ないのか。さっき言いましたように、来館利用しなくなったということが一つあります。しかし、もうひとつ大きな問題が・・・これは先にいってから詳しく述べますが、土屋先生は別の表現をとられたと思うのですが、わたくしなりの表現をとらしてもらおうと、閲覧・貸出サービスに主体を置いている限り、図書館員はいったいどこに、自分達の仕事の付加価値をつけているんだらうかということになるわけです。いま公共図書館の世界では、ご承知のように、図書館員はこの在来型のサービスをまだ固執してやっております。その結果、彼らがいかによく働いたか、活動したかということのご褒美といいますか誉めてもらうための指標は何かといいますと、ご承知のようにこれは貸出冊数ということになるわけですね。

その結果、各公共図書館が貸出サービスに狂奔する。某政令指定都市では渡辺淳一さんの「失楽園」をなんと500セットも副本を揃える、こういうことがおこってくるわけです。この結果、それだけですんだら、ただでさえ少ない図書資料費を無駄に使いましてねということだけで済むのですけれども、日本文芸家協会から図書館はけしからん。

ただで本を貸して我々の生活権をおびやかしているといっって、いま、訴えられています。そうすると、もう少し・・・まじめなという表現がいいかどうか・・・閲覧・貸出サービスではなくて、もっと図書館職員が価値を付けられるようなサービスはないか・・・というような問題が出てくるわけでありまして。

そのときに、じゃあ、図書館とか情報センター、ようするに図書館とは何をするとところなのかということを考えてときに、現時点ではそれは本ですね。本と言うのは、我々と国大学図書館ではどう考えるかということ、これは情報記録あるいは知識記録のパッケージであるというふうに考えられます。それを蓄積・保存する拠点になるということが前提になりますし、その中から図書館サービスというのは検索提供している。検索して・・・そのものとしてのパッケージを提供するわけです。情報を提供すると言いますが、図書館の職員は情報そのものを提供しているわけではない。知識を利用者に授けているわけでもない。単なる、ものとしてのパッケージを提供していることになるわけです。その中身の知識や情報については、これはさきほど土屋先生のお話にあったようですが、コンテンツの専門家がその中身についてはわかっている。利用者、すなわち大学図書館あるいは研究図書館の場合に、利用者がコンテンツについての専門家であるということを前提にしております。そうなりますと、図書館における情報サービスはなんだといいますと、利用者が主題の専門家であって、サービスを提供する側は、その中身についてはわからない。パッケージについてだけわかっているのでありますから、これはどうしても補助的な仕事になってしまう。そういうふうには世の中は見えてしまいます。そのパッケージを提供するということも、それはそれで大いに専門性があるのだ、ということをお図書館側は主張しますが、世の中はそれで納得してくれないんですね。これ、正しいか間違っているかという話は、もっと複雑な要素がはいってくる話ではあるわけですが、簡単にい

ってしまうと、やはり大勢の人が正しいと認めたものは正しいわけでありまして、圧倒的多数の人間がものの提供は情報提供ではない。情報の付加価値は何らなされていない。こういうふうに言われると図書館員は多勢に無勢、非常に不利な立場に置かれている・・・こういうことになってきます。そこでどうするのかということですが、それを今日考えていたただこうということでもあります。

そこで、電子図書館という話になります。たぶん、土屋先生のお話の中で、奈良先端大学の日本を代表する電子図書館と言われる・・・と言われるもの、あるいは言われたもの、これがとんでもないものだ、というお話があったのではないかというふうに思いますが、電子図書館というものは、これは後でも、わたくしもわたくしなりに言わせていただきますが、盛んに使われる言葉です。人さまざま。いろんな意味に使われます。それでは、そんなあいまいな電子図書館という言葉が出てきて、電子図書館という概念が出てきたのか。というと、これは言うまでもなく電子出版物・・・電子出版物という概念自体が、オンライン出版もあれば CD-ROM のようなデジタル記録にした記録物を紙に代えて満たすというような・・・さまざまな電子出版がありますけれども、ともかくそれらをひっくるめて電子出版物というようなものが増大した。ようするに、人間の肉眼では読めないというものです。こういうものが出てくると、図書館は変わらざるを得ないわけですね。

これまた、いままでの図書館の仕組み、図書館に関係する社会構造を前提にしたときに図書館の非常に弱いところなのですが、電子出版物が出てきたときに図書館が電子化しないと、この電子出版物の中に入っている知識情報が我々のものにならないと、あるいは図書館の利用者のものにならないという社会的な位置づけが、長年の伝統といいますが、図書館の伝統というよりは慣習の中で放置されたままになってきた。こんなことでいいのだろうかという一つの問題提起ですが、実は問題提起と受け止めないで、電子出版物が出たんだから電子図書館を作らなければだめだ。電子図書館を作るためには、紙の本なんかいらんないんだ。こういう短絡的な一部の図書館員・・・あえて言うならば、一部のコンピューター技術者に悪乗りした一部の図書館員の先棒が、日本国中の図書館を大変な混乱の渦に叩き込んだというふうに考えられます。

世の中には在来型の紙媒体図書館というのがひとつあります。これは紙に印刷された本が集まっている図書館でありまして、利用者は健全な視力と基本的なりテラシーさえ持っていれば利用出来る図書館であります。それにたいして、コンピューターがいま図書館の中に入っていなければ意味がないのだと・・・多分、ここにおられるみなさん 10 人が 10 人そう思っていらっしゃることと思います。それらは決して電子図書館ではないのです。それらの中はオートメック・ライブラリというのと電子図書館、エレクトロニック・ライブラリこのふたつにわけられるはずであります。それでは、同じように図書館にコンピューターが入っていて、電子図書館と機械化図書館。これはどう違うのかという話になります。これ、わたくしのいう話では実はありません。カリフォルニア大学のマイケル・バックランドの説を、わたくしは単に受け売りをしている

わけでありますが、この機械化図書館というのは・・・図書館の業務・・・サービス提供を含みまして図書館の業務が、紙媒体図書館の場合と基本的にかかわらずに、単に業務の効率化のために新しい情報技術、具体的に言うとコンピューター技術を応用している図書館ということになります。それにたいして、コンピューター・テクノロジーが図書館に入ったことで、図書館にイノベーションが起こった場合、イノベーションはご承知のとおりそこに新たに新しい文化が生まれるということが必要になるわけでありまして、それがあつた時に初めて電子図書館、エレクトロニック・ライブラリになるわけです。こうやって考えてみますと、わが国で多くの図書館にコンピューターが入っておりますが、しかし、それらの図書館は、わが国では99%機械化図書館の域にとどまっております。電子図書館はほとんど生まれていないということになるかとわたくしは考えております。電子図書館になった場合の情報サービスがどういうふうになるのかということを考えなければいけないのですが、この電子化されることにより何かわかるのか。紙媒体、あるいは機械化された図書館、ようするに在来型の図書館サービスのあり方に対して何かわかってくるのか。ここにあげた五つのものが代表的なものになります。もちろん、それにはこういう前提があります。装置があるいはシステムがきちっと動員されなければならないし、それが稼動するようなインフラが入っていないなければならない。ところが、これは、わたくしは専門家ではありませんのでよくわからないのですが、みなさん方も感じておられると思いますが、どうもわが国の情報インフラというのはですね、諸外国に比べてかなり弱いのではないかとということです。

そういう話をしていきますと、また、ずいぶん時間がかかりますのから、それはそれで、おいておきまして、従来の図書館の情報サービスというのは何かというと、速報性は欠けるけれども、速報性を求めるなら図書館へ行かずに別の所にいるんなことをやりましょうということになっていたわけです。たとえば、今日、六時から「さんさ踊り」が始まる。盛岡のお天気どうなるのか。さっき雨が降ったけれど、こうなるわけですね。カサを用意していくべきか。この情報を従来の図書館に行って求めても、それは違いますよ。それは、たとえば気象情報サービスセンターに電話をかけなさいとか、あるいは、せいぜい、マスメディアに移動しなさいという話になったはずです。しかし、いまは図書館で十分それが手に入るわけですね。インターネットを経由して。それから、さきほどらい、申し上げておりますように、非来館方に利用パターンがかわったというのが、これが・・・これが当たり前になってきた。それから電子出版物というものが出ることによって、同時複数利用が可能になる。そうすると、「失楽園」を500セットも揃えようという図書館は必要なくなってくるわけです。さらには、改定や編集が極めて容易になる。アクセスも容易になります。こういった問題が、新しい形での情報サービスを可能にしていくことを形成するであろうというふうに考えます。今までお話してきたことを簡単にまとめますと、こういうふうになるわけですね。この左側というのは、これは旧来型の伝統的な図書館サービスであります。来館利用と閲覧貸出しが中心であった。そのサービスは検索し提供するものであった。情報検索論が中心でありますから、適合情報が重視されたということです。その前提となりますのは、利用者

がコンテンツの専門家で、図書館員というのは補助的な業務をすればいいという考えでありました。ところが右側が、これからの、今日わたくしがお話ししようとする結論がもうすでにここに出しております。非来館利用・・・情報の価値創造がなかったなら意味がないということです。いくら検索して提供したところで、だれかが書いたものを、そのパッケージを単に書架に放り込んでおいて、時間と場所で付加価値を付けて提供する。それは図書館の付加価値創造であるかもしれないけれども、図書館員にとっての情報の付加価値創造ではないのです。時間と場所が付加価値の元になっているわけですから。図書館員は、自分の図書館員の知恵と才覚でもって付加価値を生み出さなければならないということになります。そうすると、検索のときには適合情報を出せばいいのだということになってきたわけです。利用者が要求したものを出せばいいでしょう。検索論の専門家は、いや、適合情報は簡単に出ませんよと言います。しかし、検索論の人間が「適合情報ってそう簡単に出ませんよ。」と言うのは当たり前である。それは、自分達がそれを研究しているわけですから、いろいろ難しいことがあって、俺たちはこんな難しいことをやっているのだと主張しなければならないわけですから、当然といえば当然でありますし、反対に、そのことを前提にして研究しているのだから、難しい難しいといつまでも言い続けるなど、こちらは言いたいわけですね。これからやらなければならないことは、適合でなくてもいいよ、利用者満足の情報を出さなければいけないということです。これは、おわかりいただけますね。適合でなくても利用者が満足する情報があるわけです。反対に、適合であっても利用者が満足しない情報もあるわけです。そのときに、どちらが、価値があるというふうに客観的に認められるかということ、利用者が満足してくれる情報なんです。これは何も図書館に限ったことではありません。これは、このなかでマーケティングの専門家がいらっしゃればおわかりのとおり、「利用者満足」というのは、最近、20世紀の後半になって1980年代、90年代のマーケティングの基本概念であります。かつては、いい製品を作ればいいのか、あるいは利用者にとって便利な製品を作っていればいいのかと言っていた産業界が、いまやその利用者の満足を勝ち得なければいけないというふうにかわってきたと同じように、適合情報から利用者満足にということに・・・そうなりますと、利用者はコンテンツの専門家でもなんでもなくて、情報を求めている人なのだ。この、情報の提供を求めている人を、満足させる情報を提供するのが図書館員であって、その限りにおいて図書館員が指導的な立場をとらないでどうするのだ、という話になります。この指導的な立場というのを、さきほど土屋さんはかなり難しい言葉で言っていたわけですね。「学生に自分で勉強するように仕向けろ」とか、「教員には世の中の情報化を思い知らせるようにしろ」とか、いろんなことをおっしゃいました。あれは、わたくしの言葉を借りると、この指導的な業務を図書館員がやりなさい、ということの具体的な作業を指示されたということになります。

このような図書館の情報提供サービスなのですが、基本に立ち返りますと、これも図書館サービスである以上、「情報」「資源」「施設・職員」これを組み合わせることによって、これが図書館学の教科書のいちばん最初に出てくる話なのですが、図書館の三要素、これに今は「利用者」というのを付け加えること

がありますが、この伝統的な図書館の三要素を組み合わせることによって図書館サービスというのが実現出来る。そのときに、この三つを組み合わせると何が出来るのかというと、図書館がやってきた、これらを組み合わせるサービスを、大きく集約いたしますとこの三つの種類に集約出来るのではないか。一つは書誌データの提供です。書誌データの提供を通じて、文献すなわちパッケージそのものを提供していく。もう一つは、事実・主題・あるいは紹介情報を、これを提供する。いわゆる、これはレファレンスサービスという言葉でいうところのものですね。そして最近、もうひとつ、従来のレファレンスサービスのなかの利用指導というところが分離・独立している。これに非常に力が、力点がかかってきているわけでありませぬ。特に大学図書館はそうです。ところが、これがあまり強調されないのは、皆さん方の世界では強調されているかもしれませんが、広く図書館界をつうじて見たときに強調されないのは、公共図書館が頑としてこれにのってこないです。地域の住民に対して利用指導とは何事か。住民が王様で主権者であって、その限りにあっては正しいと思います。主権者としての考え方というものを、ある方向に引っ張るとするのは止めたほうがよろしい。それは事実そうなのです。しかし、考え方をどうこうするのではなくて、利用の仕方をきちっと教え込む。ある面で教育的な機能を果たすということは、少なくとも大学図書館において、そして、広くいろんな館種を考えたときに、これからの図書館サービスを考えたときに、これは極めて大事なことであるということになります。ようするに、図書館の検索ツールも学問の仕方も、こういったものをきちんこの利用指導の範疇の中に入れて、どうすればいいということですね。

みなさんがた、ご承知のように、かつては、大学の学部教育の中で、一般教育と専門教育という大きな枠組みがありました。で、これはまずいということでは一般教養というのはなくなっただけでありますけれども、日本の大学というのは、事なかれ主義でありますから、一般教養の教員を首にできないです。残しておいて、相変わらず、昔と同じことをやっているわけです。まあ、どの大学とはいいいませんが、まったく同じ教員がまったく同じことを教えていながら、それは現在では一般教育ではなくて、それは何ということという総合教育だという。わたくしは、これは詭弁以外の何者でもないと思いますけれども、そういうやり方をやっている。それだったら、図書館員が徹底してこれをやればいいんです。それが本当は求められていたのだと思うのですが、文部科学省のお気に入りの先生方の中には、そういうことに気が付く人はほとんどいないということになります。今申し上げてきたことというのは、情報技術が発展した。それによって、情報サービスがかわる。図書館が変化する。ということになります。情報を求める・・・すなわち利用者が情報へアクセスしようとする、その仕方を、今までのやりかたを少し変えてみようという問題が一つ出てまいります。そのことは何かということ、もはや、今日は、わたくしはサブタイトルから落としたのでありますが、今日しゃべることと同じようなことを言うときには、「情報検索理念の終焉」というサブタイトルを、最近付けさせていただきます。図書館員が情報検索、情報検索といっていたら時代に取り

残される。もうそんなことを考えている時代ではない。「次のことを考えてください」と申し上げたいわけです。そのためには何が必要なのか。このアクセスですね。ここに4種類のアクセス概念が書いてあります。これは我々が、新たな知識を求めようとするときに、どういうふうにアクセスをするか。その知識にアクセスをするか。ひとつは、自分が求めようとする知識がどういう文献にあるのかということを探す。これは図書館に即していうならば、図書館の目録ですね。書誌データが印字されている目録を見て、そしてどこにその文献があるのかということを知ること。これが、ここに書いてある書誌的もしくは指示的アクセスという概念であります。目録情報がわかっただけでは、その利用者にとっては最終的な目的が達せられたわけではありません。その目録情報で指示されている文献が読めるような手元に来て、目の先30センチに置いて読めるという状況があって始めて知識・情報が伝わるわけありますから、それが物的アクセスです。伝統的な図書館で言うならば、これはアベイラビリティの世界です。アベイラビリティを実現する。アクセシビリティをここで実現しておいてアベイラビリティを実現する。このアクセシビリティとアベイラビリティ、この二つが対になって実現できて図書館というものは始めて役に立つというふうにいわれてきたわけですね。ところが、実際に我々が知識を得ようとしたときに、この二つでいいのだろうか。これじゃ不十分じゃあないかということがあるわけです。

具体的なことを申し上げますと、この二つを前提にしているから、検索適合情報を出せばいいという、そういう議論が成り立ってしまうわけですが、その適合情報として出てきた文献がですね、仮にみなさんがたが、ある知識を求めておられまして情報検索してもらいました。書誌データが示されました。その文献を取り寄せました。日本語で書いてある。あるいは英語で書いてある。これだったら読めますね。だから問題ないと思いますが、たとえばそれがドイツ語、フランス語になる。あるいは中国語、ロシア語になる。ゆうことになると読める人はずっと減ってゆきます。さらには、チベット語で書いてあったり、ウルドゥー語で書いてあったりという話になるとほとんどの人が読めないわけです。読めないということは、これは何かというと、パッケージが目前にあったとしても、読めなければそこから知識は汲み出せない、情報は汲み出せないわけですから、それはないに等しいわけです。したがって、この言語的なアクセスというものが情報を入手するためには必要不可欠であるということになります。

従来の図書館では、この一部の学術研究図書館を除いては、言語的アクセスは、特に大学図書館においては意図的に排除されていたということがあります。たとえば、大学図書館の中で、人文社会科学系の図書館で、翻訳サービスを図書館サービスの一環に取り入れている図書館はほとんどないわけですね。どうして翻訳サービスをやらないのですかということ、いや、そんな語学教育を阻害するようなことはできないという話しになります。

ところが、同じ大学図書館の中で、医学図書館や理工学部の図書館、エンジニアリング・インフォメーションの分野ではかなり多くの図書館が翻訳サービスを図書館サービスの一環として入れているのです。もちろん有料です。で、

これは図書館として併合的なアクセスが必要だということを認めているに他ならないのです。そうすると、これは点線を越えてこの黄色い方にアクセス概念を拡大していくというのが、今後の方向性を示しているというふうに考えていいのではないかとということになります。

さらには言語的なアクセスをクリアしたとして、概念的なアクセスがあります。これもみなさんがた、よく経験されるところでありますが、出てきた文献、確かに自分が要求したものである。要求した主題、領域のもので適合の文献である。ところが、現実にその文献を読んでみたら、価値のある情報として得られるものがない。言い方変えれば、極めてやさしすぎる。こんな入門書レベルのものはわかっている。といったような場合には、非常に高度な内容で難しすぎて内容が理解できないというようなことが、しばしば起こります。ですから、本当の意味での適合ということであるならば、これは概念レベルが検索要求者の要求しているレベルと提供された文献との概念レベルがぴたっとあっているということが必要になるわけですが、これについてはどうやってそれを合わせるかという基本的な方法すら提案されていないということになるんですね。

で、こういう問題を考えますと、情報流通の過程における図書館の位置付けというものが、今までの形ではたしていいのだろうかということにつながります。上に書いてあるもの、これは在来型の図書館の情報技術過程での位置付けであります。著者がいて、著作を著してそれを出版して、出版技術の過程を経て、図書館に続く。配る。その図書館で読者が読んで、それで情報のライフサイクルが完了する。ようするに図書館が末端にあるわけですね。川下にある。ところが、紙の印刷の場合ですとこの形がどうしてもこれを崩せなかったわけですが、現在のデジタル化あるいは電子化という問題を考えたときに、この状況が出てきた。図書館に読者が行くわけですね。しかし、その読者は同時に著者でもあるわけです。これは、皆さん方の図書館に現れる大学の研究者を想定してください。図書館でさまざまな情報を利用しながら、そこで新たな研究報告書を書いていく。研究論文を書き上げると、そこから図書館の閲覧デスクからそのまま発信するわけです。学術雑誌の編集委員に向けて査読を依頼するという形がとられます。すなわち、これが一体化してくるということになります。

その結果何が起こるかということ、図書館があって著者があって、そしてそれが必要に応じて出版社に伝わっていく。ようするに、図書館は川上に行ってしまうわけです。こうなりますと、冒頭で申し上げたように、出版の状況がかわらない限り図書館がかわらないというような状況は起こってこないわけでありまして、反対に図書館がかわることにより出版という領域が大きく変わってくる・・・こういうことになっていきます。ここで、したがって図書館の機能がかわって、図書館というのは単なる本の倉庫から情報のマーケットになる。ようするに、知的文化創造の舞台になるということになります。それは、あわせて出版物を、従来、管理していた感覚ではありますが、そうではなくて、パッケージの管理ではなくて、知識そのものを管理するという役割を、図書館が担わなければならないということになるわけですね。それが情報提供のうえでのサ

ービスの変化につながっていきます。

これは何が言いたいというかと、ようするに、今までの形だと、これは冒頭も言いましたように、付加価値を付けていると図書館員が主張しにくい。そのためには、この形での提供ではなくて情報の評価・分析・加工という新たな形のサービスを生み出していかなければならない。間違えていただいでは困るのは、こうなってしまったら閲覧・貸出サービスはないのかということ、そうではないのです。閲覧・貸出サービスは依然として残ります。在来型のサービスがあったうえに、こういう新たなサービスを付け加えていかなければ図書館員としての、社会に対する付加価値をつけている仕事をしているんだという主張はできなくなる。そこで、情報サービス、図書館サービスの目標というのかわってくるということになります。情報検索の時代はこれでよかったです。

しかしこれからは、ジャスト・イン・タイム、ジャスト・フォー・ユーこういう情報を提供していかなければならないということになります。これは、どうということかといいますと、これは、従来は、特殊な島だというふうに考えられていたわけですね。

みなさんがた、若い方は別かもしれませんが、わたくしの世代の人間は・・・図書館に配属された・・・たとえば、わたくし、専門図書館におりました。会社に入りまして図書館に配属されました。ということになりますと、これは、その本人もそうですし、家族、特に親ですね。これはもう非常に嘆くものであります。お前は図書館員になるのか。さっさと会社辞めたほうがいいね。将来はないのだね。これ想像できますでしょうか。そういう、まさに特殊な島だったのです。で、その特殊な島の中で、島には島の掟があります。その掟が感じがらめに縛られてやってきたのが図書館の世界であった。それが、いまやそうではなくなっているわけでありまして。わたくしの教え子、学年でいいますと五十人ぐらいおりますし、ゼミの学生も15人おります。図書館に勤めたいといいます。なかなか図書館に勤められませんが、図書館に入れた学生は、仲間や後輩から非常に羨ましがれます。羨望の念をもってみられます。そういうふうに、大きくこの特殊な島がかわりました。これは皆様方の努力された結果でもあろうというふうに思います。

これは現在では、一つの組織として社会的に認知されているわけです。ところが、そういうふうに認知されると、必要なことは、この特殊な島のときに発生して、それ以来、連綿と続いているこの島の中の掟は、これはもはや捨て去って、一つの組織としての常識の中で動かなければならないということになります。それは何かということ、図書館サービスという図書館活動の成果に対する厳正な評価が求められるということです。これは、特に大学の世界ですと最近、大学に対する風当たりが非常に厳しいですね。ですから図書館だけではなくて、我々教員あるいは大学の管理者すべてにわたって極めて厳しい評価を求めてきております。図書館もその例外ではないということです。とくにコストパフォーマンスについて、きちっと評価する必要があるのではないだろうか。それから、もうひとつ、これもこの間に飛躍があるのですが、ひとつひとつの図書館についてコストパフォーマンスを中心にして厳密な評価を行う。それから現在のネットワーク研究の中でどういうふうに活動すべきだろうか。単館ではこう

しなければならない。単館ではない複数館が集まった中でどうあるべきか、というと、このETPやコンソーシアムの活用が必要になっていくことになりませう。で、その両方について、ご説明をしてゆきたいのですが、まずコストパフォーマンスのお話をいたしましたので、図書館のサービスコストについて我々は今まであまりにも無頓着であったのではなからうかということですね。これはやはり、大学図書館の人は公共図書館の人を馬鹿にします。みなさん、公立大学図書館ですから・・・同じ職場の仲間に公共図書館・・・日本の場合、公共図書館の99%が公立の図書館ですから、公立の図書館の経験をもった人がいらっしやるかもしれません。大学図書館の人は、どういうわけか、公共図書館を馬鹿にするのですが、確かにそれは、なるほどと思う面もあるのですけれども、やはり公共図書館には公共図書館の見習うべき所もあるのです。

これは、じつは図書館のサービスコストについては大学図書館では今まで、日本では具体的な事例は、わたし寡聞にして全く知りません。どこかの大学図書館がコスト計算を行った、あるいはコスト計算のための業務分析を行ったということを知りません。ところが公共図書館は、これをちゃんとやってくれたのです。これを見てください。1冊の本を貸し出すとこれだけのコストがかかります。1冊の本を館内閲覧させるとこうなります。これは当然のことですが、利用者に館内閲覧させるよりは、貸し出してもって帰れと。ただし、これは当然のことながら利用者が、きちんと図書を丁寧に扱って期限内に返却するという前提にしての話であります。その場合、館内閲覧の方がずっとコストがかかっているわけです。当然ですよ。図書館の施設を利用しているわけですから。光熱費もかかります。あるいは場所も閲覧室も用意しなければならない。図書館でいとも簡単に予約を受けてくれています。1冊の本を予約するとそれだけで人件費もかかれば予約を受け付けるためのコンピューターシステムの償却費もかかるわけです。・・・何とこれだけかかるんです。返却督促を1回おこないますと。皆さん方にお尋ねしたいのですけれども、皆さん方の図書館で返却期日に遅れたときにペナルティを取っていらっしやいますでしょうか。恥をさらすようではありますが、わが大学、実に昨年までに取っていなかったんです。今年の1月1日を期して取ることにいたしました。ところが、「取れ」と言ったのですが、図書館の連中は、やはり、おっかなびっくりなんですね。1日1冊10円いただきます。そんなこといわずに、もう一桁上げとけ。10円から始めると100円に上げるまでまた大変だぞ。ということをやったのですが、いや、必ず文句が出ますから。というわけで10円から始めました。10円で初めて、この7月までにどれだけ貯まったか。これ恥じだから本当は言いたくないのですけれども、1800万、ペナルティが入ってきました。しかし、これを考えれば、1800万ぐらいではまだまだ足らん、もっともっと取り上げなければならんという話になるわけです。これは、某政令指定都市の公共図書館がやってくれたからこういう数字がでてきたのです。某政令指定都市のしかも地区館です。中央館ではなく地区館がやってくれたのです。レファレンスサービスというのがありませんが、簡単な「お宅にこの本ありますか」という全くのクイックレファレンス、これで800円かかるんです。反対に、「こういう問題について調べてください」という事項調査になりますと、こんなにかかるわけですから、レファレンスサ

ービスをみなさんどうぞご自由になどということはあまり言えないという話になるわけです。それから、集会活動をおこないます。これは特に地区館がやりましたから、著名な講演者を呼んできて、1時間しゃべったら30万、50万というような高額な謝礼を出しているわけではないのです。

こういうことから言えることは、それだけのお金がかかっているわけですから、当然ことながら、サービス効果というものを重視しましょう、ということになるわけですね。こうしたときに、我々として何を考えなければならないかということ、ユーザーの選別をやりましょうということ。これもまたちょっと語弊を恐れまして、付け加えますが、決してだから既存のユーザーを切り捨てると言っているわけではないですね。既存のユーザーは、既存のユーザーでおいといて、それらの人たちには在来型の、あるいは利用者が自主的に使えるようなサービスを提供していきましょう。利用者が勝手に図書館にやって来て館内閲覧をしてくれる・・・大いに結構。自動貸出機を置いて、勝手に貸出手続きを取って持って行ってくれ・・・大いに結構。で、浮いた手でこういうことをやりましょう。末端研究者と書いたのは既存のユーザーです。組織のマネージャーと書いたのは資源の配分決定者です。資源の配分決定者に、図書館って価値のある仕事をしているのだというふうに思わせて、初めて図書館は予算が確保出来るわけです。いくらこの人達が、失礼ながらこの人達が図書館役にたつよねえと思ってくれても、それが図書館の予算に跳ね返ってくるのは、これらの人達の十人に一人が百人に一人が、組織のマネージャーになって予算配分者決定者になったときに初めて可能になるわけです。

そんなの待ってられないわけですね。それなら今の資源配分決定者に徹底的にサービスを提供してやろうではないか。ところが大学図書館についてこれまた、そういうことをやっているということは聞いたことがないですね。一般教員と学部長とで図書館が扱いをかえた・・・けしからんという話になるわけです。ところが、いま公共図書館で何をやっているかということ・・・公共図書館では明確にこれをやり始めました。一般住民、市民に対する図書館のサービスのやり方とそれから行政部門ですね、同じ自治体の行政部門の行政担当者に対するサービスを新たに開始しました。これにはかなり手厚いサービスを提供し始めたわけです。これは大いに大学図書館として学ぶべきところではないかというふうに考えます。こういう個別のユーザーに有効な情報、すなわちジャスト・フォー・ユーですね。特定のユーザーにぴたっとあった情報を提供する、しかも、それがジャスト・イン・タイムでなければいけない。これがこれからのサービスの基本的な形ではなかろうかというふうに考えるわけです。図書館というのは、今、わたくしが、ずっと申し上げてきたことは、この中の何人かの方は、まあ、そうだなというふうに思っていただけだと思いますが、しかしそれらの人達でも、ようするに図書館の経営の三要素であるところの金・人・物のこの全てに不足している。そういうなかで、要求だけは過大に図書館に寄せられる。じゃあ、図書館はどうすべきか、ということになるわけですが、これは、そこで当然のことながら運営の効率化を図らなければならないし、ワンセット主義と書きましたが、言い方を変えれば単館主義であります。皆さん方の所属しておられる図書館がひとつひとつ独立した形で利用者の様々な要求に、

立ち向かっていこうという考え方はお止めになった方がよろしいでしょう、ということをおっしゃるを得ないわけですね。じゃあ、どうするのか。図書館にとっての鉄則は、これはまた後で言う機会があるかもしれませんが、利用者からの要求に「それはうちの図書館では、とてもお受けできません」と言ってはダメなんです。どんな要求であっても絶対に、お任せくださいといわなければいけない。だけど、それに対して我々が持っている経営資源というのはあまりにも貧弱なのです。そこで取りうる手は、単館主義をあきらめましょうということになります。当然のことながら、単館主義ではなくてよその図書館も巻き込んでということです。それで対応していきましょうということになります。まず、それをやるためには、ここに書いてありますように、館内においては省力・省スペース・省資源これを徹底しなければなりません。それから、外に向かっては、外部資源をどう活用するか・・・アウトソーシングです。ようするに業務の外部委託というものを徹底してやる。もうひとつは、公立学図書館というものの活用、他大学図書館の活用ということになります。

以上は、図書館経営の見直しということなのですが、それでは個別サービスというものがどうなっていくかということになります。ここに書きましたように、この一番というのは、これは在来型の図書館。これはこれによる付加価値を付けていなかった。これからは、二番、三番、四番と言うのが必要になってくる。二番、三番というのは、これはどこでもおやりになるのかもしれませんが・・・二番のところを見ますと、専門性による付加価値ということを考えていただくときに、まず図書館の専門性というものを我々は最大限に生かす必要があるのではないかと。その時に、日本の図書館界でも、この目録や索引や抄録を作る、これが、図書館員が行うべき仕事である、ということはつとにわかっているはずであります。目録を作らない図書館はないと思います。しかし、いまや図書館の中でどれだけの図書館が、オリジナル・カタロービーが出来るのかということにきているわけですね。ほとんどがコピー・カタロービーですましてしまっている。しかし、実際は効率化のためコピー・カタロービーでいくのですが、図書館員の能力としてはオリジナル・カタロービーが出来るのだけれども、効率化のために今はコピーでいこうという形でなければいけないし、索引や抄録ということになると、これはみなさん方、頭ではわかっているでしょうが、きちんと索引や抄録が作れる図書館員が日本でどれだけのいるのか、あるいは、それをトレーニングする場がどれだけ確保されているのかということになります。しかし、これ、曲がりなりにも、日本でたとえば索引や抄録というのはそれなりに作られています。特に公立大学の図書館の中でも、医学・薬学の系はこれをしっかりやっているはずですね。またやっていると困るんですけども。一番申し上げたいことは、レビュー論文を書くというこの仕事が、日本の図書館界ではかなり忘れられてしまっているのではないかと。レビュー論文を書けるのは、これは主題専門家であり、しかも大学の著名な先生でないと大学の入学者に対してその分野のレビューは書けないんだという、こういう摩訶不思議ないいかげんな話がまかりとうっている。これこそ図書館員がきちんと書いてですね、これを書けることによって、さきほど示した図書館の新たなサービスとしての利用指導が可能になるわけです。

それから、主題専門性については、これはさっきの、土屋先生の話の中にもできてきたけれども、やはり主題専門家の協力というのも必要でしょう。しかし、大学という場合は、主題専門家が身近にいっぱいいるわけです。ですから、図書館員としても大いにその主題専門家を使えばいいわけであって、ここでは、動向分析レポートやさまざまな予測、これが図書館で出せなければならずです。たとえば、岩手県立大学の図書館が、10年後の岩手県の産業構造がどうなるか、地域構造がどうなるか、ということの予測報告書が出せなければ総合政策学部のある意味がないということになるわけですね。

もうひとつの・・・さきほどは二番目の図書館の専門性という話をしましたが・・・もうひとつは情報表現を使つての付加価値を考えましょう。この言語表現の変換、これはさきほどアクセスのところでもいいました翻訳サービスというものは、言語表現の変換によって付加価値を付けているわけです。これは、一部の大学図書館ですでにやっています。それから二番目は、表現形式を変換することです。さきほどの索引作成もある面での表現形式の変換でありますし、抄録作成は明確に表現形式の変換ですね。こういうものにも繋がっているのです。しかし、この表現形式というのは、単に言葉から言葉だけではないはずで、たとえば数値をグラフ化する。あるいは概念図をつくる。こういった言葉からチャートへという分野もあるはずであります。

ところが、プレゼンテーションの専門家として、図書館員が名乗りを上げていくということはほとんど見られないですね。プレゼンテーション論なんていうのが、結構、最近いろんな大学で展開されるのですが、そこに新任の教員が出てきます。その人達の前歴を見ますと、図書館員であるというケースは皆無であります。で、なんかコンピューターソフトをやっていたとか、あるいは、どこかの美大で工業デザインをやっていたとか、そういう人達ばかりですが、やはり、情報専門家として図書館学の表現形式としての、そのようなイラストレーションにさらに長けているというようなことも必要ではないかということです。もちろん、これは人それぞれの、得て不得手がありますから、皆さん方全てがそうならなければいけないという話ではありません。そういう能力を持っている人は、それを伸ばせばいいのです。語学の能力を持っている人は、言語表現のほうに行けばいいわけでありまして。それから、そうでない人は、さらには目録をちゃんと取る、目録のエキスパートになろうとかそんなことを考えていただければ良い。そして、サービスの形式における付加価値というものを付けるということも必要ではないかと思えます。これはまさに、デジタル化される、電子化されるところで申しましたように、情報がデジタル化されていることによって、編集や改定というものが極めて容易になるようになります。この編集機能を使うことによって、パッケージのリパッケージ化、これが極めて容易になるのです。あるいは、大きな情報の単位から、ある特定部分をパッケージ化するということも可能になるでしょう。もちろん、そういう話をすると、それは著作権でまずいですよ、ということがでてくるわけですから、もちろん、法的な問題と整合を取るといったことも必要でしょうし・・・しかし、それが図書館にとって必要なら、いまの著作権法おかしいぞということ、

図書館側から声をあげる必要も出てくるということになります。

それから、新たな情報の創造は、さきほど言いました、情報の、たとえば予測情報を出すとかあるいは動向分析を出すとかということですね。もうひとつは、さきほどここで表現形式のところでは言いました、プレゼンテーションです。これも単に紙の上、あるいはコンピューター画面の上はどう表現するかという話だけではないはずで、こうやってわたくしがしゃべっている。このしゃべり方、わたくしは、今日は極めてモノトーンでしゃべっておりますが、決してい見本になってはおりませんけれども、しゃべり方をどうするか、ということ・・・あるいは、どういう人を対象にしたときにどういうしゃべり方をするのか、あるいは、どういう状況の中でどうしゃべるのか。同じ情報を提示するときに、大学図書館員として学部生を対象にしたときに、学部の教員を対象にしたときに、大学の総長を対象にしたときに、プレゼンテーションの仕方を変えていかなければいけないはずで、これを同じやり方でプレゼンテーションをやったならば、これは大学図書館員という以前の社会人としての素養を疑われます。これはいうまでもないことです。結局のところ、図書館で何を考えなければいけないかということ、みなさん方は、やれシステムの問題だとか何だとか言いますが・・・わたくしもあとでまたこう言いながらシステムは大事ですよとか何とか言うのですけれども・・・つまるところは、人・物・お金の話なのです。多くの図書館の人達、あるいは、わたくしが教えている図書館情報学を専攻している、将来図書館員に成りたいと言う連中にこれを見せるとね、みんないやな顔をするんですよ。自分達は、人・物・金の世界から逃げたいがために図書館の世界を選んだ。なのに、おまえはその話をするのかと、こう言って学生は嫌がっていますが、しかし世の中そういうものだ。これから逃げるなど言います。

まず一番今日の問題であります、職員の能力、人の問題。これはどういう知識を持たなければいけないの、ということです。それは情報の組織化の問題、情報って何だ、情報の社会学と書いてありますが、狭い意味でのソシオロジーを考えないでください。ここでは、情報の経済学とか情報関連の法律の問題とか、そういった問題全て含んでいます。それから、情報って何だろうか。たとえば、さきほど言いましたように情報はジャスト・イン・タイムであることが極めて大事なのです。重要な情報と即時性のある情報とサービスする側としてどちらを重視しなければいけないかと言われたら、これは、みなさんはどう考えておられるかは知りませんが、情報スペシャリストの鉄則として、即時性のある情報をまず提供して、それから重要な情報は後においてといてもかまわない、こういうことなのです。そういう、その情報の特性についての話、それから情報管理システム、図書館ですね。図書館の運営、これだけのことは最低限習得してください。

これは、わたくしが言っているのではありません。これが実はカリフォルニア大学の昔のライブラリィスクール、現在はスクール・オブ・インフォメーション・マネージメント・アンド・システムズ、これのカリキュラムの基本がこの四本柱です。いま、アメリカでもライブラリアンという言葉はだいぶ廃れてい

ます。インフォメーション・プロフェッショナルという概念が急速に伸びてきていますが、そのインフォメーション・プロフェッショナルを養成するためにはこういう関連の学習をしてくれないと困りますよということになっているわけですね。そこで養成する能力は何か、それから期待する能力は何か、それを個別にお示しいたしますと、情報システム、情報資源、情報教育、情報技術、ネットワークですね、それから情報サービス、それから情報分析というのはさきほど言いました動向分析です。コンペクティブ・インテリジェンスをしっかりと勉強してください。

たとえば、いま、毎日ニュースでアメリカがイラクを攻撃するか、しないかという話をやっています。選挙があるか、どうこうという話もあるのですが、もし選挙がなかったときに攻撃すべきかそうでないか。これはたぶんCIAがきちっとしたレポートを大統領に上げているはずですね。そのCIAの情報分析スタッフというのはどういう人達か。さきほど言ったインフォメーション・プロフェッショナルズ。もっと言うと、昔のプロフェッショナル・ライブラリアン。ところが日本の外務省で、情報分析官というと日の当たらないところに置かれているがために、たちの悪い政治家に食い物にされてしまう、ということです。この違いです。それから、利用者と技術者との間の仲介が取れるようになる。それから情報サービスと企画設計、それから情報政策の分析・立案、これは土屋さんが盛んにおっしゃいましたね。日本の、今、学術情報環境は極めて危険である。あれは、情報政策をきちんと立案するボードが文部科学省の中になんてないんですよ。図書館政策が日本の政府の中になんてないんです。文部科学省の中で、大学図書館は高等教育局。公共図書館は生涯学習局。学校図書館は初等中等教育局。というふうに局が全部分かれている。そうすると、わたくしは立場上、公共図書館の関係を少しやっています。生涯学習局に行って、大学図書館でこういう動きがありますからちゃんと連動してくれと言うと、「そんなことは我々の口から言えません。先生が高等教育局に行ってちゃんと話をつけてください。その結果、戻ってきてください。」こういう話なんですね。高等教育局に行っても同じことを言われます。これですから、全体を統合した政策ボードはありません。それでは国立国会図書館は何をしているか。かれらは、「我々は立法府ですから、行政府ではありませんから政策マターには手を出せません。」と言って逃げている。やる気になれば出来るんですよ。立法府が行政をやってはいけないということは全然ありません。憲法違反だと法律の先生はおっしゃるけれども、こと図書館に関してはアメリカの連邦政府は堂々とそれを行っているわけですね。

それから、情報リテラシー教育。それから文書館論と記録管理論です。アーカイブズとレコード・マネージメントをきちっとやらないとどうしようもなくなります。自治体で情報公開の話がどんどん進んでいますね。これが大学にもどんどん移ってきているわけですね。学生が成績について、記録を開示しろ、教師がどう採点したのか、なぜこういう評価を付けたのか、その結果を開示しろというふうにどんどん言います。いまのところは教務の窓口が対応してくれています。やがて対応しきれなくなってくると図書館にお鉢が回らないとも限ら

ないですね。・・・・・・・・あつ、時間ですね。

ここで区切ってしまいますが、それで、これSMAと書いてありますが、アメリカの専門図書館協議会が、専門職として図書館員が成り立つための能力というのは何かというと、ここに書いてある・・・全部で、11項目をあげました。で、これは、能力です。もうひとつは、能力と資質があるわけですね。もって生まれた性格です。これも同じアメリカの専門図書館協議会です。これはさっきの能力の方は、みなさん努力して少しでもこれを身につけてください。しかし、こっちは、そう言われたって持って生まれた性格だから、いまさら親を恨んでみてもしょうがないじゃないかという話になるのですね。しかし、これも、これに向かって努力する。誰もそんなの全て一人で備えているということはありません。誰もそんなの全て一人で備えているということはありません。

もうこれは、省いていきます。お金の問題を少しお話ししようと思ったのですが、時間がなくなりました。

申し上げておきたいことが一つだけあります。図書館会計がこれから必要になってくるかもしれません。なぜならば、ご承知のように、自治体の会計が「現金主義」から「発生主義」に切り換える方向に国も自治体もすすんでいます。そうすると、自治体の一部門である公立大学、あるいは公立図書館、これは、早晚、図書館の会計について「現金主義」から「発生主義」への切り換えがおこってきます。図書館の貸借対照表が作られないとどうしようもないという話になってゆく可能性があります。

ところが、こと図書館の方々は、お金については全く無頓着でありますから、図書館会計がいまだに全然確立してこない。図書館会計論やろうよという研究者すら現れません。これからの図書館の問題で、大きな問題は、図書館は経営単位に成るかなあということです。それはどういうことかということ、会計単位になれば経営単位になるし、でもせめてコストセンターぐらいにはなろうよ。附属図書館という立場にいるのか、独立して図書館になるのか、あるいはコンソーシアムか。このコンソーシアムへの移行というのはもう避けられない。・・・附属図書館という単館主義はもはや破綻をしまっている、ということになるのですが、このコンソーシアムが全ての面で、万、万歳かということそうではない。類似館の独立性が保たれるのだろうか、専門職制の問題はどうなるのだろうか、いろいろ解決しなければならない問題点がたくさんあります。というようなことで、最後にはこれは、ブリティッシュ・ライブラリの基礎を作りましたドナルド・アーカートの「業務の基本原則」を出しておきました。

ということで終わりたいと思いますが、最後に一つだけ、いろんな話を雑駁に繰り広げましたので、まとめになりませんが、少し申し上げておきたいと思いますが、今日のわたくしの話は図書館の環境が変わる、そして図書館が変わって職員への要求自体も変わってくるだろうということを基調にしてお話ししました。このときに、図書館は必ずしも従来の図書館の条件、これを引きずる必要はないのではないか。単館主義は終わったと申しました。それから情報検索も終わったと申しました。大学図書館の場合に単館主義、1大学に

1 図書館は存在するんだ、1 大学に 1 図書館は必要なんだという考えはもはや古いと思います。ですから、わが大学が安泰な限りわが図書館という職場は安泰だというふうには思わないでいただきたい。

公立大学は、さっきの土屋さんのお話にもありますように非常に恵まれた環境にありますのでわかりませんが、厳しい環境に置かれている、わたくしりつの大学の場合は、図書館を持つということに限界を感じている経営者はたくさんいるわけですね。出来ることなら図書館を無くしてしまいたい。そうすると、力のある大学が、おまえのところの図書館を引き受けてやろう、いままでの図書館をサービスポイントに切り換える、年間いくらという金額でもって大学図書館サービスを提供するという、そういう契約が成り立ってくると思います。そういうことで単館主義が終焉していくであろう。一つの図書館の中で全ての仕事を行うというワンセット主義、これもすでに終わっております。アウトソーシングがそうでありますし、人手が足りませんので、当然、人材派遣を受け入れております。臨時職員も入っております。そういったものを全部ひっくるめて図書館を運営しなければならないということになるわけです。ところが一方で、図書館サービスや情報サービスへの社会的な要求や期待は大きくなります・・・しかも高度化いたします。

したがって、今日申し上げた図書館職員の能力というのは、単に図書館の職員にあるからということではなくて、図書館サービス業務に関連のある職場、そこで専門性を維持するために働く人、そういう人達にとって必要な能力であるというふうにお考えいただければありがたいというふうに思っております。5分少々超過いたしまして大変失礼いたしました。これで終わらせていただきます。



平成 14年度公立大学協会図書館協議会研修会

図書館サービスの将来動向 と職員の能力

慶應義塾大学 文学部
高山 正也

図書館サービス環境の変化

- 伝統的図書館サービスの変容
- サービス前提の変化
- 図書館観の変化
- ネットワーク環境の整備
- 電子化による情報サービスの変化

既存の情報サービスの前提

- 来館利用と閲覧・貸出サービス
- 図書館・情報センターの機能
 - * 情報記録パッケージの蓄積・保存拠点
 - * 蔵書の中から検索 提供
 - * 利用者はコンテンツの専門家
 - = 情報サービスは補助的業務

電子図書館の環境

- 電子出版物の増大
- 図書館の電子化
- ・紙媒体図書館
- ・機械化図書館
- ・電子図書館

電子化情報サービス

【装置・インフラの必要性を前提に】

- 速報性
- 遠隔利用
- 同時複数利用
- 改訂・編集の容易性
- アクセスの容易性

新・旧サービスの対比

- 来館・閲覧・貸出
- 検索・提供
- 適合情報

前提：

利用者 = >

コンテンツの専門家情報サービス = >

補助的業務

- 非来館利用
- 情報の(価値)創造
- 利用者満足

前提：

利用者 = >

情報を求める人
情報サービス = >

指導的業務

図書館の情報提供サービス

- 図書館サービス
情報資源、施設、職員の利用
- 図書館の情報提供 3パターン
(1) 書誌データ提供 文献提供
(2) 事実・主題 紹介情報提供
(3) 利用指導

アクセス概念の拡大

- 書誌的 (指示的) アクセス
 - 物的アクセス (伝統的図書館サービス)
-

- 言語的アクセス
- 概念的アクセス

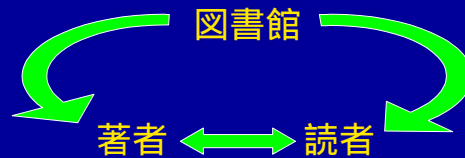
技術の進展と 情報情報サービスの変化

- 情報管理システムの変化
- 情報サービスの変化
??
- アクセス概念の拡大とサービスの
多様化 高度化
= 従来 of 検索理念の終焉

デジタル情報によるサービスの 変容

- 情報の流通

著者 → 図書館 → 読者 (川下型)



図書館 → 著者 → 出版者 (川上型)

図書館機能の変化

- 本の倉庫?情報のマーケット
?知的文化創造の舞台
- 出版物の管理?知識の管理

情報提供サービスの変化

- 既製情報資源 (パッケージ)の受入 提供
? (付加価値)?
- 情報の評価 分析 加工

情報サービスの目標

- **Just in Case** (適合情報)
- **Just in Time** (適時情報)
- **Just for You** (必要な、欲しい情報)
必要十分な価値ある情報

情報サービス環境の変化と その影響

- 情報管理部門：
特殊な“シマ”？ 一経営組織
- 成果に対する厳正な評価：
Cost / Performanceの重視
- ネットワーク環境での発想の転換：
ユティリティ、コンソーシアムの活用

図書館のサービス・コスト

- 貸出： 158円
- 閲覧： 254円
- 予約： 506円
- 返却督促： 1,651円
- 所蔵調査： 821円
- 事項調査： 4,753円
- 催事への参加：14,258円

情報サービスの今後

- サービス効果の重視：
ユーザの選別；
末端研究者?組織のマネジャー
(資源配分決定者)
- 個別ユーザに有効な情報 (Just for You)
- Just for You + Just in Time

図書館の課題

- (1) 運営の効率化
自前のワンセット主義の崩壊
- (2) リストラ・リエンジニアリングの進行
省力、省スペース、省資源
アウトソーシング
外部資源 (公的図書館) の活用

情報サービスの付加価値

- 概要
 - (1) 時間と場所による付加価値
 - (2) 専門性 (情報内容) による付加価値
 - (3) 情報表現による付加価値
 - (4) サービス形式による付加価値

情報サービスの付加価値 (1)

(1) 時間と場所による付加価値

(2) 専門性による付加価値

* 図書館 (書誌的) 専門性

目録、索引、抄録、レビュー論文

* 主題専門性

動向分析レポート、予測、

情報サービスの付加価値 (2)

(3) 情報表現による付加価値

* 言語表現の変換

* 表現形式の変換

(4) サービスの形式

* パッケージの提供・リパッケージ

* 新たな情報の創造

* 情報提示の方法

新たな経営資源

- 人的資源 (これからの職員 = ヒト)
- 情報資源 (モノ)
- 財源とその管理 (カネ)

職員の問題 : {ヒト}

- ? 習得すべき知識 ;
情報の組織化、情報の社会学、情報の理論、
情報管理システムの運営
- ? 養成すべき能力 ;
- ? 期待される能力 ;
 - * 職能
 - * 資質

情報専門職が養成すべき能力

- 情報システム
- 情報資源
- 情報教育
- 情報技術、
ネットワーク
- 情報サービス
- 情報分析
- 利用者・技術者の仲介
- 情報サービス・商品の
企画・設計
- 情報政策の分析・立案
- 情報リテラシー教育
- 文書館論記録管理論

専門職としての能力 (by SLA)

- 情報資源の知識
- 専門主題知識
- サービス開発・管理
- 利用教育
- 付加価値サービス
- 文献情報管理技術
- 情報の重要性の説得力
- サービスの商品化
- 情報マーケティング
- サービスの改善
- 利用者の情報アドバイザー

専門図書館員の資質(by SLA)

- サービス精神
- チャレンジ精神
- 広い視野
- 人間関係の達人
- 信頼される
- 意志疎通がうまい
- 他者と上手く働く
- リーダーシップ
- 企画立案能力がよい
- 向上志向がある
- 起業家精神がある
- 自己の仕事の重要性を知る
- 環境適応能力

情報資源の多様化とそれへの対応 : {Eノ}

- 電子出版の普及とそれへの対応
- 蔵書概念の再構築

受入年代別貸出

'00: 12.3%	'96: 8.9%
'99: 17.3%	'95: 7.6%
'98: 13.8%	'94: 9.5%
'97: 11.2%	'93: 19.5%

主題別貸出

- 0: 1.5%
- 1: 3.8%
- 2: 9.3%
- 3: 15.4%
- 4: 4.2%
- 5: 9.3%
- 6: 2.3%
- 7: 9.0%
- 8: 7.9%
- 9: 37.3%
- 合計: 100.0%

図書館の財務会計 : {カネ}

- ? 図書館のサービス・コスト
- ? 図書館の資産評価
現金主義 ? 発生主義

図書館会計の現金主義 : その問題点

- ? 蔵書価値の表示
- ? 外部情報資源活用による蔵書空洞化
- ? 財源開拓の可能性

図書館の貸借対照表

(借り方)	(貸し方)
資産の部 有形固定資産	負債の部 減価償却引当金
	資本の部

私立図書館の マネジメント・サイクル

- ?計画 ? 実行 ? 評価 ?...
- ?計画とマーケティング
- ?業務とサービスの評価
- ?経営管理権

図書館の経営管理権

- 図書館は経営単位になりうるか？
- 会計単位か、コストセンターか
?附属図書館か、コンソーシアムか
- 人事管理の独立性を保てるか
?専門職制の確立
(採用、昇進、処遇)

図書館業務の基本原則 (by D. Urquhart) —その 1—

- (1) 図書館は利用者のためのもの
- (2) 利用者の要求に本当に応えている？
- (3) 供給は需要を創る
- (4) 文献選択の「ガイド」が必要
- (5) 蔵書はいつでも利用できる
- (6) サービスの代償が必要
- (7) 費用対効果に関心を持つ

図書館業務の基本原則 (by D. Urquhart) —その 2—

- (8) 情報価値は金額表示できない
- (9) 図書館は収穫逓減の法則に関心を持つ
- (10) 「完全」より「タイミング」
- (11) 図書館も規模の経済を考えよ
- (12) 図書館は孤立してはやってゆけない
- (13) 利用者の客観的な要求に基づく経営計画
- (14) 新技術は将来を見通して採用

図書館業務の基本原則 (by D. Urquhart) —その 3—

- (15) 図書館職はチームの一員として働く
- (16) 図書館は研究を促進・支援する
- (17) 図書館は価値あるモノであり得る
- (18) 図書館(学)は経験科学

出典 :Urquhart, D. 図書館業務の基本原則.
高山正也訳. 勁草書房, 1985, 145p.

図書館サービスの将来動向と職員 の能力

慶應義塾大学 文学部
高山 正也



ご清聴、ありがとう
ございました。



第3講義「貴重資料の電子化について」

東北大学情報シナジーセンター学術情報支援掛長 日出 弘 氏

おはようございます。暑い中、全国からお集まりいただきましてまことにありがとうございます。昨日は、私も良く存じ上げている土屋先生、それから慶応の先生からいろいろな理論的なことをお聞きになったことと思いますので、今日はあまり肩の張らない話で恐縮なんですけれども、おもに実務的なこと、大学の公務員がそろばん勘定と昔いいましたが、今は電卓勘定してやらなければいけないようなせちがらい世の中になったというか、そういうことも含めて説明をさせていただきたいと思います。

それでこういう研修会のときは、話を聞いて帰ってしまうということが多いので、今回は、最後の方に、スターター・キットということで・・・クリップル・マップ・・・地図やあるいは少し大きなものを分割して表示させるようなサンプル・ファイルを作ってみました。ご希望の方にメール添付で、圧縮ファイルですと200キロバイトぐらいなので、どこの環境にもご迷惑をかけないと思いますので、そちらの方にお送りいたしますので、それをちょっと言葉は悪いのですが、パクッていただいて好きなように改変していただくと、私どもと同じようなデータをすぐに公開できますので、研修に行ってきた成果があがったと言われるのではないかと思います。

なかなか、資料は持って帰ることは出来るのですが、実際、役に立つ情報を持って帰るのは、ものがものだけに難しいので、今回初めての試なのですが、是非みなさんにお試しいただきたいと思います。

昨日の第1講義をされた土屋先生には、私どもの、東北大学附属図書館の外部評価の委員になっていただきまして、図書館の今後のあるべき姿というものを厳しく指導していただきまして、私どももヒアリングを先週ぐらいですか受けさせていただきました。批判をいただけるものはどんどんいただいてですね、これからも努力して行って、あと2年で国家公務員ではなくなりますけれども、大学人というかあるいは一般職員として残りわずかな年月を全うしたいものだと思っています。

今日の内容ですが、はじめにということから初めまして、まず、ちょっと大げさですけども、どうしても最近ですね、大学は何のためにあるのかということから説明しないと、図書館の存在意義が説明できない時代に入ってしまったので、多少話が大きくて申し訳ないのですが、そういうことを述べさせていただきます。

その次に東北大学の電子化の概要について説明をいたします。三番目、これは別に、みなさまにどうこうという話ではなくて、私どもが学内の図書館の方々とかあるいはつい最近私どもの仲間入りをされました若い職員にお願いというのか、こういうことなんですよという説明をするために日頃私が個人的に申し上げていることを述べさせていただきます。

四番目に、さきほど申し上げましたスターター・キットの概略を説明させていただきます。最後に、終わりということで、今後の私どものプロジェクトいろいろ持っておりますので、それをPRさせていただきます。また、それが出来た頃にはアクセスしていただいて、私どものアクセスロードを増やして、次の予算を獲得するときの材料を作りたいと思いますので、大変恐縮ですが片棒を担いでいただけたらありがたいと思っています。それでは、すすめさせていただきます。最後に、ここに見ていただきました画像等の、さきほど、なんぼで売れるかという話をいたしました。コンピュータ上で見られる高精細のソフトも出来ておりますので、それをCD-ROMと一緒に焼きこんで、商品として販売することも考えておりました。そのデモをさせていただきます。それからクリックابل・マップのスターターにつきましても実際に動かすところを見ていただいて、これぐらいなら私でも出来るという確信を持っていただいて帰っていただきまして、それでお試しいただければと思っております。それでは、1時間という長い時間になるかあるいは楽しい時間になるか講師次第であると思いますが、一生懸命やらさせていただきますので最後までよろしくお願いいいたします。

それでは、はじめてにということで説明を始めます。私どもは、貴重書の展示室というのが始まったのは、97年12月5日、これは、私は、直接はタッチしておりませんが、こういうときに始まったということがHPの履歴に載っております。これは、狩野文庫、狩野亨吉という方が集められた10万点あまりの資料のなかから主だったものを、10分類に分けてございますので、それから焼いたもの。それと、あと狩野文庫と同じように東北大学の著名な個人文庫目録としていただいております漱石文庫、これをHP上で簡単な説明とともに展示をいたしました。これが、ことはじめというか、貴重書展示室の第1段階ということになります。といっても、それぞれの撮影とかは個別に進めておりますので、全てというわけではないのですが、みなさまにお目にかけるようになったのは、これが始めてということになります。次に、この電子情報掛という掛ですが、これは99年の4月ですね、平成11年の4月にできたのですが3年で終わってしまいました。わたくしが最初の係長で、最後の係長ということで、わずか3年のとても短い掛ではなかったかと思っております。じつはその前に、これは洋書目録情報掛と和書目録情報掛というのがありまして、それを、ひとつを削って電子情報掛、それと和書・洋書を併せて図書情報掛というふうにしてあります。たまたま、わたくし和書情報掛の最後の係長になってしまいました。それもやはり1年でつぶしてしまいました。この分で行きますと、いまやっておりますこの情報シナジーセンターの学術情報支援掛というものも、法人化に伴ってもしかしたら模様替えされるかもしれないので、またつぶしてしまうと。行く先々で掛をつぶす掛長ということになっておりました。しっかりブラックリストに載ってしまったということです。

狩野文庫の方はカラーで 200 点・3500 画像、モノクロで 80 点・5700 画像、およそ 9200 画像を出しております。これは画像一こまに関しますので、実際にはそれ以上のものを隠し画像ということで用意しておりますので、この 9000 というレベルではないのですが、いちおう数としてはこういうことにしております。夏目漱石の資料につきましては、自筆資料ですね。手紙でありますとかそういったものを含めて約 700 点・3500 画像を出しております。

ここで、公開するときになになったのは、いま、ご遺族でイラストレーターとかで活躍されている方もいらっしゃいますし、夏目家様のほうに、大変几帳面な漱石先生でしたので、小遣帳などというのも書いておられます。何が書いてあるかという、誰それに何月何日に何を何百円貸したとか、本を貸したとかかえってこないとか、いろいろ入っており、貸した方だからいいのだろうかと思うのですが、明治の文豪にして、お札にもなる方がえらく細かったという話で、ちょっと恐縮かなあと思ってですね、遺族の方にあらためておことわりをするという形、著作権ではないんですけども人格権とかいう、遺族の方の問題ということもありましてですね、世界中に配信しておりますので、どこの誰が見るかもしれないということもございますので、そういった面では非常に難しい仕事だという側面も含まれております。

次の電子化資料を提供しているサーバーというのがございますけれども、これはわたくしども国立大学 100 近くございますが、そこがやっているものをリストにしたもので、琉球大学さんの HP にありますので、ここを見ていただくと、国立大学の電子化については、ひととおりブラウジングできますので、もし何か調査ものとか調べたいときがございましたら、この URL を使っていただければと思います。それから、デジタルアーカイブ、慶応の学生さんが卒論のときに私どもにアンケートをいただきまして、どれだけの大学がやっているかという調査をいたしました。五千何館に全部出したらしいのですが、デジタルアーカイブをやっているという図書館は 155 あったそうです。その 155 館のうちの大学図書館が 86 館、ですから 55%。図書館の比率でいいますと 3 割を切る大学図書館という数ですけども、デジタルアーカイブに関してはおよそ 56% がやっているということです。みなさんもお気づきだと思いますけれども、国立大学というのは横並び意識が非常に強いですね。図書館もそれに類して、どこかの大学でこれをやったら、なんでうちではできないんだという話が上司から降ってまいります。それをしのぎながら、自分のところの特徴を出すのが私どもの仕事ということになっております。公立大学さんは、4 館、どこの大学がちょっと調べる時間がなかったのですが、一生懸命やっておられるようです。あとは、私立大学、短期大学、大学共同利用機関というのはご承知のように国立情報学研究所とかそういうところとなっております。ひとつの参考です。かなり国立大学が占めているのですが、中身については、それぞれのポリシーがあると思いますので良い悪いではなくて、みなさん、参考にしていただくときは、良いところと悪いところをはっきり見分けていただければと思います。

それでは、次に大学の使命ということでポンチ絵を書きましたが、わたくしども、よくニュースやら新聞とかマスコミをとおして情報化社会と昔は言われていたのですが、お化けが取れたと言うようですが・・・お化けが取れたというふうに言うておりますけれども、「化け」という字が取れて情報社会になったというふうにいるのですが、確かに皆さんもお持ちですけれども、携帯電話をよく使っているから情報化時代かなという気はしますが、じゃ何が変わったのだというと、さほど変わっていないような気がいたします。

その問題点として、まず技術制度基盤といえますけれども、そういったもの、今ですとインターネット、それから何とか公正防止法とかそういったものがございまして・・・こういったものですね。技術情報制度基盤、技術的なもの、インターネットであるとかあるいは法整備ですね。不正アクセス防止法であるとか、あるいは最近ではITの法制度の学会が出てきたとか、そういったものが整ってまいりました。でも、本当の情報社会というのは、多分、私は知識情報社会だと思うんですね。これには何がもう一つこの間に必要かということ、やはりインフラとなるようなこの学術情報基盤、これを提供するのが大学ではないかなあというふうに思っております。やはり技術とか制度だけでは中身がないので、やはり、情報社会といわれていても携帯電話をみんなが持っているだけで終わってしまうのではないかというふうに思っております。

さて、これは最近、非常に公務員の問題点がありますので、私も大学ですから大学の職員であり、あるいは大学そのものについて社会的な責任があると思うのです。みなさんよくご存知で、もう経営学とかで大学で勉強されたりすると、もうこれは多分、全部ご承知だと思うんですが、物事の管理のときあるいは仕事を進めるうえでは、「計画する」、それを「実行する」、そしてそれを「評価する」。まあ、ここに目標と書いてありますけれども、目標があってそれを実現するために計画を練って実行して評価すると、このサイクルだと思うんですね。このサイクルだけでよかったんですけども、一部の人が私服を肥やしたり何をやっているか分からんという問題もございまして、そのためにこちらの方で三つのキーワード、「ディスクロージャー」これはもう昔からよく聞くんですね。最近では「アカンタビリティ」という問題ですね。説明結果責任というふうに日本語では訳しておりますけれども、会計学の用語ですけども、目標を、計画を立ててやった評価について確実に説明をしてください、それによって次、予算を付けますよとか付けないか決めますよとかですね、それから、計画に対しては透明性、一部の人が知っているとか、あるいは特定の権益を持った者だけにそれが明らかにされていてはいけませんと、国家機密のような特別な場合を除いては、その事業の計画そのものについてもやはり透明性を確保なさいます。それから実行面ですね。ここでやるときも、なんだかわけのわからないことをやるのではなくて、必ず折々に触れて情報を開示なさいます。

それぞれ、いまご説明をいたしました。じゃあ他のことは関係ないのかということはないのですけれども、私自身が一番このあたまが持っているのではないかというふうに個人的には思っているのですけれども、こういったことを常に意識しながら、どこまで意識するかは、それぞれみなさんご自身の判断で

すけれども、そういったことを意識しながら日々の仕事をやっていかなければならないというふうに思っております。

で、これが大学の使命、よくミッションズとかミッション声明とかいっていただきますけれども、その中身だと思うのですが、今の説明を踏まえてですね、知の世界とってちょっと気取ってみましたが、インフラとなる公共財ということですね、私ども、お国のお金をいただいてやっておりますので、この学術情報資源というのは、私どもが提供しているデータベースもそうでしょうし、それぞれの教官の方の研究の成果、あるいは教育の成果、そういったものを供給し続けること。ですから功成りて、あと十年は昔のノートで食っていけるというような時代ではなくて、常にこの三角をぐるぐる自分で評価しながら、それから、自分の大学あるいは自分の研究の目標、それはやはり個人の目的の実現ということもありますけれども、さらに、集合体としての大学は、こういった使命を帯びているのではないかということを感じながら仕事をしてゆきたいというふうに考えております。こういう前提のもとに、私どもは16年4月から法人化されますけれども、中期計画、中期目標という、まさにこの部分ですね、これを6年単位で作って、毎年の事業をそれに沿ってちゃんと実行したかどうかを報告しなさいと。それを第三者機関が評価して、成果を挙げていない大学については、もういらぬよと国民のみなさんが判断することになったそうでございます。

それでは、次、貴重資料電子化の概要ということでご説明いたします。まず経緯なんですけれども、やはり貴重資料ですので、レプリカですとこうやって折り畳んだ状態でも持って歩けるのですが、そうそう簡単にはいかない。それから、さきほど申しましたように世界に何点しかないとか、復刻、複製もの自体も東北大学にしかないというようなこともございますので、やはりそれをこういう展示室、空調の整った所で限定的に公開するのがいいのか、それともこういうのがありますよと、研究にもどんどん使っていただきたいというふうに利用面でもうすこしやっていかないと、さきほど言った図書館の存在価値も危うしということになります。ということで、貴重書展示室というのをインターネット上で公開しました。それから、久しく絶えておりました、10年ぐらいやってなかったそうなのですが、常設展というものを図書館のエントランスに設けまして、ちょうど、坪数で言いますと四畳半くらいですか、展示ケースが四本とそれから机の上におくものがあって、それからパソコンで簡単な画像を見れるようなもの作っておりますけれども、それを年に2、3回ぐらいテーマを決めて入れ替えるということをやっております。それから、企画展というものを大学祭に合わせてやっております、国宝が二点ございますけれども、そういったものを展示したり、テーマを決めてですね、ここ三年ほどは、江戸について、江戸初期、中期、で、後期を二期に分けてですね、今年は江戸末期ということで11月の初めの連休を挟んだ大学祭のときにやろうということをやっております。それから、東北大学のあり方に関する検討委員会というところから報告が出ております。これはさきほどの、大学の問題についての社会使命

ということについてのものから発展しているのですけれども、そのなかで、知識の公開普及ということをやってくれというふうに言っております。私どもとしては、地域住民への公開、生涯学習支援、一層の社会貢献といったようなことで電子化を進めたいというふうに考えております。

それから、三番目の図書館員の仕事の成果ということなんですけれども、今まで、私の諸先輩の方がたが、戦後を含めまして30年、40年と一生懸命仕事をされておりました、そのなかで目録を整理されたり、あるいはマイクロフィルムを作られたとかいろいろ努力をされております。ただその成果が、ごく一部の研究者とか、私どもも日頃、貴重書展示室なんて実際のそのバーチャルでない方ですね、アクチュアルな方、現実の方には入れてもらえませんが見る機会がございません。ですから、諸先輩の功績を、是非、形として出していきたいというふうに考えております。そういう意味で、財産というのは、人的な蓄積、あるいは資料的な「ぶつ」の蓄積を生かしていきたいということです。そういうことを含めまして、ちょっと大きくなりますけれども、教育研究にはやはり情報基盤、さきほど社会にたいして知識情報基盤を与えるのだという成果を、学術情報基盤をとという話をしましたけれども、やはり先生方の研究にとっても、そういった教育研究の情報基盤が必要であろうと。そのなかの一つのもとして、全文画像データを公開すると。展示会などでは、冊子体のものにつきましてはですね特定のページしか見ていただけないんですね。三日間、四日間展示していますと、ページを替えたりはするのですけれども、それでも全部は見られないと。ですから、このインターネットを見ていただければ全て見て、必要でしたら大学まで来ていただいて実物を見ると。じゃ、ないと、たまに怒られるのですけれども、この資料名だから、これだと思って来たら違ったと。それなら、なぜその前に電話を入れてくれなかったのですかと言うのですが、やはりその研究者の中にもそそっかしい方がおりました、九州あたりから飛行機に乗ってきたら違った資料だったということがございますので、そういった面でもデータベースは必要ではないかというふうに思っております。

私どものシステムの骨子といいますか特徴みたいなものなのですが、さきほど申し上げましたけど、いろんな理屈を付けておりますので、一般のご家庭から、今はADSLとか8メガバイト、相当早くなりましたけれども、その前のISDNとか、あるいは普通の電話回線でも必要的スピードで見られること。これは画像の場合は、非常にデータがでかくなりますので、それがいかに小さく出来るかということが問題ですけれども。それから、その反対にインフラが今度はADSLみたいなのができてきて、それじゃこんな画像じゃ見たくないよと言われないうちに、両方両立しないといけないということ。それから、いろんなことがありますので、特に図書館の人は検索が好きなのですが、一般の人は検索がそんなに好きではないというふうに私は思っておりますので、リストをクリックするだけで見られるような、あまり利用するのになんだかんだという作法が必要ないようなものにしたいということで作っております。

それから、資料の特性をとということなのですが、和装本、国語の教科書のように右開きですので、昔はサムネイルも横から置くから左に置いていたのですが、これを右に配置するようにするとかですね。それから、絵巻とか地図とか

は当然一枚のフィルムに収まらないわけですので、ひとコマですね。それを分割して見ました。で、今も多くの大学がやられておりますが、それを綺麗に接合して見ていただくということをやっているのですが、それは時間もかかるしお金もかかる。それから、撮り方によってはどんな人が頑張っても繋がらないという問題もありますので、パレット表示でサムネイルを並べて、見たいところはどうせ大きくして、見るときは一緒なのだからという考え方です。

それから、絵図でご承知のように、江戸時代の地図というのはほとんど実用目的で作っておりますので、壁に掛けて見るという、そちらにある「坤与万国全図」というようなものは非常にまれでございます。ですから、四方形のそれぞれの辺から中央に向かって地が並んでおりますので、場所によっては字の書き方が逆さになっていたり、90度横になっていたりします。そういうところを回転させて見せようという手段をしたのですが、よくやるのがサーバーでプログラムを組んで回転させてあげる。ですから画像は、一枚を90度単位で曲げるというやりかたを普通やるんですけども、私どものシステムでは、その90度の隠し画像を3部用意しております、それをただサーバーからみなさまのクライアントのパソコンに送っているだけです。ですから、時間としては画像を送るだけの時間ですみますので、みなさんのパソコンのスペックが早いとか遅いとか、いろんな検索が一度に来てサーバーに時間がかかってプログラムが動かないとか、そういうことはございません。ですから、水鳥が水面をまことにたおやかに、スイスイといているのだけど、中では足がバタバタしているんだという状況を、このデータベースでは作り出して、なるべくみなさんには負担をかけないよう工夫をしております。それが、サーバー、クライアントには負担をかけないということですね。それから、もう一つ大事なものがございまして、何かモニュメントのようなデータベースを作る場合はいいのですが、継続的にやっていくためには、やはり大量生産になじまないといけない。誰か特殊な技能を持った人だけにしか出来ないというのでは困るので、やはり外注でも、アルバイトを雇うにしても、あるいは職員がやるにしても、大量生産ということはある程度標準化されて規格化されていて、それに沿ってやれば業者さんでも自前でも出来るというような方式を取らないと、いろんなものを作っていくのは難しいかなあと思います。

最後は、ちょっとおこまがしいのですが、よく研修とかあるいは施設見学とかに行き、ものを見たり、できたらパンフレットをもらってくることはあるのですが、考え方を聞いてくることはあまりないですね。出来上がったものというのは、確かにその大学にとっては必要なものなのですが、じゃあ、見に来た人たちが出来上がったものを持って帰って同じようなものを作っているかという、そうではなくて、そういったものを作るにいたった動機づけとか、いろんな選択肢があってその中からあえてこのやり方を選んだとか、そういった情報ではないかと思うのですが、そういったことを公開することによって、なにかのお役にたてればいいかなということで、このシステムの考え方ということをやっております。で、私ども、若い係員がいろんな勉強でよその大学にお邪魔させていただくときに、ぜひ、考え方を勉強してきてください、目に見えるものとか、出来上がった建物ではなくて、設計思想であるとかポリ

シーを聞いて充分理解して、次の仕事に活かしてくださいね、というふうにお願ひしております。

画像の特徴は、いまのポリシーで作っておりますので、いちおう、フリップで簡単に出来ますよということですね。たとえば、関が原合戦備え図というのは、こういう URL がございますので、入っていただいて見ていただければと思います。もし、あとで時間があればインターネットで見ていただければと思います。それから、画像の合成というのもやってみました。実は、撮影をするときにマイクロ写真を撮ろうとして始めたプロジェクトだったらしいのですけれども、色のいいのがあるからカラーでやろうということで、途中で始めちゃった。連れてきたカメラマンがスタジオカメラマンで、こういうことに全然知識がない方が撮って行って、35 ミリのフレームから外れるところを重複するように撮って行ってくださいねというやり方をしたのだそうです。ですから、非常に残酷なことになっておまして、和歌の小野小町やなんか、体の半分でぶつと切れているとかそういうことがありました。そういったものも、元に戻してやらなければならない。それから、なかなか難しいのですが、散らし書き、これは短歌を適当に切ってばらばらと書いている。脈絡もなく散らして書くのが、なんか風流人というか知識人のやり方だったそうですが、それから変体仮名は使っている、崩しは使っているで、とても読めたものではない。それを、散らし書きの状態、画像で作ると。その下に、正しく読む方法ですね、頭から上の句、下の句、というふうにいっように並び替えるというのをやってみました。これは、神仙三十六歌仙というのが、みなさんよくご覧になりやすいと。三十六歌仙の三十六歌も実は対になっていて、一番目と十七番目を照らし合わせて読むのが教養人のその時代の使い方だったようですので、そういう仕組みを作っております。並べ方と画像の合成と報告をいたしましたということでサンプルにさせていただければと思います。

それから、クリッカブル・マップ。これはさきほど見ていただいたような地図で、とてもじゃないですけども、このような画面には出てきませんので、そういったことでやっております。「坤与万国全図」、今日はレプリカをお持ちしましたけれども。「京大繪圖」これは非常に虫食いが大変です。ご承知のように、西日本に行きますと特に被差別部落の問題がありまして、地名を読むとそういうものだということがございまして、それを「消す」とか「消さない」とかという問題もございまして、これはホームページのトップに、そういったものも含めて現実問題としてあったままに出しています。特別ですね、男性の性器が出ているようなものは、なにせインターネットの海に入りますと、いろんな人が見えていますから、誤用というか悪用されても困るので、そういったものは特定の端末しか見られないようになっておりますが、それ以外の歴史的な事実はいいことも悪いことも含めてお出ししますという宣言をいたして出しております。そういったこともご参照いただければと思います。これは非常に重たくて、なかなか一般の環境から見るのには大変なんじゃないかということなので、今後もっと軽いやつを作るかもしれません。ということで、二番目までの説明をいたしました。

最初、文字の説明だけで大変恐縮なんですけれども、次にこんどは若手の職員に言わなくてもいいですね、じいさん根性まるだしで言っているのですけれども。普段から言っているわけではなくて、なにか、初心者研修のようなときをお願いしているのですけれども。まず、画像化だけの知識ではなくてほかのことは考えていませんから・・・図書館の、よく、お給料の問題なんかで、ですね、図書館員の専門性は何ですかと言われることがあります。じつはこれも、一番、最初に考えたのは、人事院からそういう聞き取り調査がありました。東京の人事院の本省から調査官が来て、図書館員に特別な処遇をしてくれとかという要望があがってくるんだけど、「図書館って本当に専門性があるの」という、これは永遠の課題でございます。

ここで、じゃということで、日頃思っていたことをやってみましたけれども、ビブリオ・グラフィー、ここについてはもうみなさん図書館のプロでしょうから、当然、持っておられます。コンピューターもですね、情報リテラシーと言いますので、ほとんどご存知ではないかなあという気はしますけれども。あと残っているのは、マネージメントですね。自分でやる場合は、なんでも好きなようにやるときゃいいので、そんなこと気にしなくてもいいのですが、やはり、これをまとめていく力というのが必要ではないかというふうに思っております。その周辺部には、これも言わなくてもいいのですが、生産性を考えなくてはいけない、独創性、ユニークさが必要だ。人まねはするなということですかね。それから、堅実性についてもある程度配慮しなければいけないだろうというようなことを考えております。あまり、言葉で言ってもメモを取るのも大変でしょうから、次のページにいまのそのキーワードとなるようなことを書きなぐっておきましたけれども、マネージメントについては経営的センス、経済的合理性、先見性とかですね、そういったものが必要で、まあ、これだけではないと思うのですが、コンピューターに関しては単にワードが出来るとかエクセルが出来るではなくて、サーバーについては、そんなに深い知識はいらないのですが、どういう構成になるのだろうかとか、あるいは、セキュリティの問題とか、エチケットの問題とも知っていただきたいと思います。画像についても、今はJPGが主流でしたけれども、フラッシュ・ピクスであるとか、あとでご紹介するギガ・ビューとかいろんなものが出てきています。それ以外にも、PDFの知識、ピグというのは・・・GIFというのは、著作権を持っている会社に変なことをしたのでみんな使わなくなってきてですね・・・ポータブル・ネットワーク・グラフィックスとかいうので、わたくし好きで最近使っておりますけれども、非常に軽くて色の再現性も良いので、こういう画像をやる時は便利かもしれません。ビブリオ・グラフィーの方、これ、目録とかいうのは、当然のことながら古典籍に関する知識とか、あとはこういうアーカイブの取り扱い、それから、出版というのもいろんな時代がございますので、それを含めたうえでその資料をみていかないといけない。それから、禁書とか焚書とかいろんな迫害を受けていった時代もございますので、それが、必ずしも庶民の手にポンと渡っていた時代だけではないということをご理解のうえに仕事をすすめていかなければならないということで、場合によっては、その「かく筆」というよ

うなものです、木を削って尖らしたもので読みを付けていたり、あるいは、普通の字を書いてあるんだけど、わざわざそこに補記していたりとかですね、そういったものも見逃さないということも必要になるのではないかなと思います。

つぎには、今度、芸術性とか独創性とか生産性のことなのですが、これもやはり難しいのですが、どうやって再現したらいいのか、それから、システムの表現の美しさ、画像自体に適切さ・・・あまりいろんなものを作るとインターネットであがってきて、今度は、アクロバット・リーダーがあがってきました、フラッシュ・ピックスのリーダーがあがってきました、何とかというプラグインを落としてくださいとか、わけのわからない人がいろんな複合的なデータを要求するデータベースもありますけれども、少なくとも基礎的な技術、誰でもわかる、ワープロでも作れるような HTML とかを作ってくださいね、創意工夫を凝らして見せ方のほうでがんばりましょう。そうは言ってもやはり問題はありますから、新しい画像表示とか、そういったものについても勉強して、それはそれとして入れていきましょうということです。独創性というのは、これが一番、国立大学では苦手な問題なのですが、どうしても横並び意識が強いもので・・・わたしの言い方をすると、ユニークさという点では図書館の中でも非常に際立っておりまして、こんなことを言う図書館員にはおりませんが、でも最近言っても理解してくれる若い人たちが増えたので、あながち方向的に違わないような気はしているのですが、そんな感じですね。

それから、学際的思考。必ずしも、私ども、特にユニバーシティの場合は、理科系から人文系までいろんな方を扱うので、その先生がおっしゃっていることは十分確かなのですが、それに何か加えると、実は理工系の先生の画像を作ったのだけれども人文系でも使えるのではないだろうか。その逆もあるのではないかという思考も必要であると。それから、利用者の方に提示してもあまり反響がないものとか、オンデマンドですね、要求のないものを作ってもしょうがない。しょうがないってことは無いのですが、それは資料として持っていればいい話なので、要求が出たときに、その要求に沿ったものを作っていくということ。それから、アーカイブ。電子的な資料ですが、アーカイブという考え方で蓄積していくのだ、体系化していくのだという考え方が必要なのだと思います。で、横並び的思考の排除とか、ユーザーの視点に立った、というのは、国立大学の場合は、国民のみなさんの視点に立ったシステムなり考え方をやっていかなければいけないと考えております。

最後に生産性なのですが、特に、地元の A 業者と今までやってきたからとかですね、丸善、紀伊国屋と長いこと付き合っているからとか、そういう話ではなくて、どんどん新しい業者と新しい知識あるいは新しい力を持っている人たちとやっていかなければいけない。それから、お金が無いといって何もできないのではギリ貧ですので、やはり外部資金ですね。これは研究費でもありますし、あるいは何かを商品化しましょうということで、そういった業者を入れるとか、あるいは私ども東北大学だけではなくて、たとえば漱石文庫のデータを作るときは、仙台市文学館と一緒にやりましたし、そういったような形で博物館、美術館、県立の図書館、公共図書館、そういったものともやらなければい

けないと。同時にそれには、折衝力ですね。場合によっては、ネゴシエーションという人もいますけれども、それだとちょっと過激になるので、そういったコミュニケーションをとってみなさんとものごとを進めていくというような知識とかあるいは能力も必要じゃないかなと。そういうものがないと、いくら象牙の塔とかいっていても始まらない。それから、もう一つ大事なのが大量生産。やはり、それぞれの先生は、その分野についてやると喜んでくれますけれど、それだけでは他の方々にやはり片手落ちなので、どんどん標準化してどんどんやっていかなければならないというようなことを考えております。図書館員の資質能力をこれから高めていくには、特に定員削減、人は減らされていますので、人材の確保、それから、それぞれのみなさんの効果的な研修ですね。これはひとえに組織のポリシーに関わっておりますので、館長先生であるとかあるいは場合によっては担当の副総長とか副学長とか、そこまでも私どもで話をさせていただいて、説得するというんですか、納得はしていただかないので、とりあえず説得してその気にさせるというんでしょうか、まあそういったことも含めてですね、組織のポリシーっていうものを作って一丸となってやっていかなければならないと。ちょっとよけいなことなのですけれども、いろんな得手不得手がありますから、これが小さかったり大きかったりいろいろすると思うのですが、ちょうど今、重複しているところですね、ここを持っておられる方を、能力、資格、適性といったものを総合評価の雛形にするとですね、そういった人事評価制度があるのだそうですけれども、業績優秀者というのがなんだという、また話が大きくなるのでいたしませんか、そういった方々に保有している能力がコンピテンシー、コンピテンシーの高さというのがこれから求められていくのではないかというふうに思っています。

さて、なんか堅い話ばかりしてきましたので、ここからは簡単に見ていただければいいと思います。狩野文庫が、動データベースの絵図じゃないほうのデータの並び方です。で、今回は地図をサンプルにしていますけれど、四分劃したネガでもスライドでもあったとしますね。それを、サムネイルという小さな画像にさせていただきまして並べていただきます。で、その並べたところをブルーの線が出ておりますので、リンクを張ってありますから、それを押していただくところというのが出てくると。この状態で左上のボタンを押していただくと、たとえば2を押せば2の方が出てくると、それだけの簡単な話です。これは、ワープロでも何でもそのHTML文を直して、書誌を変えてサイズとかを適当にいじくっていただければ、十分簡単に出来ますので、やっていただければと思います。直す部分は解凍をつけておきましたので、ここを、ご自身の画像、全部やると調子が狂うかもしれないので、一個だけどこかに入れてもらって。画像というのは都合が良くてですね、サイズが違っていても大きくなったり小さくなったり勝手にしますので、特にこのスターター・キットでは。基礎編のほうでは、ファイルサイズを特に決めていませんので、もし四つの地図を、サイズを違うものを並べると変な形になりますけれども、そういうことになりませんから、このアンダーラインの付いているところ、ホルダーの下にファイルが

こういうふうに入っておりますので、それを直していただいて表示していただければ、さきほどのみなさんの持っている画像で作ることが出来ると。画像は、最初はデジカメでとった猫の写真でも犬の写真でも何でもいいんですけど。それを、ソフトウェアもフリーウェアでこういうことが出来るのがあります。ジャー・トリムという、JTRIME というものがありますけれども、それはインターネットで、ベクターとか窓の杜とかというところで、画像ソフトという部でフリーウェア。ただのものというふうになりますと、あまりないんですね。こいつと、もう 1 本ぐらいしかありませんから、イーファン・ビューというのがオーストラリアかなんかの学生さんが作ったものでありますけれども、その二つぐらいが使い物になるという形で、やっていただければと思います。

じつは自信が無かったのでいきなり上級編にいきましたけど、あとのスクリプトを見ていただくときにこの中級編というのがあります。そちらのほうは多分とっつきやすいと思いますのでやってみてください。これは四分割をさらに四分割します。今この画像ですね。で、左のフレームのほうにサムネイルがあります。ここをクリックします。そうするとこういう画像が出てきます。北に、ひとがたボタンというのが付いていますけれども、これを丁度 90 度回転と逆立ちしているところを押したとします。押したとしますと、こういうことになってひっくり返せると。これは、次のページですけれども、ファイル構成がこういうふうになっておりまして、ちょっと画像を作るのが大変なんですけれども、作って県立大さんにデータを送った後で、やはり、いきなりでは戸惑われるかなあということで、その間のものを作ってまいりましたので、お送りいたしますのはその間のものになります。第一画像、第二画像で、左側がメニューというものです。右側がマップ。ページを表示するものは、一つのもので大画像も中画像も出来るということになっておりますので、画像を用意すればさえこれで使えると思います。拡大画像のほうは、ちょうど四つの四つですから、ファイルがこういうふうになりますね。で、説明はですね、私どもの図書館報に「木這子」というものがございまして、四半期に一度出しておりますが、今日、こちらで発表した内容を帰ったら書けと、昨日、突然言われたので、そちらの方に書きますので、もし、どうしてもわからなかったら、そちらの方にも、もう少し詳しいこの使い方を書こうかなあというふうに思っておりますが、基本的にはこの A,B,C,D の十六個の画像ファイルを作って、あとはソフトでグルッと回してですね、90 度作ったものには最後のところに R, 180 度のところには I、つぎのところは L と付けていただければ良いと。説明を聞いていてもしょうがないので、ソフトを取り寄せて使ってみてください。

デモに入る前に、これからの予定といいますが、私どもでいまやっているプロジェクトのご紹介、PR でございますが、まず、狩野文庫が動データベースにはですね、今回、画像化できなかった・・・今回のっているのは「せんしふせんず」といって、もっぱら戦争関係のものが多いのですが、それ以外に、日本全図、琉球の沖縄図とか樺太図、そういったものを含めて、約 900 点、7600 画像がございまして。これを二期に分けて、地図を公開していこうと。第一期の今年、江戸以北、北陸道、奥州路、北海道、それ以外にも軍用地図もありますのでそれもやります。東北大学は、競争的研究資金ということで、科学研究費

とかをいただいたときに、1%程度をいただいて、大学全体の目的に沿ったものに再配分しようというものをやっております、大学研究基盤経費というふうに呼んでおりますけれども、そこの中の一人の先生がそこに応募されて取られたものなのですが、どうも夏目漱石のお宅のほうにはまだ処分していない結構な資料があったそうなので、それを集めてまたデータベース化して見ていただくというお話でございます。これはちょっと若干時間がかかるのですが、さきほど申しましたように、アカンタビリティの問題があるので来年の3月までには絶対やるということですので、またお楽しみにしていただければと思います。それから、それ以外に、秋田家文書というのがございまして、これは経済学研究科の先生がおやりになるのですが、これもやはり画像化していこうと。もしかしたら、みなさんの大学にも寄贈されているかもしれませんが、冊子体の目録は今年の春にお配りしております。それを、もうデータベース化しておりますので、その画像をしっかりと作っていこうという話です。それから、マルクス自身が自分の著書に書き込んだという資料がございまして、直筆資料というふうに呼んでおりますけれども、これもやはり幸いにして50年、70年過ぎておりますので、著作権の問題がクリアできますので、その本を、撮影なりスキャナーをかけてマルクスの自筆資料を見ていただくというプロジェクトです。それから、解体新書というのは、これは医学分館長先生がご退官なさるときに、ご奇特にも寄付をいただいたお金を原資にして、医学分館のほうで解体新書というものがございまして、これは普通の刷り物ではございますが、その貴重書がございまして、いまやっております。リンク先は、たぶん医学分館のHPだというふうに思っております。それから、これは某国立大学で一番有名どころということ、もうわかってしまうと思うのですが、そこの方が科学研究費を取られてやっているところで、蝦夷図というのが、いまインターネットで見せているものが一番見ておもしろいのですけれども、それ以外に年代ごとによって何枚も出されております。で、それを見ていただくと、街割りがこういうふうに広がったとか、あるいは大火、火災がよくございましたので、そのあとにこういうふうに変った。で、よくいま見いただいている地図で見ると、火防せ地・・・というので、ちょっとスペースをとったところがありますね。こういったのが、初期のところにはなくて、そういう違いもある。それから、ご承知のように、江戸時代ですと、牛の道、馬の道、船の道というふうに街道筋が規制されておりました。そういったものも、その都市計画とかあるいは都市交通を利用される方には非常に・・・今回は、承継文化で、ややこしい話なのですが、中身はいろいろあるようでして、基本的に蝦夷図のプロジェクトは中世の都市研究だということを聞いております。で、あとは、その収益事業ということで、あまり商売の話をするのはなんなのですが、あとで見ていただくソフトに入っている画像と一緒に売り出そうとか。それから、研究者には、DVD1枚で1枚の地図しか入らないほど高精度なデータを持っておりますので、そういったものを買っていただくかと。それから、どうしても紙でないといやだという方もいらっしゃると思いますので、紙で体系化されたシリーズで冊子体で出していこうという話もあります。それから、そこにございようなレプリカを作って、なおかつ、それを縮小などをしたものを美術品として売れ

るかどうかわかりませんが、作ってみようかなというものもごさいます。地図のタペストリーが売れるかどうか、やってみたいとは思いますが失敗が怖いので、私の担当の時にはしませんでしたが。それから、図書館もいろいろ見学とかいるんな高校とか、あとは学会とかで来ていただくので、土産の一つもあつたらよからうなあと。その土産の一つので、次の画像化する経費が少しでも浮いたらよからうかなあと、これは採らぬタヌキの何とかですけれども、そうだったことも考えております。まあ、その他いろいろあると思います。

さきほど、ちょっとご説明をいたしましたけれども、デジタル修復ですね。こういったことを商売にしようと思うと、あまりいいかげんなものは渡せませんので、ちゃんとしたものをお渡ししないといけないですよ。左側のほう、ちょっと見にくいのですが、下のところの方が、虫食いで穴が開いております。それをデジタル修復したものが右の方です。今日は出力したものはお持ちしませんでしたが、下の図のほうは、東北大学蔵書印という印を裏から押しているのですが、朱肉の怖さで表まで出てきていますね。これをすべて綺麗にしたものが右手でございます。さきほどの地図2枚、おおざっぱに言って畳み4枚はないかもしれなのですが、それぐらいをやるのに、さきほど説明したものと土が付いてそのまま裏が黒くなったというところ、付箋紙を外す、それぐらいの作業で、この分量で専門化がやって、だいたい請求するときは150万だというふうに聞きましたので、今回は外部資金の導入ということでただでやらしていただきましたけれども、そんなこともあります。

それから、私が仙台プロジェクトと勝手につけてですね、つぎの担当の係長さんが美術館、博物館、県立図書館なんかを回ってきてもらいましたけれど、なんかの機会に、ヨーロッパとかあるいは日本が世界をどういうふうに見ていたかというような機会の展示のときに、ぜひ、この三箇所に分かれている資料を一堂に会して、ということは大学図書館はあぶないですので、空調設備の整った博物館になるのではないかと思います。

「坤与万国全図」というのは、いま、原本は3本しかありません。1本が宮城県立図書館にございます。あとの2本がバチカンのところにあると。もしかしたら、京都大学にも所蔵されているかもしれませぬ。これは白黒の1600年に作られた、当時のものでございます。ちょうど屏風のようになっておりますね。下のほうは、宮城県図書館の方に、多分、藩校がございました、伊達藩の。そちらのほうからいった資料だと思っております。これは、こんよ系とかいわれまして、地図を北にして、日本を中心にといった地図の総称らしいんですけども非常にそのなかでもオリジナルに近いということです。……仙台市はお金があるんですね。博物館さんが、2千万くらい出してこれをアメリカのコレクターから買ったんだそうです。これが、仙台藩の藩校とやはり深い縁があるということで買われまして、上のほうが「坤与万国全図」です。私もショーケースに納められたところを見に行ってきましたけれども、金箔でですね、このブルーの青さが非常に際立っていて、この三つの中では一番高く見えます。一番高く見えるんですが、情報量は一番少ないようなのですが、まあ、そういったものが三点ある。この三点あるのは、後のこっちの二つは、バチカンにもないわけですから、世界中どこに行ってもないので、ぜひこれをやりたいなあとというふ

うことを考えております。これもちょっとユニークというか、馬鹿というかそういう話ですね。

さて、時間も押し迫ってまいりましたので、最後にクリッカブル・マップのスターター・キット等を説明させていただきます。これですね、データベース、さきほど言いましたように 200 キロバイトぐらいのところにメニューというこのファイルが入っておりますので、これをダブル・クリックしていただきますとこれが開きます。基礎編、テキストには上級編しか載っていませんでしたけれども、昨日、がんばって作ってまいりましたので、中級編というのもございます。まず、基礎編からですが・・・こうやりますとサムネイルが出てきますので、これをたたいていただければ出ると。あと、こちらとこちらをたたければ見られると。これは、誰でも出来るのではないかなあと考えております。中級編、これはフレームを切ってそれらしくなっております。これは、場所をよくご理解いただくために、わざわざこんな画像にしておりますけれども、こういう形になりまして、たたくと場所を出ると。今回は、ちょっと小さくしておりますけれども、これは、何ぼ、でかくしていただいてもかまいませんし、重くしていただいてもかまいません。ただ、見ていただけるかどうかという問題があるので、是非そのへんは調整をとっていただいたらいいと思います。最後の上級編、これもスクリプトをまじめに解析すると大変ですので、後で入れ替えて使っていただければいいと思うのですが、四つをやっております。で、ここをたたきますと、次のさっきの四分の一がでてきまして、一番わかりやすいのでここでいきますけれども、クリックするとこちらはこうやって動いていきますね。それで、あとはボタンでくりくりとやっていただきますと、意味のある場合はいいと。これもいま、「に-い-に」に簡単しておきましたけれども、これを「に-い-さん」にさせていただいても「さん-さん」にさせていただいても「よん-よん」にさせていただいても、それは自由でございます。ぜひ、やっていただければと思います。私どもの、いまの江戸図の場合は、中級編と上級編を組み合わせたような形でだしておりますので、万が一、使っていただいて、「ええばい」ということで出していただければ、ご一報いただければ相互リンクでも張らしていただければいいかなとも考えております。これは、このぐらいにさせていただけます。つぎに、こちらの狩野文庫のデータベースでございます。こちらの方には検索システムもございますし、これがさきほど見ていただいた・・・こちらを江戸にさせていただくと、出てくるということでございますので、あとで、「坤与万国全図」、どこが汚れている、どこに穴があいているかということをしっかり見ていただければ良いと思います。

最後に高精細の画像を紹介したいと思います。ご覧のとおりこのような CD-ROM になっております。ご承知のとおり、地図というのは、別にその方々だけではないので、いろんな分野でいろんなように使えるので、割と地図が多いというのが、そういった汎用性という面があるということと、拡大が出来るということが非常にいいのではないかと思います。

今回は、これですね、使い方にご丁寧に、CPU のサイズとかなんとか書いてありますが、それは勘弁していただいて。印刷もできますし、これも回転が出来んですが、この回転機能は非常に面白い回転機能で、少しでも触ると、

また動いてしまうというところでもない代物なので、ちょっと使い物にはならないかなあとは思っておりますけれども。いま、操作しているのですが、いまのパソコンのCPUは1ギガくらいなので、普通はかなり早く出てくると思うのですが、この端末は300ないそうなので、これだけかかっていますが、いちおうスペックに書いてあるとおりに使っていただきますと、もっと早くできます。

さきほども、若干、早く来た方にはご説明いたしましたけれども、これは地図なんです、いきなりこういう状態になっておりまして、紀伊半島は四国と一緒にしております。太古の時代は、これが正しかったのかもしれませんが。あとはいろんな書誌的な事項も入っております、こういった形でできます。これが、じつは常陸の国ぐらいまでしか東北地方にはなくて、あとはどこかにいっちゃいました。一番うえのところに、北海道はあるのですが、北海道ではなく、北陸道、佐渡になっておりますので、なくなっちゃったと。大陸はちゃんとあるんですね。だから、ようするに形はこんなものだというのが、商業者とか航海者から出ておりまして、そのなかであてはめていったらこうなっちゃったと。これをもし、まあ仙台藩から出たものじゃないのですが、見たときの心境やいかんということになります。

ちょっと説明が長くなって申し訳なかったのですが、二日間の講習、大変ごくろうさまでした。最後に、どれほどお役にたつかわかりませんが、ぜひ、他山の石ということでご参考にしていただければと思います。



平成14年度 公立大学協会図書館協議会研修会 第3編
(2002.8.2 岩手県立大学)

貴重資料の電子化について

東北大学情報シナジーセンター(図書館分室)

学術情報支援掛 日出 弘

<http://www.library.tohoku.ac.jp/>

contents

はじめに

1. 大学の使命
2. 貴重資料電子化の概要
3. 図書館員の資質・能力
4. クリックブルマップ・スタータキット

おわりに

デモ

はじめに

貴重書展示室(東北大学附属図書館所蔵)をHPに開設
1997/12/5

電子情報掛(情報管理課) 1999/4/1

情報企画掛(総務課) 2002/4/1

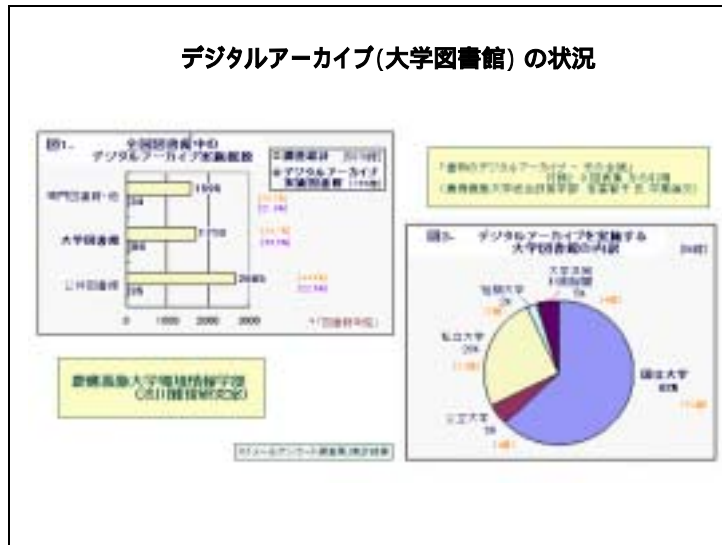
- ・「狩野文庫画像データベース」(カラー約200点、3,500画像)を公開 2000/2/24
モノクロ約80点、5,700画像を追加 2001/6/16
- ・「夏目漱石」自筆資料画像データベース」(約700点、3,500画像)を公開
2000/4/17

電子化資料を提供しているサーバー

<http://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/erwg/denshika.html>

デジタルアーカイブ(大学図書館)の状況

デジタルアーカイブ(大学図書館)の状況



1. 大学の使命



社会的責任



使 命 : 「知」の世界のインフラとなる公共材としての
(mission) 学術情報資源を供給し続けること



2. 貴重資料電子化の概要

(1) 経緯

貴重資料の保存と利用

・貴重書展示室(1997年12月) ・常設展(1998年8月～), 企画展(1998年11月～:年1回)

地域住民への公開、生涯学習支援、一層の社会貢献

・知的資産や知識の公開普及 「東北大学のあり方に関する検討委員会報告」 H.11.2.16

図書館員の仕事の成果、貴重な資産(財産)を活かす

東北大学教育研究情報基盤データベースの一つとして 全文(書誌)・画像データベースを公開

・狩野文庫画像データベース

(2000年2月:c 200点 3500画像, 2001年6月:m 80点 5700画像)

・“夏目漱石”自筆資料画像データベース

(2000年4月:c 700点 3500画像)

(2) 画像システム (骨子)

一般家庭から**実用的スピード**で十分アクセス可能であること
インフラの整備、技術的進歩により、**システムがすぐに陳腐化**
しないこと

クリックするだけの基本的操作で、画像DBを利用できること
資料の特性を画像表示(見せ方)に反映させること

・和装(線装)本：サムネールの配置

・絵巻,地図(分割撮影)：パレット表示、隠し画像(回転)

・自筆資料：頁付けの自動化

サーバ、クライアント(利用者側パソコン)にできるだけ負担を
かけないこと

大量生産に馴染む方式を採用すること[画像処理においては重要]

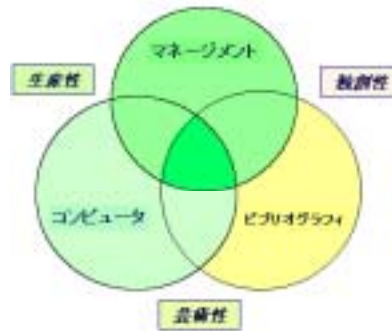
システムの“考え方”が、他の大学図書館等で参考になるもの
を目指すこと

(3) 画像の特徴

絵巻や合戦図、医学資料などの見たい場面が、クリック操作で簡単に見られる

- ・「**關原合戦備之圖** (せきがはらかっせんそなえのず)」
<http://www.library.tohoku.ac.jp/kano/10-001274/10-0012741007.html#gazou>
画像合成、和歌の翻刻(試行版)
- ・「**新撰三十六歌仙** (しんせんさんじゅうろっかせん)」
<http://www.library.tohoku.ac.jp/kano/05-00095607/05-00095607.html>
クリックابلマップによる拡大表示 「**絵図**」
- ・「**坤輿萬國全圖** (こんよばんこくぜんず)」
http://www.library.tohoku.ac.jp/kano/ezu/kon/kon_frm_32.html
- ・「**京大繪圖** (きょうおおえず)」
http://www.library.tohoku.ac.jp/kano/ezu/kyo/kyo_frm_21.html
PDFの特徴
- ・**原稿「吾輩は猫である」序文**
<http://gassan.library.tohoku.ac.jp:8000/sosekijihitu.html#genko>

3. 図書館員の資質・能力



マネージメント [management]

管理 経営 経営的センス, 経済的合理性, 先見性, ...

コンピュータ [computer]

電子計算機 情報リテラシー (サーバ, パソコン, インターネット, ブラウザ, セキュリティ, ネットワーク), 画像 (JPEG, GIF, PNG, PDF, HTML), ...

ビブリオグラフィ [bibliography]

書誌学 古典籍に関する知識, 史料の取扱, 出版史, 禁書・焚書, 目録, ...



芸術性 [artistry]

史料の再現性, システムとしての表現の美しさ, 画像表現の適切さ, 基礎的技術にたった創意・工夫(見せ方), 新しい画像表示技術の導入, ...

独創性 [originality]

ユニークな見方・考え方, 学際的思考, オン・デマンド, アーカイブ, 横並び的思考の排除, 利用者の視点に立ったシステム構築・管理・運営, ...

生産性 [productivity]

グローバルな視点・視野, 企画力(外部資金の導入, 他機関との連携), 折衝力, 標準化, 大量生産, ...

図書館員の資質・能力 : 人材の確保, 効果的な研修, ... etc.
- 組織のポリシー [policy] -

コンピテンシー [competency] (能力・資格・適性の意)

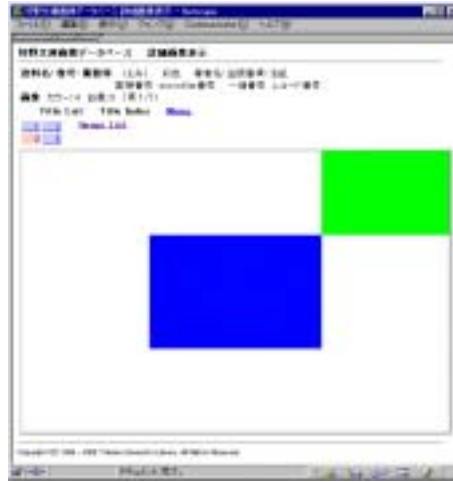
人事評価制度において, 業績優秀者が保有している能力のこと
業績優秀者の行動パターンからその特性を抽出し, 人事評価の具体的基準とする



4. クリックブルマップ・スタータキット[starters kit]
基礎編 (1)



基礎編 (2)



基礎編 (3)



基礎編 (4)

ホールド名	ファイル名	画像ファイル
10-001217	10-001217.html	10-001217a001.jpg (サムネール) 10-001217a002.jpg (サムネール) 10-001217a003.jpg (サムネール) 10-001217a004.jpg (サムネール)
#	10-001217a001.html	10-001217a001.jpg
	10-001217a002.html	10-001217a002.jpg
	10-001217a003.html	10-001217a003.jpg
	10-001217a004.html	10-001217a004.jpg

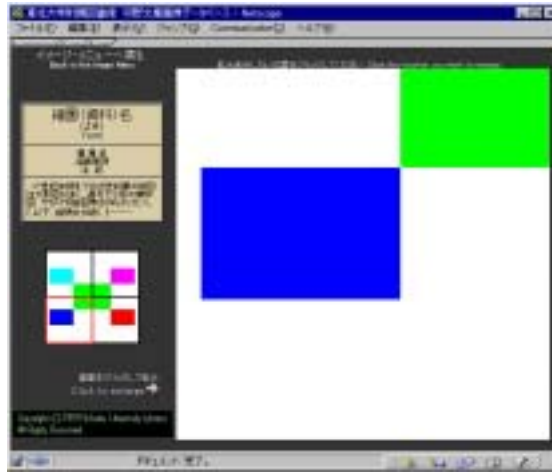
```

* <IMG SRC="10-001217a001.jpg"></img></TD>
<IMG SRC="10-001217a002.jpg"></img></TD>
<IMG SRC="10-001217a003.jpg"></img></TD>
<IMG SRC="10-001217a004.jpg"></img></TD>

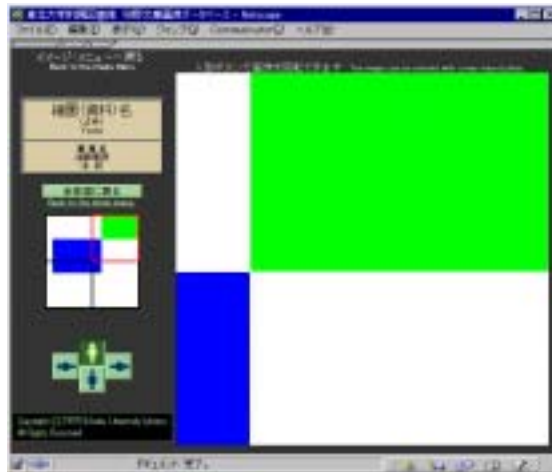
* <TD bgcolor="#ffcccc"> 1</TD>
<TD bgcolor="#ffcccc">&A HREF="10-001217a002.html#area"> 2</a></TD>
<TD bgcolor="#ffcccc">&A HREF="10-001217a003.html#area"> 3</a></TD>
<TD bgcolor="#ffcccc">&A HREF="10-001217a004.html#area"> 4</a></TD>
-----
<IMG SRC="10-001217a001.jpg" alt="画像 : 10-001217a001.jpg" border="0">

```

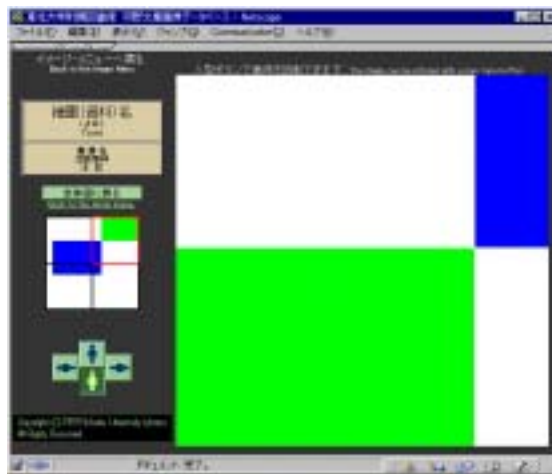
上級編 (1)



上級編 (2)



上級編 (3)



収益事業の研究 (高精細画像による出版事業等)

デジタル出版

高精細画像 (加工データ)、オリジナル画像 (CD-ROM、DVD-ROM)、... etc.

復刻版 (体系化された資料のシリーズ)

古地図デジタル復刻版シリーズ (日本全図、江戸、京都、大阪、... etc.)

レプリカ [原寸]

屏風、絵図 (大絵図、懐中図、切絵図)、絵巻物、奈良絵本、... etc.

美術調度品 [縮小版]

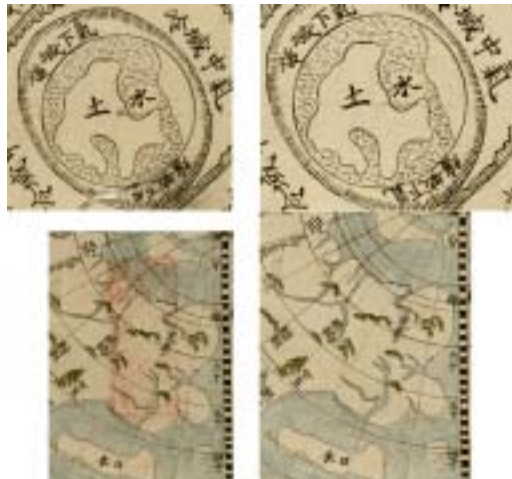
屏風 (机上版)、絵図 (タペストリー)、... etc.

記念品

絵葉書、茶、携帯ストラップ、... etc.

その他

デジタル修復



仙台プロジェクト (仮称) [企画展 + 講演会]



デモ

高精細画像

GigaView [坤輿萬國全圖]

クリックابلマップ・スタータキット

このキットで作られたクリックابلマップを公開された場合は、URLをお知らせ下さい(相互リンク)

- ・ 基礎編
- ・ 上級編

参加者名簿

No	大学名	職名	氏名
1	青森公立大学	主事	濱中美奈子
2	宮城大学	主事	高橋ひろみ
3	秋田県立大学	主事	山内晴絵
4	山形県立保健医療大学	図書館長	矢本美子
5	山形県立保健医療大学	総務専門員	伊藤章子
6	福島県立医科大学	司書	西戸雅博
7	会津大学	主査	佐藤宏
8	群馬県立女子大学	主任	神宮裕子
9	東京都立大学	主事	飯塚顕充
10	富山県立大学	司書	五十嵐奈緒子
11	石川県立看護大学	図書専門員	尾内里吉
12	金沢美術工芸大学	主査	蚊田頼明
13	都留文科大学	図書情報課長	天野松夫
14	静岡県立大学	主査	小池正則
15	愛知県立看護大学	主事	新川裕美
16	三重県立看護大学	主幹	原豊
17	滋賀県立大学	主査	廣川八重子
18	大阪府立大学	主事	木下厚美
19	神戸商科大学	課長補佐	井上葉子
20	姫路工業大学	課長補佐	北村周明
21	神戸市外国語大学	司書	青木堅司
22	県立広島女子大学	専門員	小池美智子
23	広島県立大学	主任主事	後藤朋恵
24	広島市立大学	嘱託	吉岡玲
25	山口県立大学	主査	町田敬一郎
26	宮崎県立看護大学	主査	猪股恵美子
27	宮崎公立大学	主任主事	久長康子
28	岩手県立大学	課長補佐	成田賢悦
29	岩手県立大学	副主幹兼図書係長	大須賀邦男
30	岩手県立大学	主任	清藤正彦
31	岩手県立大学	主事	八重樫恭子
32	岩手県立大学	主事	久保田美雪
33	岩手県立大学	主事	沖河康弘

あしがき

本研修会は、猛暑のなか全国各地から 33 名のご参加をいただき無事成果をあげることができました。

ご多忙にも関わらず本研修会のため講演をお引き受けいただいた講師先生方に心からお礼申し上げます。

今後とも、各大学からのなお一層の協力と理解を得て、ますます充実した研修が開催されることを願いたします。

最後に、公立大学図書館および関係各位の今後のご発展を祈念申し上げます。

公立大学協会図書館協議会
研修担当館
岩手県立大学メディアセンター

公立大学協会図書館協議会研修会報告書 2002

平成 15 年 1 月 31 日

編集・発行 公立大学協会図書館協議会
研修担当館 岩手県立大学メディアセンター

020-0193 岩手県岩手郡滝沢村滝沢字巣子 152 番地 52
TEL : 019-694-2000(代) FAX : 019-694-2001(代)